

Ⅲ「大規模施設」段階（1570年代～1586年）の遺構

1. 街路・街路側溝・暗渠

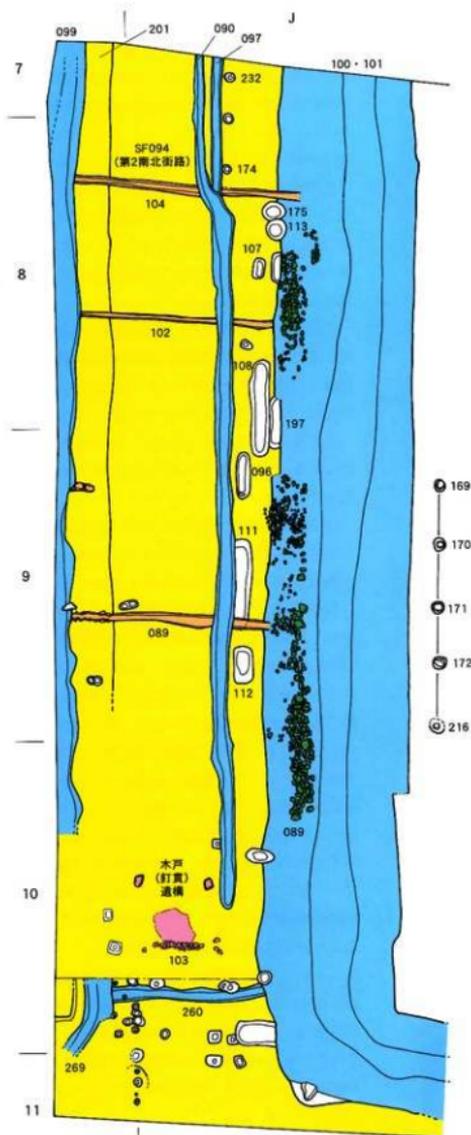
（第318図）

SF094

SF006の下位に位置する道路遺構で、その位置関係から、中世府内のメインストリートである第2南北街路と断定できる遺構である。SF006と同じく、層厚5cm程度の砂質土と粘質土を交互に積み上げる整地層群で構成されている。注目すべきことは、構築当初の道路面に厚さ3～5cm程度のバラス敷きがなされていたことである。バラスは小礫を路面全体に敷きつめたもので、I7・J7区からI9・J9区にかけて、特に顕著に認められた。このバラス敷きについては、構築当初の路面全域に認められるものではなく、一定範囲に限られた場所になされていた可能性が高い。というのは、木戸遺構が存在するI10・J10区付近ではバラス敷きがほとんど認められなかったことや北側の第11次調査では路面にバラス敷きがなされていたという記録が特に認められないからである。

当該段階の道路面には、側溝や木戸遺構、暗渠など様々な施設が構築されている。また、道路東側には廃棄土坑が集中しており、路面として使用頻度の低かった東端部分の空間はゴミ捨て穴の構築場所として利用されていたようである。街路面に構築された遺構の詳細については後述するが、路面の状況については、時間を追って次々と構築される遺構と道路の関係から、

構築当初の
路面にバラス敷き



第318図 「大規模施設」段階の道路・道路側溝・暗渠など(1/160)

4段階の変遷 少なくとも下記の4段階の変遷が設定できるようだ。

①SF094バラス面・木戸遺構・堀SD101・堀SD201……第2南北街路構築当初の状況で、路面にバラス敷きがなされ、I10・J10区に木戸遺構が設置される。東側は「大規模区画施設」の堀SD101、西側は唐人町の堀SD201が掘削され、街路遺構の東西に堀が存在するため、街路側溝は設けられていない。堀SD201は少なくとも1回以上の改修（掘り直し）がなされており、改修は路面のバラス敷きを切ってなされているようである。街路の幅員は約5mである。

②暗渠SX089・SX102・SX104・SX301の構築……構築当初のバラス面の上に盛土がなされ、掘り込みによる大がかりな街路の改修が行われる。この新たな路面を掘り込んで、暗渠SX089・SX102・SX104・SX301の構築がなされる。SD101は機能しているが、SD201は埋設され、街路西側には新たな側溝が構築された可能性が高いが、島津侵攻後に掘られた側溝SD099によって破壊され、遺構としては確認できない。

③側溝S097の掘削……「大規模区画施設」の堀SD101が一定深度まで埋没するに伴い、新たに街路東側に側溝S097が掘削される。街路西側にも側溝が存在していた可能性が高いが、新しい時期の側溝（SD099またはSD010）の掘削により、破壊されている。側溝の掘削により、街路全体が約1.6mほど、西に移動したような状況となる。街路の幅員は約5mで、あまり変化はない。

④側溝S097の改修（SD090・SD091の掘削）・堀SD100……東側溝を鍵手状に屈曲させる改修がなされる。この段階では堀SD101は半分以上埋没しており、堀の機能を喪失した窪地（SD100）となっている。

SF094の年代は16世紀後葉で、周辺の遺構の状況や出土遺物から、①の段階が1570年代頃、④の段階は島津侵攻の直前である1586年頃と想定される。

第319～321図はSF094の出土遺物である。

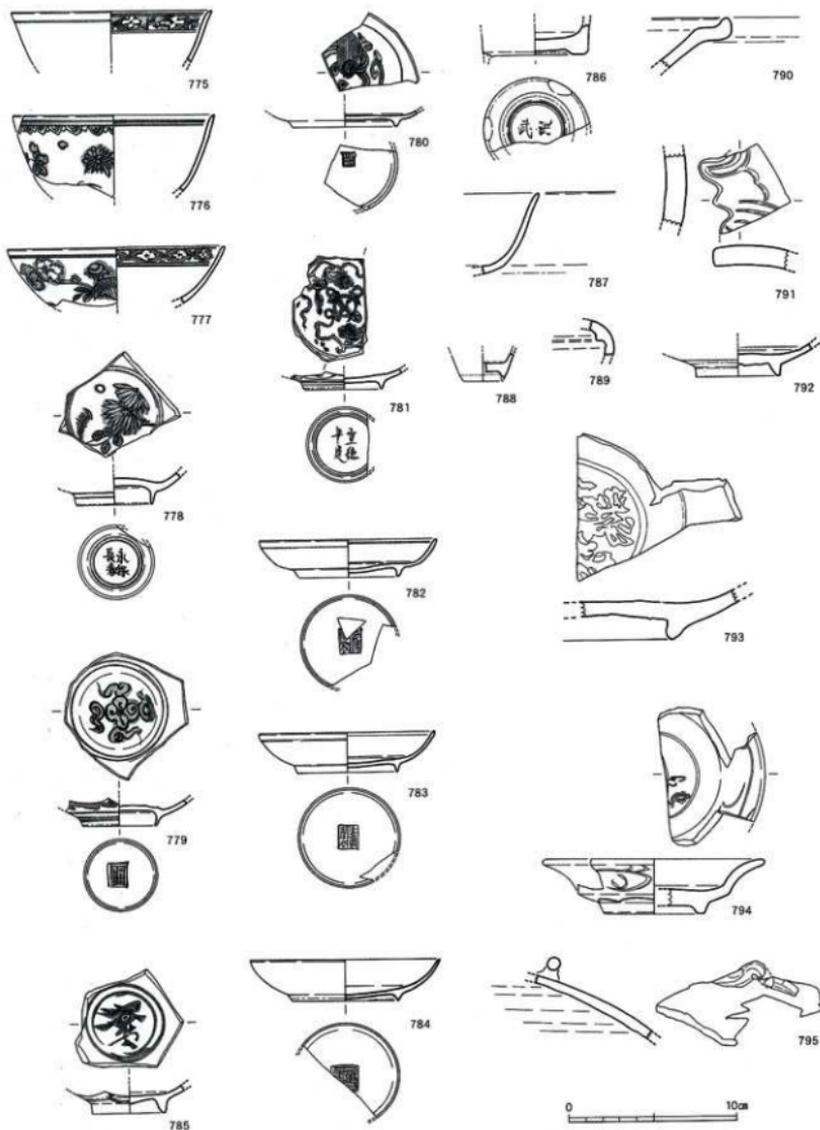
775～784は景德鎮系青花である。775～779は小野分類E群青花碗で、778の内底部には「永保長春」、779の内底部には異体字の裏底銘がみられる。780～784はE群青花皿で、内底部の裏底銘は780が変形「福」字、781が「宣徳年造」、782・783が「精製」、784が「富貴佳器」である。785は漳州窯系青花碗で、内底部に花文を描く。786は外面に瑠璃釉を施す香炉で、景德鎮系の磁器製品である。内面は露胎ではなく、透明釉が施され、内底部には呉須による二重圈線と「洪武□□」銘がみられる。787・788は中国陶磁の白磁で、787は碗、788は森田分類E群の小杯である。789は景德鎮系の磁器で、瓶頸の肩部の破片である。外面に瑠璃釉を施し、内面は露胎となる。790は龍泉窯系青磁盤（大皿）の口縁部である。791は龍泉窯系青磁の大型器台（夜学形器台）の破片で、透かし部付近に相当する破片である。外面に片彫りの文様がみられ、透かしの形状は勾玉状となる。15世紀代の製品である。手持ち勾玉状の透かしを有する大型器台（夜学形器台）の出土事例は寡聞にして知らないが、伝世品としては大分市歴史資料館の購入資料（完存品）¹⁰⁴が当該資料に最も近い。日本列島内で大型器台（夜学形器台）の出土例自体が少ないものであるが、その中でもさらに類例の少ない形状の透かしをもつ資料として、注目しておきたい。792は漳州窯系青花碗の底部で、見込みを蛇の目状に軸刺ぎする。793は龍泉窯系青磁の大皿（盤）で、見込みに刻印による文様が押捺されている。794は龍泉窯系青磁皿で、胴部内外面に片彫りによる文様、見込みに刻印による花文が認められる。15世紀代の製品である。795は中国陶磁の壺で、残存部の外面に把手が貼り付けられている。胴部外面には黒褐釉が施され、内面は露胎となる。796～803は朝鮮王朝陶磁で、796～802は灰青沙器碗、803は片口鉢である。804はタイのメナムノイ窯系四耳壺である。

瑠璃釉
香炉

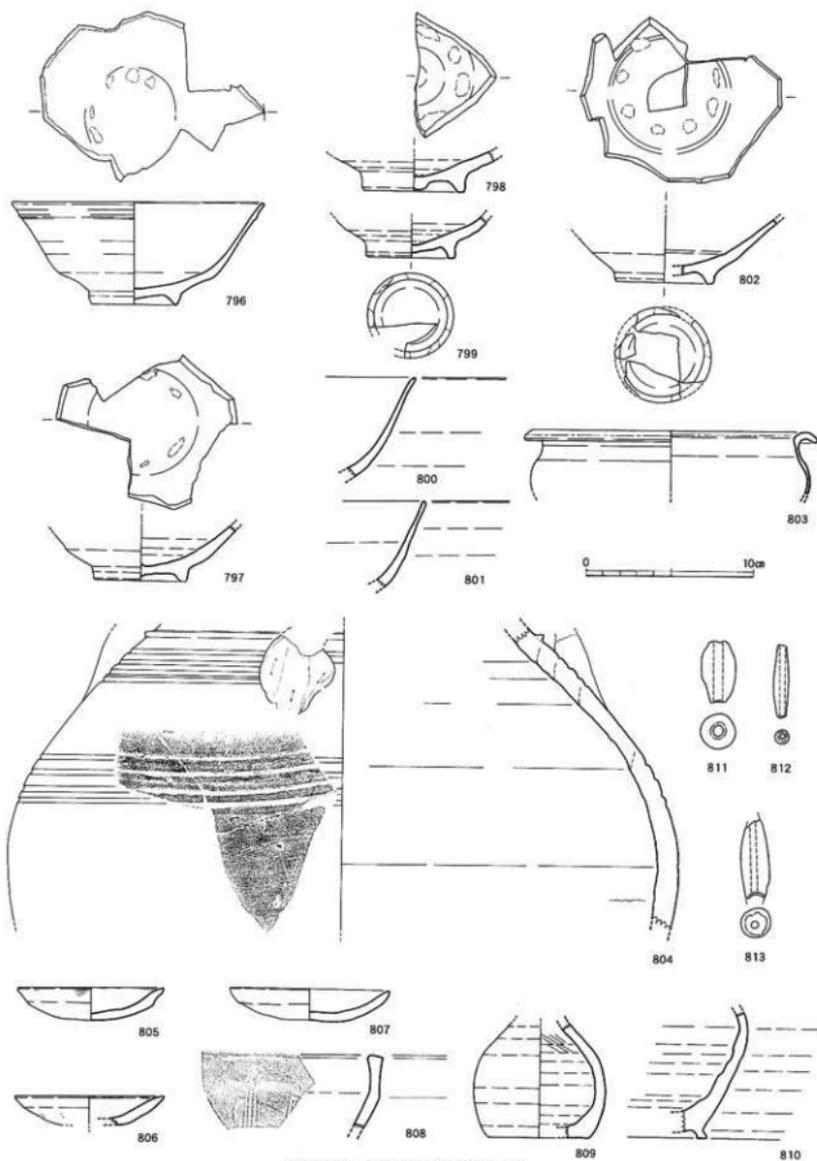
青磁
大型器台
(夜学形器台)

註 104 下記図録に写真が掲載されている。

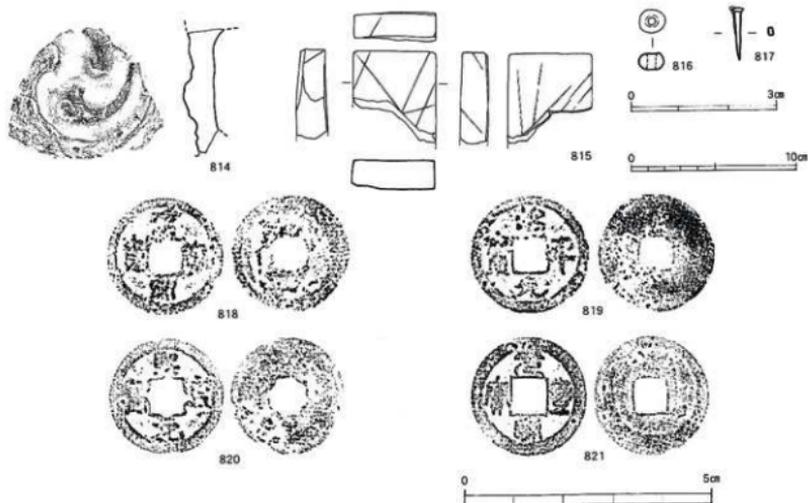
大分市歴史資料館「第24回特別展 都へあこがれ一戦国・織豊期の大夫氏と豊後」(2007年)写真44、28頁



第319回 SF094出土遺物①(1/3)



第320図 SF094出土遺物②(1/3)



第321図 SF094出土遺物③(1/3, 1/1)

805～807は京都系土師器の皿で、805の口縁端部にはススの付着が認められる。808は瓦質土器の播鉢で、内面に4条を一単位とする播目が認められる。809は備前焼で、小型の瓶あるいは徳利であろう。810は須恵器壺で、8～9世紀の所産と思われることから、混入品であろう。811～813は管状土鍾である。

814は軒丸瓦で、瓦当文様は右回転の巴文となる。815は砥石で、表面・裏面・側面・端面のいずれにも条線が認められる。816はガラス小玉、817は鉄製品で、小型の釘である。818～821は銅銭で、銭種・初鋳造年などは巻末の遺物一覧表を参照されたい。この中で、820の方孔に「星形孔」と呼ばれる形態を呈している。

星形孔

SD090・SD091・SD097およびSP176・SP232 (第322図)

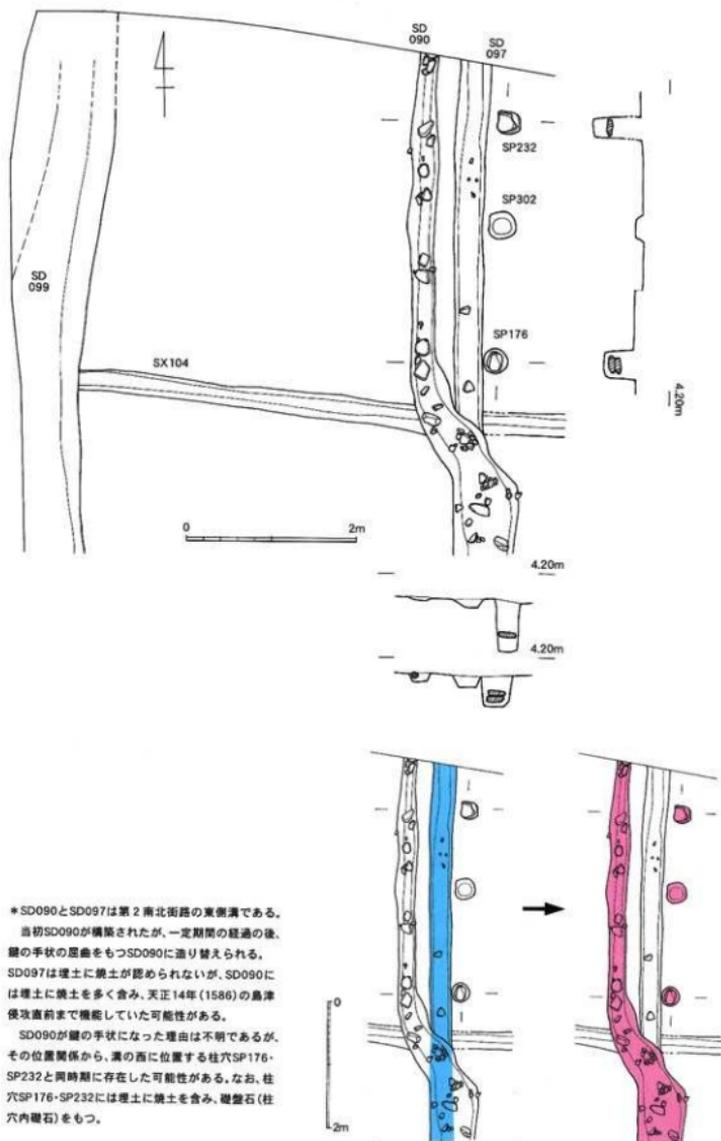
SD090・SD091・SD097は第2南北街路SF094に伴う東側溝で、SD090・SD097はJ7～J8区で、SD091はJ8～J10区で検出された。

SD090・SD091は一連の遺構で、J10区からJ7区へと伸びる側溝をJ8区で西側に屈曲させている。いずれも埋土中には焼土を多く含む。SD091はJ10区で南端部を検出し、これ以上南に伸びていない。

SD097はSD090・SD091と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD097→SD090・SD091となる。埋土中には焼土を含まず、褐色粘質土で構成される。

以上の状況から判断すると、最初に側溝SD097がJ7～J10区付近に構築されていたが、その後、J8区付近で側溝を鍵手状に屈曲させる改修 (SD090・SD091の構築) がなされたことがわかる (第322図下段参照)。何故このような側溝の改修がなされたかは不明である。ひとつの案として、第2南北街路SF094から「大規模施設」に、堀SD100・101を越えてアプローチする「出入口」的な施設が作られた可能性が考えられるが、それを証明することはできなかった。

側溝を
鍵手状に屈
曲させる改
修



* SD090とSD097は第2南北街路の東側溝である。
当初SD090が構築されたが、一定期間の経過の後、
鍵の手状の屈曲をもつSD090に造り替えられる。
SD097は埋土に焼土が認められないが、SD090には
埋土に焼土を多く含み、天正14年(1586)の島津
侵攻直前まで機能していた可能性がある。

SD090が鍵の手状になった理由は不明であるが、
その位置関係から、溝の西に位置する柱穴SP176・
SP232と同時期に存在した可能性がある。なお、柱
穴SP176・SP232には埋土に焼土を含み、礎盤石(柱
穴内礎石)をもつ。

第321図 SD094出土遺物③(1/60, 1/80)

SD090・
SD091は
高津侵攻直
前まで機能
した

SD097からは図示可能な遺物は出土していないが、周辺の遺構の状況などから、その構築年代は16世紀末葉頃に比定される。SD090・SD091からは、京都系土師器や朝鮮王朝陶磁・大形土製品などが出土した。SD090・SD091は埋土に焼土を多く含んでいることから、島津侵攻の直前である1586年頃まで機能していたと想定される。出土遺物の様相もそれに矛盾していない。

なお、後述するが、当該段階の堀SD101は半分以上埋没しており、堀の機能を喪失した窪地(SD100)となっていたようだ。堀SD101が掘削されていた当初は、堀が道路側溝の役割を兼ねていたと思われるが、堀の埋没に従い、堀が側溝の機能を果たせなくなったため、側溝SD097が新たに構築されたということであろう。

柱穴3基
礎盤

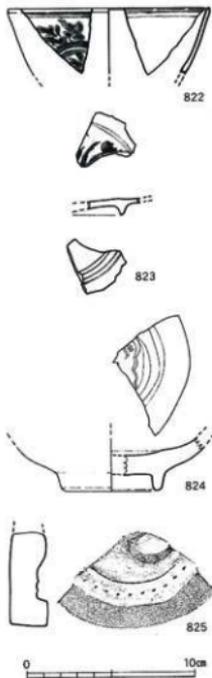
また、SD097の東側で柱穴3基(SP176・SP302・SP232)を検出した。SP232とSP176間の距離は2.9mで、SP232の底面には1段、SP176の底面には2段の礎盤(柱穴内礎石)が設置されていた。また、SP302の内部には礎盤はなかったが、埋土には焼土をわずかに含んでいた。その位置関係から、SD090・SD091と関連する「出入口」的な施設を構成する柱穴である可能性がある。しかし、遺構の位置関係や埋土の状況・遺構の検出状況などから、3基の柱穴とSD097が同時に存在していないことは明らかであるが、SD090・SD091と2基の柱穴が同時に存在していることについても証明はできていない。2基の柱穴からは出土遺物も認められず、詳細な構築時期は不明である。

第323図はSD090の出土遺物である。

822・823は景德鎮系青花で、822は小野分類E群青花碗、823はE群青花皿である。いずれも16世紀後葉に比定される。824は龍泉窯系青磁碗で、見込みには印花(刻印)による文様がみられる。15世紀代の所産である。825は軒丸瓦で、右回転の巴文と小さな珠文が認められる。

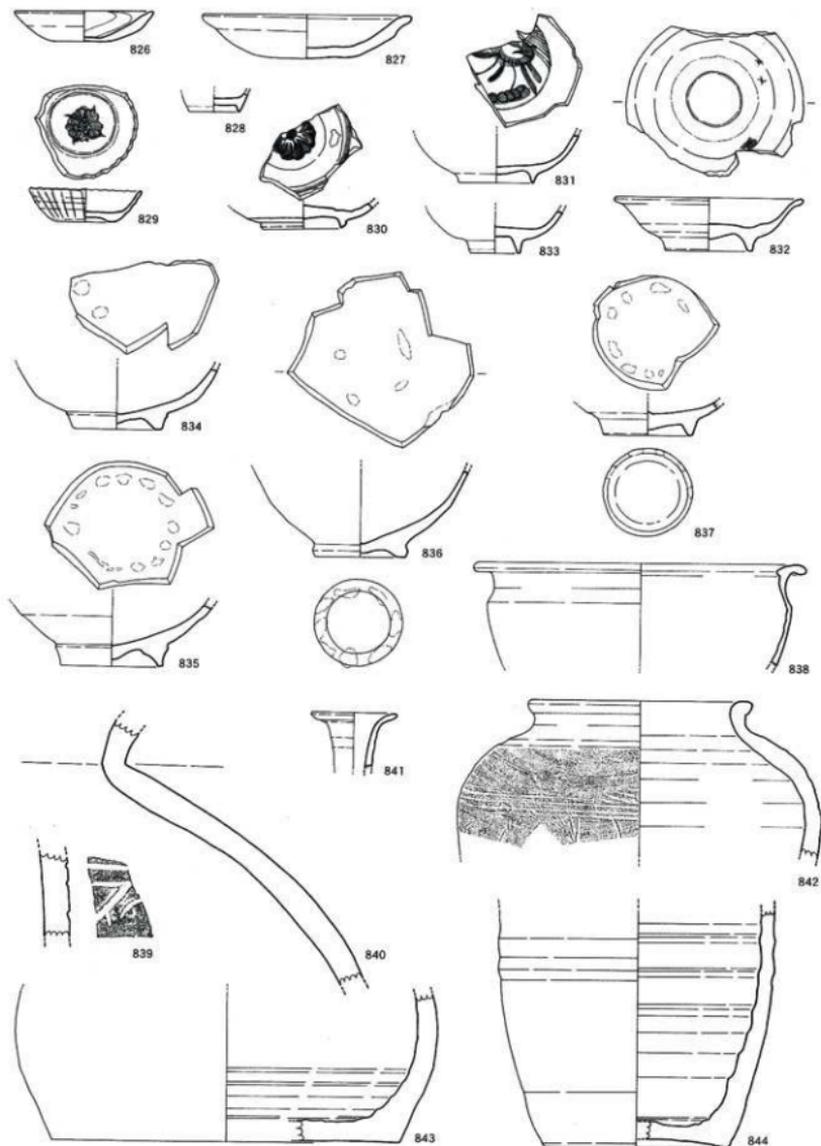
第324・325図はSD091の出土遺物である。

826・827は京都系土師器皿で、器壁が厚く、埴地編年2期から3期の特徴を有する資料である。828は景德鎮系の白磁小杯で、森田分類E群に分類される製品である。829は景德鎮系青花の小皿で、内面に赤色顔料の付着が認められることから、紅皿として使用されたものである。口縁部が輪花となり、底部は碁笥底となる。外面には沈線による鎮文が認められ、見込みは幅2mm程度が蛇の目状に輪刺ぎとなるとともに、その内側に貝須で花唐草文を描いている。830は漳州窯系青花碗で、見込みは蛇の目状に輪刺ぎとなる。831は景德鎮系青花碗である。残存部の外面は無文となり、見込みに貝須で草花文が描かれている。832は中国南部の白磁皿と思われ、見込みは蛇の目状に輪刺ぎとなり、外底部は露胎となる。内面が汚れており、何らかの付着物があったと思われるが、詳細は不明である。833は景德鎮系の白磁碗である。834～837は朝鮮王朝陶磁の灰青沙器碗で、見込みや高台疊付部に目跡が認められる。838は朝鮮王朝陶磁の片口鉢である。839～844は備前焼である。839・840は大甕の破片で、839の外面にはヘラ書き文字(「石か?」)が認められる。841は徳利の口縁部である。842は壺で、外反する口縁部をもち、肩部には横書き平行線文が施されている。843・844は壺の底部から胴部にかけての破片である。

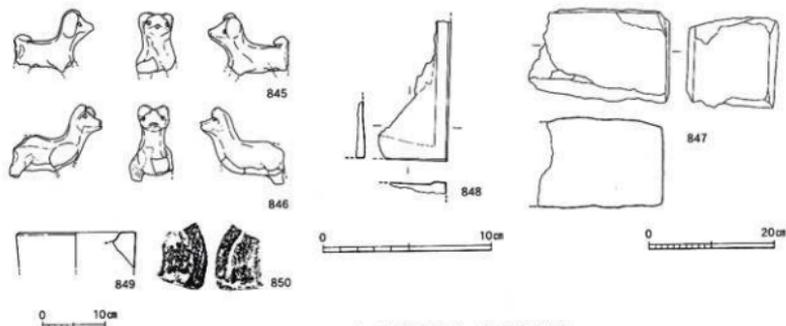


第323図 SD090出土遺物(1/3)

紅皿



第324図 SD091出土遺物①(1/3)



第325図 SD091出土遺物②(1/3, 1/4, 1/8, 1/1)

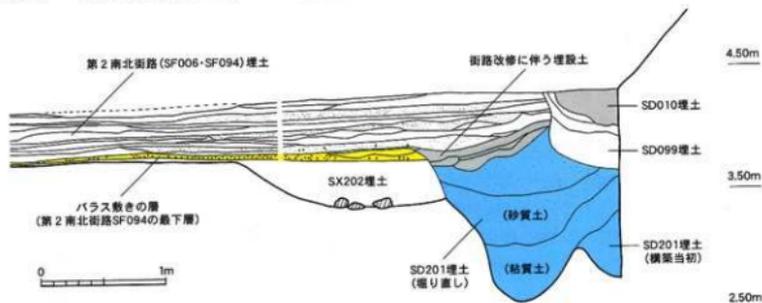
犬形
土製品

845・846は犬形土製品で、中型のサイズに分類される。大坂地域からの搬入品と考えられる。
847は砂岩系の石材を使用した砥石である。848は表面が黒褐色、断面が赤褐色を呈する石材を使用した硯で、輝緑凝灰岩製の赤間硯が二次的な被熱で黒変した資料である可能性が考えられるが、断定できない。849は和泉砂岩を素材とする茶白の上白である。850は銅銭の破片で、表面の「徳」字のみが判読できる資料である。

SD201 (第326図)

17区から110区で検出された堀である。第2南北街路SF094の西側に位置することから、SF094の西側溝の機能も兼ねていたと思われる遺構である。その規模は長さ30m以上、幅1.6m以上、深さ1.4mを測る。土層断面で検討すると、大規模な改修(掘り直し)が少なくとも1回行われており、また第2南北街路SF094の最下層のガラス敷き層を切って構築された後、街路の改修によって埋め戻されたことが判明する。さらに、性格不明の遺構SX202(14世紀後葉～15世紀前葉)を切って構築されていること、「町屋段階」(1587～1600年代)の街路側溝SD099・SD010から切られていることも確認できる。埋土は堀の機能時の推定される粘質土層と意図的な埋め戻し(埋設)時の砂質土層群、街路改修時に伴う埋設時の土層群の3層群に大別できる。いずれの層からも出土遺物は少なく、特に獣骨などの自然遺物は全く出土していない。第2南北街路SF094の東側溝の機能も兼ねていたと思われる堀SD101(後述)と比較すると遺物の量・質とも僅少で、際だった対照を見せ

遺物少量



第326図 SD201土層断面図(1/40)

ている。なお、I10区以南のSD202の展開については、後述する木戸間連遺構を現地保存するため、掘り下げを行っていないことや「町屋段階」の大型土坑SK098によって破壊されていると推定されるため、詳細は不明である。

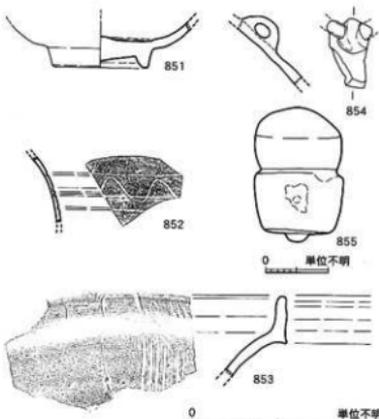
唐人町の区画の堀

構築時期は16世紀後葉～末葉

遺構の性格としては、その位置関係から、第2南北街路と「唐人町」との境界に存在した区画の堀であったと推定される。また、遺構の構築時期は、切り合い関係や出土遺物から16世紀後葉から末葉に比定される。

第327図はSD201の出土遺物である。851は龍泉窯系青磁碗の底部である。見込みにわずかな段が認められ、外底部は露胎となる。15世紀代の製品である。852は器壁が薄く、胴部外面にヘラ描きによる直線文と波状文が認められる。小破片のため、器種不明であるが、朝鮮王朝陶磁である可能性が高い。853は備前焼の鉢鉢で、口縁部の形態から、中世5期bから中世6期（15世紀末葉から16世紀前葉）に分類される資料である。854は瓦質土器羽釜の把手の部位の破片である。貫通孔の部分に破損した鉄環の一部が残存する。855は凝灰岩製を素材とした五輪塔の空風輪である。

鉄環が残存



第327図 SD201出土遺物(1/3、1/8)

SX104・SX102・SX301・SX089 (第328図)

暗渠

第2南北街路を東西方向に横断する形で構築された「暗渠」遺構である。I7・J7区に位置するSX104とSX102、I9区に位置するSX301、I9・J9区に位置するSX089の4つの遺構がこれに相当する。

最も残りのよいSX104を例に挙げて、その構造を検討してみよう。まず、上面幅30cm、深さ25cmの溝状の掘形を路面上に掘削する。掘形底面は西から東へ向かって、すなわち唐人町側から堀SD101の方に向かって傾斜している。この掘形内に太さ約15cmの竹筒を設置する。竹筒は掘形底面ではなく、底面からやや浮いた場所に約20度の傾きで設置されており、掘形底面の傾きより、竹筒の傾きの方が大きな傾斜をなしている。発掘調査時には竹筒は腐って無くなっていたが、竹筒の周りに鉄分が付着していたことや掘形内の土層埋土が竹筒の周りだけ正円状に異なっていたことから、明確に判別が可能であった。以上のことから、これらの遺構は、第2南北街路西側の街路側溝をからオーバーフローした排水を堀SD101に流すために構築され、内部に竹管を使用した暗渠と断定できるものである。掘形埋土からは中国陶磁の青花等が少数出土している。

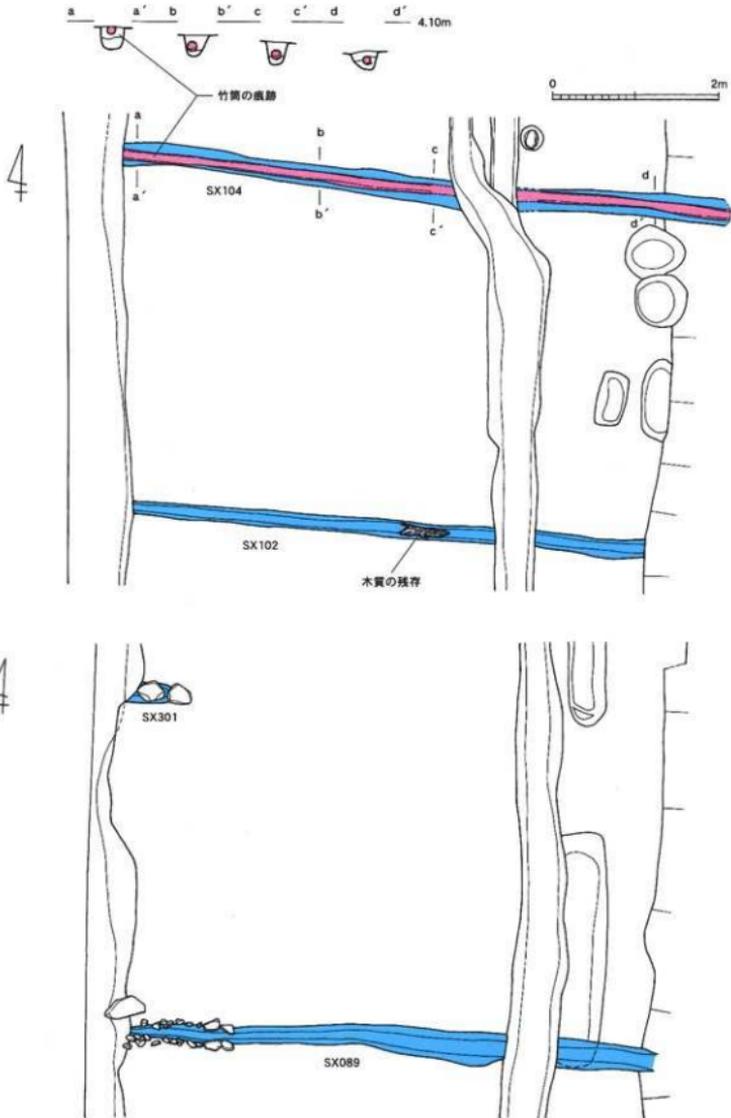
竹筒を使用した暗渠遺構

SX102も同様の構造を呈するが、竹筒部分の残りが悪く、掘形底面付近に竹筒の痕跡と思われる鉄分の付着が、僅かに認められたのみである。

SX301についても、同様な遺構と思われるが、さらに掘形部分の残りが悪く、溝状の掘形とその上面に配置された小型の礫2個を確認するに留まった。

SX089では溝状の掘形を確認し、西側を石列で補強している状況が確認できたが、調査の初期段階で遺構を検出したため、埋土を一気に掘り下げてしまい、竹筒の痕跡は確認できなかった。

以上の暗渠遺構は、4基とも第2南北街路の初期の路面であるバラス敷きより15cmほど上位に位



第328図 暗渠SX104・SX102・SX089実測図(1/60)

置しており、第2南北街路の改修時に敷設されたと推定される。東側は堀SD101の側面を破壊する形で、掘形が掘削されている。また、これらは前述した街路側溝SD090・SD097によって切られており、島津侵攻時には完全に機能を失っていたことが判明する。また、西側については「町屋」段階の街路側溝SD099の構築により破壊されている。

以上のような遺構の状況や出土遺物から、暗渠遺構4基の構築時期は16世紀後葉から末葉に比定される。暗渠遺構からの出土遺物は第329図に示した。856はSX089から出土した京都系土師器皿である。

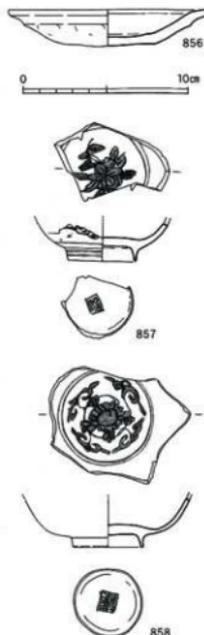
857・858はSX104から出土した景徳鎮系青花で、いずれもE群青花碗である。2には「福」、3には「富貴佳器」の裏底銘が認められる。

SD260・SD269 (第330図)

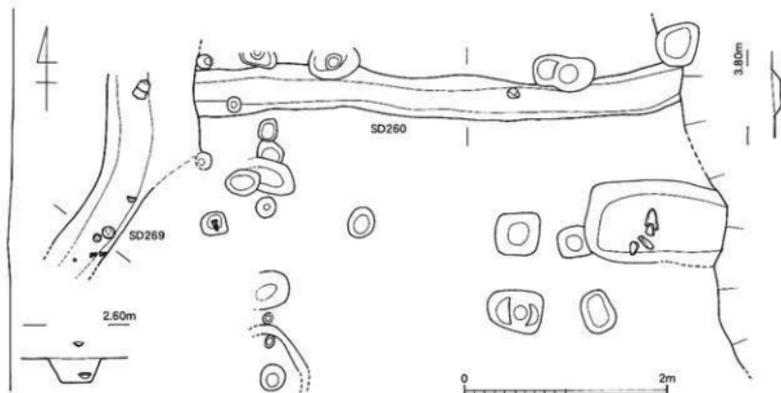
SD260はI11・J11区、SD269はI11区に位置し、いずれも第2南北街路に伴う整地層をすべて撤去した後に検出された溝である。

SD260は東西方向の溝で、長さ5.0m、幅0.5m、深さ10cmを測る。西側はSD269と連結する可能性が高く、東側は堀SD101によって切られている。SD269は南北方向に延びる溝で、南側は西方向にやや屈曲する。その規模は長さ2.2m、幅0.5m、深さ20cmを測り、北側は後述する木戸遺構を現状保存したため未検出である。名ヶ小路や第2南北街路の初期段階の側溝である可能性が考えられるが、切り合いによる破壊や未検出の部分が

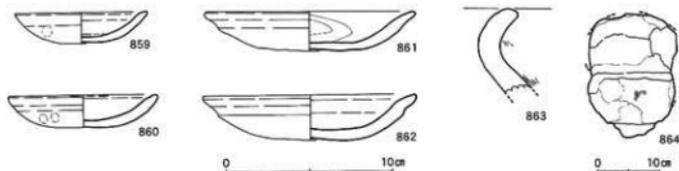
初期段階の側溝？



第329図 SX089・SX104出土遺物(1/3)



第330図 SD260・SD269実測図(1/50)



第331図 SD269出土遺物(1/3, 1/8)

多いため、詳細は不明である。SD260からは図示可能な遺物はないが、SD269からは完形資料を含む京都系土師器皿や五輪塔の空風輪が出土している。

遺構の状況や出土遺物から、いずれの溝も16世紀後葉に比定される。

第331図はSD269からの出土遺物である。

859～862は京都系土師器の皿である。863は瓦質土器壺の口縁部で、内外面にナデを施す。864は凝灰岩を素材とする五輪塔の空風輪で、外面に墨書の痕跡が認められるが、判読できない。

(2) 木戸(釘貫)遺構(第322図)

110・J10区で検出された遺構で、その位置と構造から木戸(釘貫)と考えられるものである。遺構は第2南北街路のバラス面とほぼ同じレベルで検出されたことから16世紀後葉に比定され、初期段階の第2南北街路に伴うものである。

木戸遺構は、礎石2個と石列SX103および石列の北側に位置するバラス敷きで構成される。

礎石

礎石は2個とも安山岩で、西側は長さ40cm、幅26cm、東側は長さ36cm、幅28cmの礎を用い、表面が平坦に加工されている。検出状況の写真によれば、礎石の周囲に若干の土色の変化が認められたものの、断ち割り調査等を実施しておらず、掘形の存在の有無や礎石の厚さなどについては未確認である。

石列
SX103

石列SX103は長さ約1.65m、幅約20cmで、10数個の礎で構成されている。石列は上下2段が確認されており、少なくとも1回の改修が行われていることがわかる。なお、SX103の西には小石や陶磁器の破片が東西約95cm、南北約70cmの範囲に分布していた。陶磁器の破片が、何故このような状態で出土したのかは不明である。

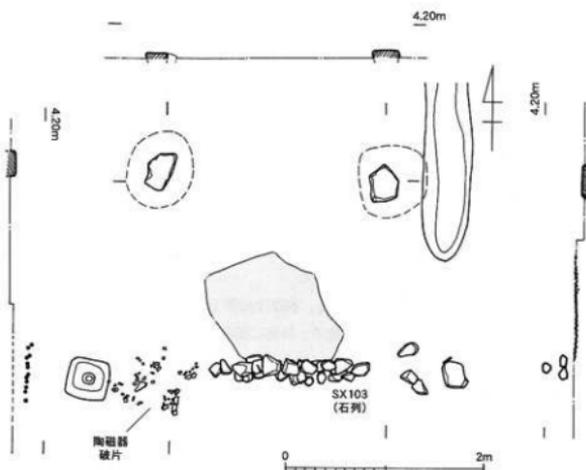
バラス敷き

バラス敷きは石列SX103北側に位置するもので、東西約1.15m、南北約1.0mの範囲に小石や砂利の広がり確認された。

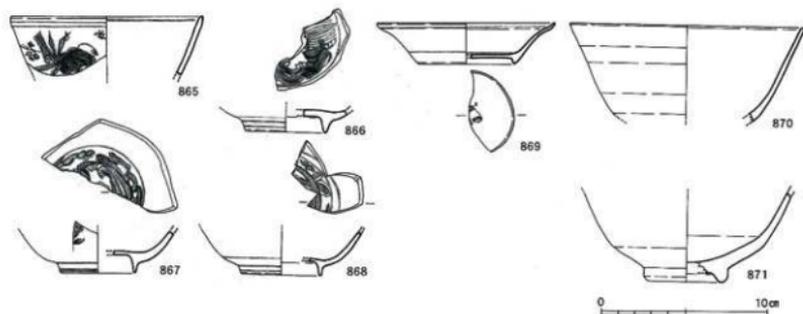
中世大友府内町跡では、当該遺構の他にも第2南北街路で2箇所、第4南北街路で1箇所、木戸または木戸の可能性が高い遺構が検出されている¹⁹⁾が、いずれも柱穴または柱穴列を主要施設とするもので、礎石(あるいは柱穴内礎石)を有するものではない。このことに鑑みて、当該遺構はこれ以上の掘り下げを行わず、埋め戻しによる現状保存を行うことになった。

しかしながら、この遺構の下位に存在すると推定される堀SD201の南側の展開や溝SD260・SD269の性格などは不明となった。

註 19) 第2南北街路では府内町跡第12次調査および第52次調査、第4南北街路では府内町跡第27次調査で木戸遺構が確認されている。
大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内』4(第1分冊)(2006年)95～97頁
大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内』15(2010年)250～252頁
大分市教育委員会『大友府内9 都市計画道路六坊新中島線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』(2007年)



第332図 木戸(釘貫)遺構実測図(1/50)



第333図 SX103出土遺物(1/3)

第333図は石列SX103の西側から、破片の状態でありながら、まとめて出土した遺物である。

865～868は景徳鎮系青花で、小野分類E群青花碗である。869も景徳鎮系青花で、口縁内部が緩やかに屈曲し、高台と胴部下半部の境界に屈曲の変化点を持たず、内傾する高台を有する青花皿である。小野分類にない器形をもつ製品である。内底部には裏底銘が描かれている。

860・871は朝鮮王朝陶磁の灰青沙器碗である。

(3) 堀

SD100・SD101・SX087 (第334・335図)

J7区からJ10区にかけて検出された大規模な堀である。堀の規模は上面幅約5.0m、深さ約2mを測る。第11次調査のSD44、第72次調査のSD025と同一遺構で、南側では第72次調査SD025と接続し、西に向かってL字状に屈曲することが確認されている。

埋土の状況 (第334・335図) を観察すると、数回にわたる堀の底面が確認できることから、少なくとも2回以上の堀直しが認められる。埋土下位には、堀の機能時に堆積した青灰色の粘質土が厚く堆積しており、粘質土中に僅かに砂質土を挟んでいる状況が確認できる。砂質土は雨水等による周辺からの流入土であるとともに、堀内に若干の流水の痕跡があつたことを示している。これによって、堀は水堀であったことが断定できる。堀内の水については、いずれかの方向に流す意図はあつたのかもしれないが、顕著な流水の痕跡は認められず、滞水の状況が続いていたとみられる。

堀の内部からは、陶磁器・土器類や瓦、礫などとともに、植物残滓である獣骨・貝類、木製品が大量に出土した。中世段階の当時からすれば、出土遺物は日常生活に伴って生じるゴミであり、その中に食物残滓である獣骨・貝類が大量に含まれていたことから、季節によっては、堀の水が耐え難いほどの悪臭を放っていたことも想像できるであろう。獣骨類や貝類は、ブロック状に捨てられた状況で出土したこともある。土層の状況や遺物の接合関係から、堀の遺物の大半は第2南北街路側から廃棄されたものと推定されることから、堀にゴミを廃棄したのは第2南北街路の西に居住する唐人町の住民であろう³⁶。この堀から出土する遺物には、金箔土師器皿や真鍮製鍔・杓子 (第11次)・鍔金唐枕 (第80次)・ガラス製杯 (第88次) など優品が多く、注目される。

第2南北街路は、路面上に粘質土と砂質土を交互に積み上げることによって、路面を補修・再生しているが、この路面の補修時に積み上げた整地土の一部が、堀内に流れ込んであることがわかる。従って、路面の補修ごとに、堀は少しずつ浅くなり、その深さを減じていることも確認できる。

このような堀の埋土の状況から、当該遺構の掘り下げに当たっては、①堀が掘削され、水堀としての機能が継続していた時の堆積土をSD101、②堀が機能を完全に停止し、大きな溝状の窪地となった状態の堆積土をSD100として、遺物の取り上げを行った。SD101とSD100の間には、天正14年 (1586) における島津侵攻時の焼土層 (SX085) が挟んでいる地点 (第334図下段) が認められ、おおむねSD101は天正14年以前、SD100はそれ以降の段階に比定できる。また、堀SD101の埋土の中で、J9区からJ10区にかけて頭大から拳大の礫が多量に堆積する地点があり、これをSX087として遺物を取り上げた。堆積の状況から、SX087の堆積は島津侵攻時の焼土層が第2南北街路に積み上げられる時期と同時、またはその直前と思われる。

以上から、堀の堆積状況と遺構番号の関係は、次のようになる。

SD101→SX087→島津侵攻時の焼土層 (SX085) →SD100→ (近世整地層)

SD101には埋土下位に漳州窯系青花が含まれており、その掘削年代の上限は、最大限に考えても1570年代頃までしか遡らない。島津侵攻時の天正14年 (1586) 頃には、当該遺構は水堀としての機能を完全に失っていたと思われる。従って、堀が機能していたのは、20年弱程度の短い時間だったことが推定される。

2回以上の堀直し

堀は水堀

獣骨・貝類の大量出土

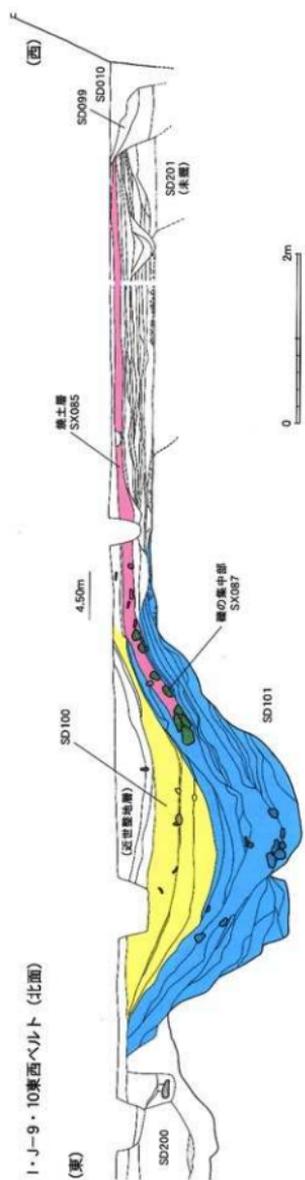
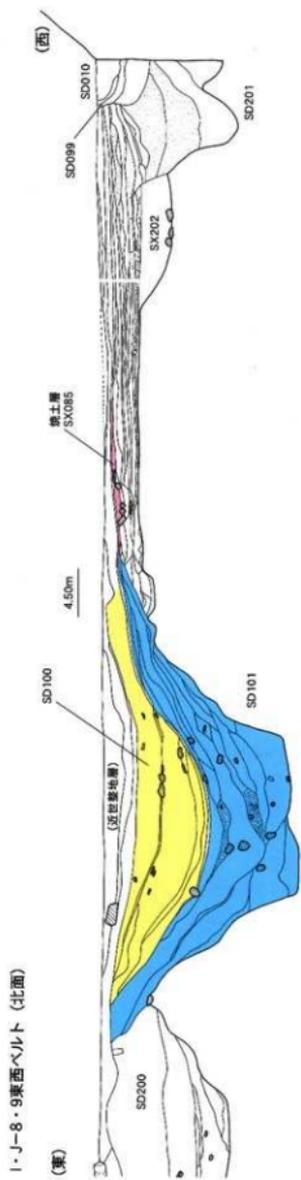
唐人町の住民による廃棄

SD101・SD100

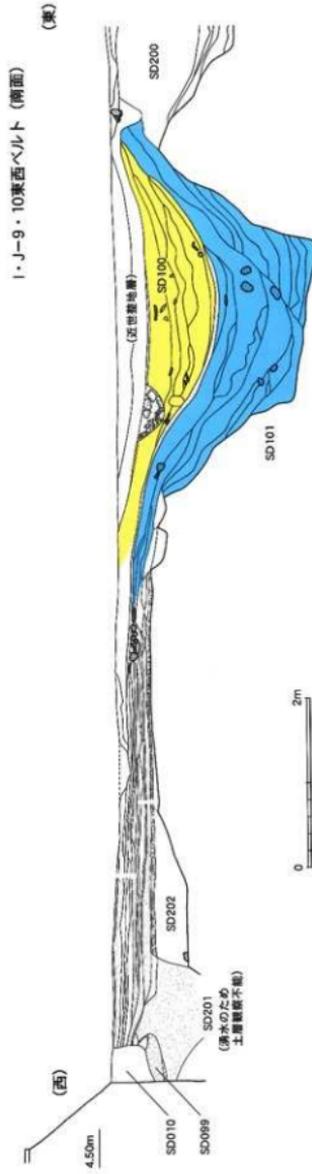
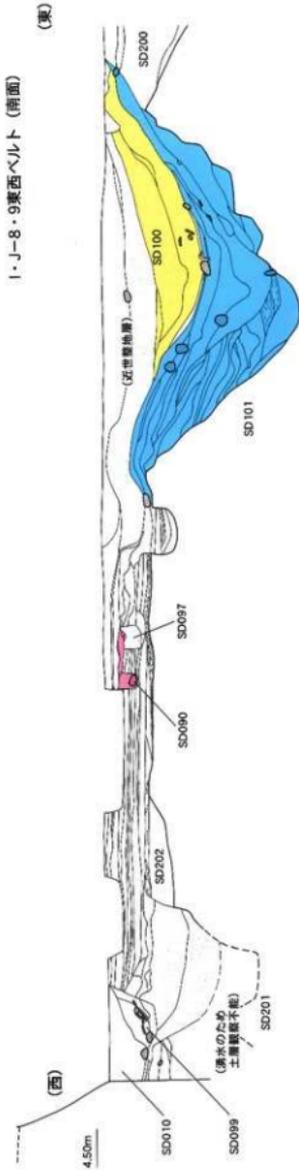
堀の集中部SX087

堀は短期間しか機能していなかった

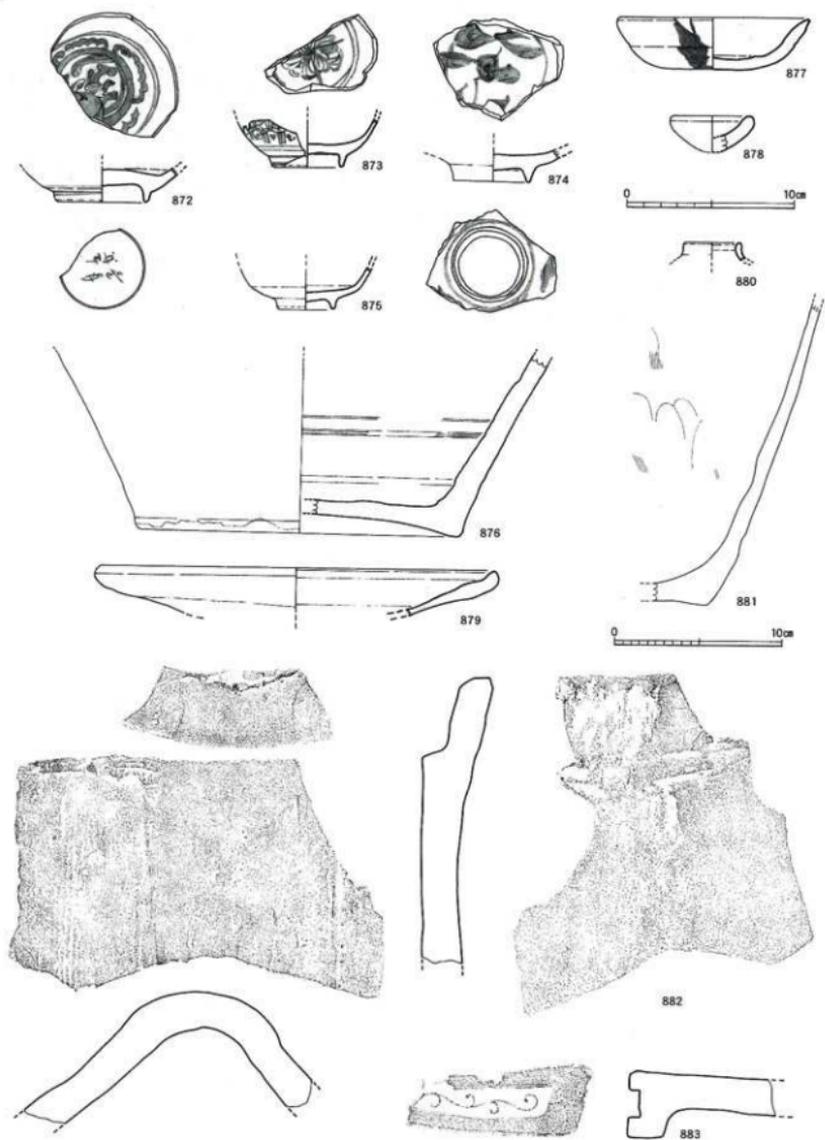
註 (36) 府内町跡第14次調査 (「唐人町」の領域) で出土した華南三彩動物水注の破片が、第11次調査SD44出土の破片と接合した。また、第80次調査SD101出土の破片 (第352図1109) も、接合しないが、これらの遺物と同一個体のものである。堀に捨てられた遺物の一部または大半が、もともと唐人町の住民のものであったことを検証する事実である。
大分市教育委員会『大友府内6～中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書～』(2003年) 86頁



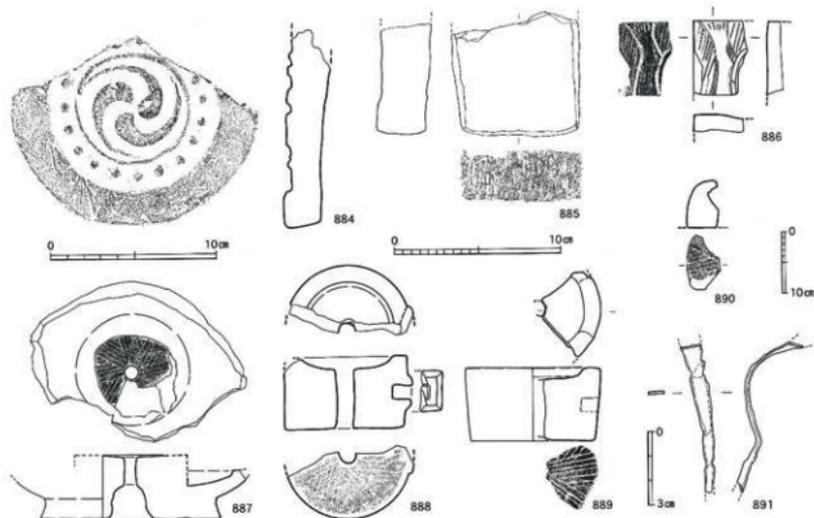
第334図 掘SD100・SD101土層断面図①(1/60)



第335図 堀SD100・SD101土層断面図②(1/60)



第336図 SX087出土遺物①(1/3)



第337図 SX087出土遺物②(1/3, 1/8, 1/2)

SX087
出土遺物

第336・337図で提示したものは、堀の埋土の一部を構成するSX087（竈の集中部）からの出土遺物である。

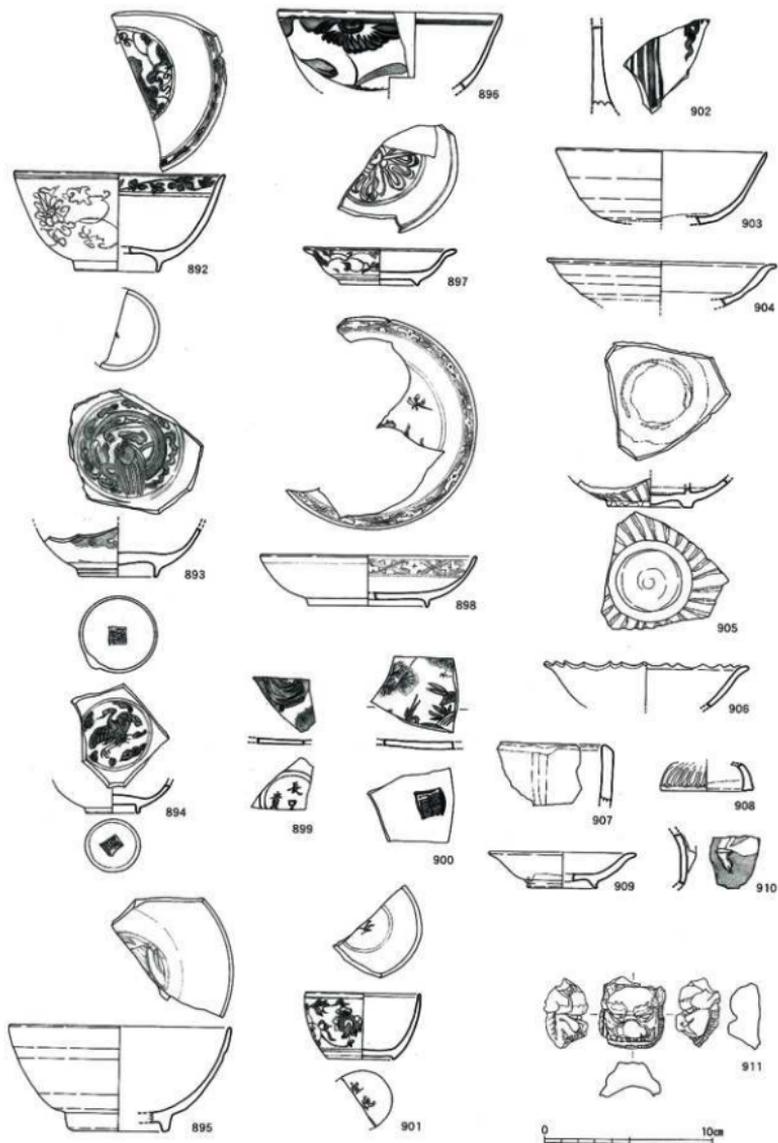
872・873は景徳鎮系青花で、小野分類E群青花碗である。872の内底部には「富貴佳器」銘が描かれている。874は漳州窯系青花碗、875は中国陶磁の白磁碗である。876は中国陶磁の壺の底部で、外面に褥軸が施され、内面は露胎となっている。877は京都系土師器で、器高が深い環状の器形を呈する。外面にススの付着が認められる。878は取瓶の破片である。879～881は備前焼。879は鉢、880は小型の蓋の口縁部、881は大甕の胴部である。882～884は瓦類で、882は伏間瓦、883は宝珠唐草文軒平瓦、884は巴文軒丸瓦である。883・884はセットとして使用されたものである可能性が高い。885は砂岩系の石材を使用した砥石で、置砥として使用されたものであろう。886は輝緑凝灰岩を素材とする赤間硯で、外面に沈線による彫刻がなされている。887～890は和泉砂岩を素材とする茶臼で、890は破片のため不明であるが、887は下臼、888・889は上臼である。891は青銅製の金属製品であるが、破片のため、用途不明である。

SD100
出土遺物

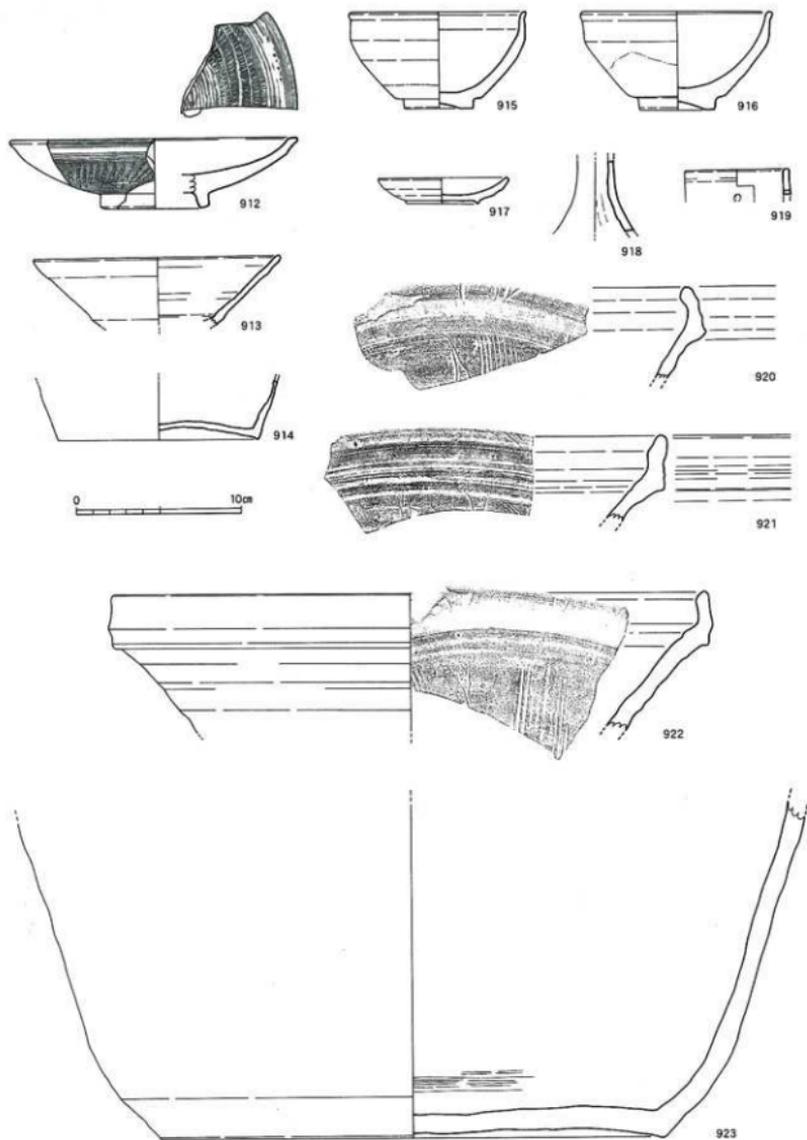
青花

第338～342図は、SD100（堀が機能を停止し、大きな溝状の窪地となっていた段階に堆積した埋土群）からの出土遺物である。

892～894は小野分類E群青花碗（景徳鎮系）で、892は外面に毛彫り文様を有している。外底部には裏底銘があり、892は欠損により不明、893・894は具体字銘である。895は外面が無文となり、見込みに文様を描く。底部が欠損しているため、器形の把握が困難であるが、小野分類C群青花碗であろうか。896は漳州窯系青花碗で、外面に花文、口縁内面に一条の圓線を描いている。897～900は景徳鎮系青花皿で、897は小野分類B1群青花皿、898～900はE群青花皿である。899・900には裏



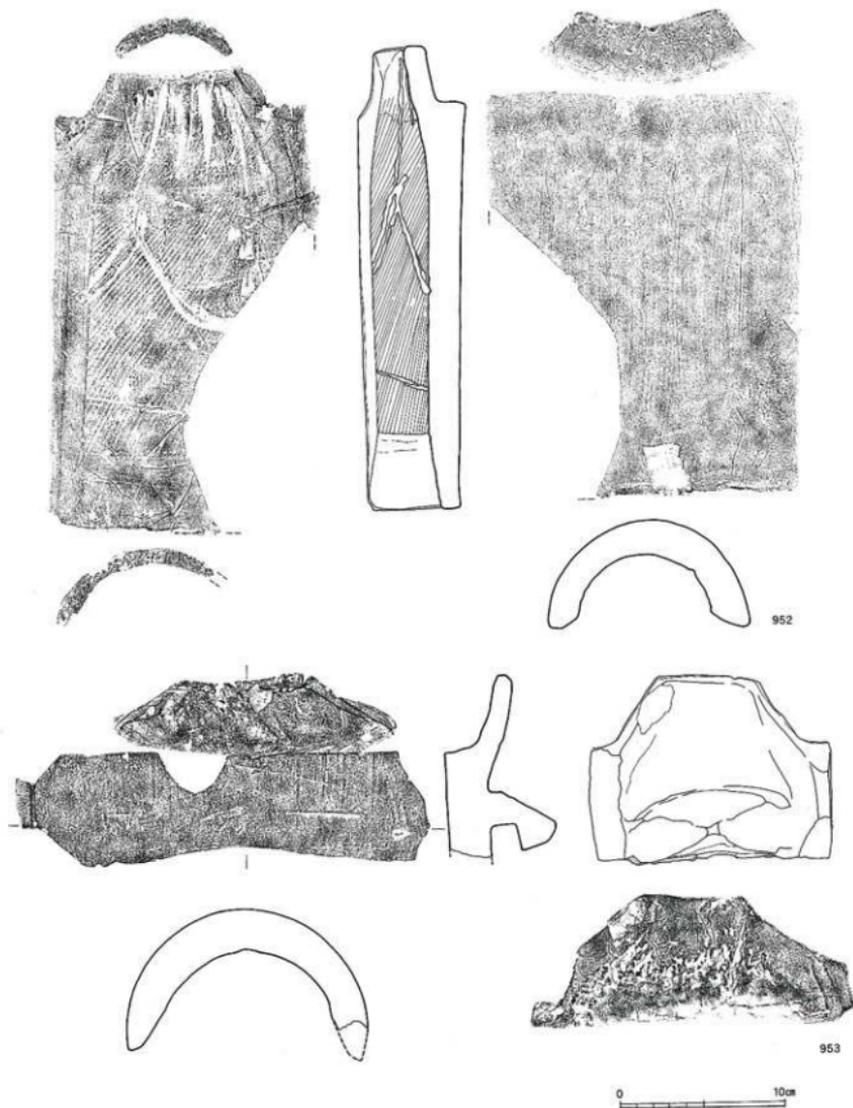
第338図 SD100出土遺物①(1/3)



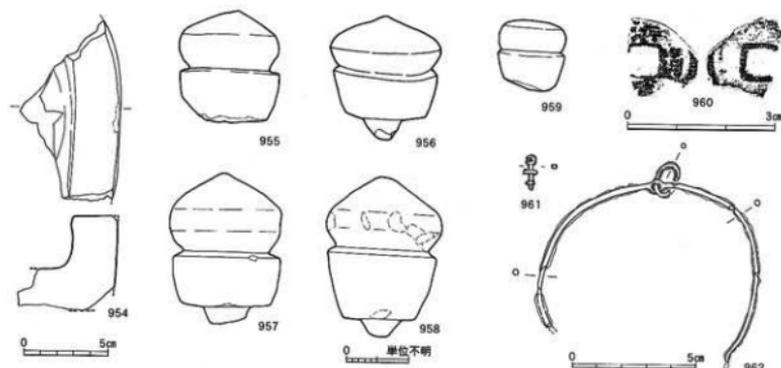
第339回 SD100出土遺物②(1/3)



第340図 SD100出土遺物③(1/3)



第341図 SD100出土遺物④(1/3)



第342図 SD100出土遺物⑤(1/3, 1/8, 1/1, 1/2)

- 底銘が認められ、899は「口貴長口」、900は「富貴佳器」が変形した異体字銘である。901は景德鎮系青花の小杯で、外面に花文、外底部に「宣徳□□」銘を描く。見込みに文様が認められるが、欠損により不明である。902は小破片であるが、注目すべき資料で、元青花の梅瓶である。外面に描かれているのは胴部下半のラマ式蓮弁の一部と推定される。内面は露胎となる。製作年代は14世紀後半であるが、16世紀後葉以降に廃棄されている。
- 元青花梅瓶
- 白磁 903～909は中国陶磁の白磁で、種や製作技法の特徴から、いずれも中国南部製品である可能性が高い。903は碗で、見込みと高台周辺が露胎となる。904は皿で、底部を欠損する。905も白磁碗で、外面に刻線による蓮弁文が描かれており、見込みと高台付部付近が露胎となる。また、見込みに重ね焼きの痕跡がみられる。906は皿で、口縁部が輪花となる。907は口縁部の破片であるが、口縁部が正円ではなく、輪花となる可能性が高い。掛花入などの器形に復元される可能性が考えられるが、小破片のため、断定できない。908は小型の合子の蓋で、型打ちによって外面に蓮弁文が描かれている口縁内面の端部付近が露胎となる。909は青味を帯びた白磁釉が施されている皿で、高台付近が露胎となる。白磁皿としたが、釉色の状況は青磁といってもよいような製品である。
- 華南三彩・羯輪陶器 910は華南三彩で外面に緑釉と黄釉が施されている。把手が剥落した痕跡があり、水注などの器形を呈する製品であろう。911は外面に羯輪が施されている陶器の製品で、獅子を象った部位である。破片であるため、器形は不明である。
- 朝鮮王朝陶磁 912～913は朝鮮王朝陶磁である。912は象嵌青磁の皿で、15世紀代の製品である。913は灰青沙器碗、914は舟徳利で、16世紀代の製品である。
- 瀬戸美濃焼陶器 915～917は瀬戸美濃系陶器で、915・916は天目碗、917は皿である。917は内面が二次被熱により、荒れていることから、灯明皿として使用された可能性が高い。
- 備前焼 918～923は備前焼である。918は德利（瓶）の頸部の破片、919は口縁部に貫通孔をもつことから、掛花入である。920～922は榴鉢の口縁部、923は大甕の底部である。
- 土器・土製品 924～925は土師質土器皿で、924～929は京都系土師器の皿、930～935は在地系のロクロ目土師器の皿である。929の京都系土師器皿は口縁部のナデがほとんど認められなくなっており、期的に新しい属性をもっている。
- 936はフィゴの羽口で、残存する先端部には被熱による変色が顕著に認められる。
- 937は弥生土器の壺の口縁部で、混入品である。鈎状を呈する口縁の側面には刺突文が認められる

とともに、貫通孔が穿たれている。

938・939は瓦質土器風炉で、938の外面にはスタンプ文と沈線文、939の外面にはスタンプ文と円形貼付文・凹線文が認められる。940・941は管状土錘である。

瓦

942～953は瓦である。942～944は巴文軒丸瓦、945～948は菱形唐草文軒平瓦、949は小破片のため文様不明の軒平瓦、950は宝珠唐草文軒平瓦、951は蓮華唐草文軒平瓦である。952は丸瓦で、凹面に糸切り痕（コピキA）や内叩き痕、吊紐痕が認められる。吊紐痕には大きく弧状を描くものと直線的なものの2種が認められるようである。953も丸瓦で、凹面に滑り止めのための横線が設けられている。954は鬼瓦の破片である。

石製品・
銅鏡・
金属製品

955～959は凝灰岩を素材とする五輪塔の空風輪である。960は銅鏡の破片で、初鑄造年が洪武元年(1368)の「洪武通寶」である。961・962は用途不明の鉄製品である。

SD101出土遺物（第343～400図）

水堀SD101の埋土中から出土した多量の遺物を、以下で報告する。

景徳鎮系
青花

第343～347図は景徳鎮系青花の製品である。

963～991は青花碗である。

このうち、963・964は大振りのお椀を呈するもので、口縁部が端反りとなり、底部は饅頭心の形状を呈することなく、平坦な断面形となる。963の外面には毛彫り文様を有し、外底部には「萬福収同」銘が認められる。964の裏底銘は異体字銘である。963・964とも小野分類の中には該当する器形がないものである。

965～988は小野分類E群青花碗（饅頭心碗）である。このうち、965～967は大振りのお椀を有するもので、965・966の外底部には異体字銘、967の外底部には「福」字銘が描かれている。968～988は中型のお椀をもつもので、974の外面には毛彫り文様があり、984の内面には型打ち（印花）による花文が認められる。裏底銘があるものは、968・968・981・983・987の異体字銘、979・980の「萬福収同」で、973は欠損により判読不明である。988は饅頭心碗の形骸がやや退化しており、底部の中心部の厚みがやや厚くなっている。外底部に異体字銘が認められる。989は五彩碗の口縁部であろう。990は口縁内面のみ一条の圓線が認められ、高台付近が露胎となる。991は口縁部が端反りとなり、口縁内外面と胴部下半部にそれぞれ一条の圓線が描かれている。

992～995は小杯で、口縁部が端反りになる形態を呈する。992の外面には花文、993の外面には鳥枝文、995の外面には龍文が描かれており、992の外底部には異体字銘、994の外底部には「大明年造」銘が認められる。

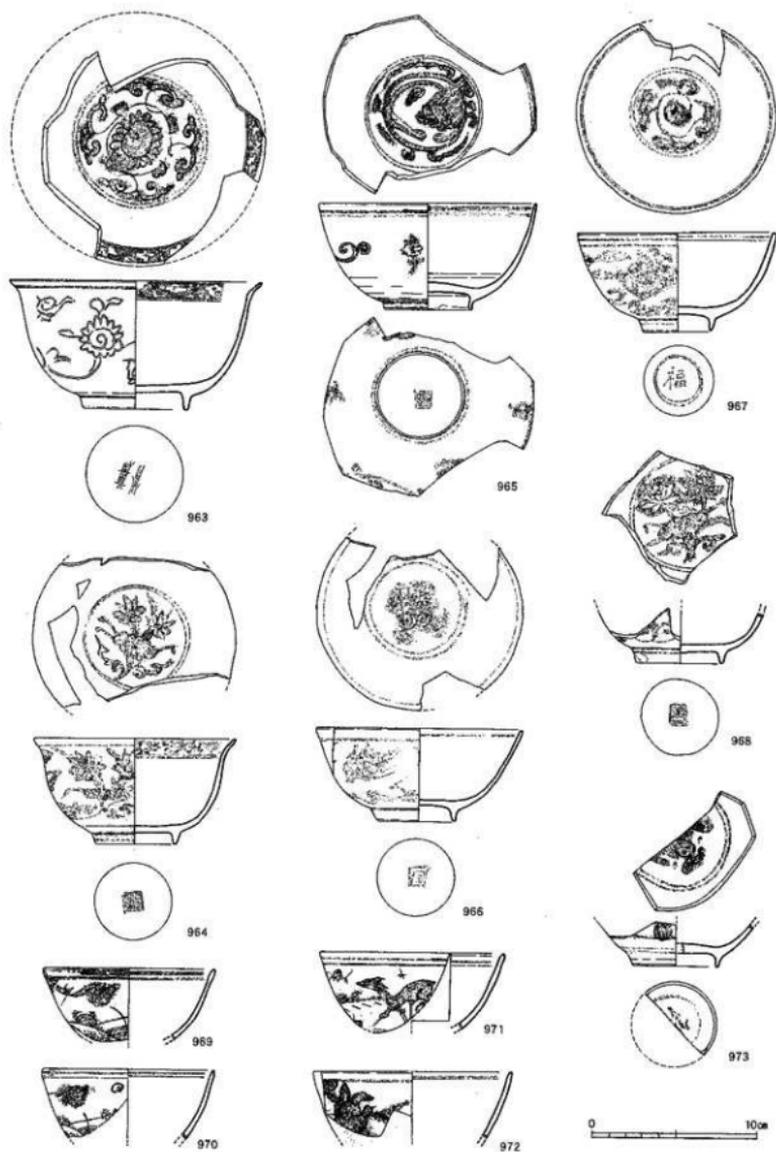
996～1017は青花皿である。

このうち、996・997は口縁部が外反する小野分類B1群青花皿、998は底部が甚筒底となるC群青花皿である。

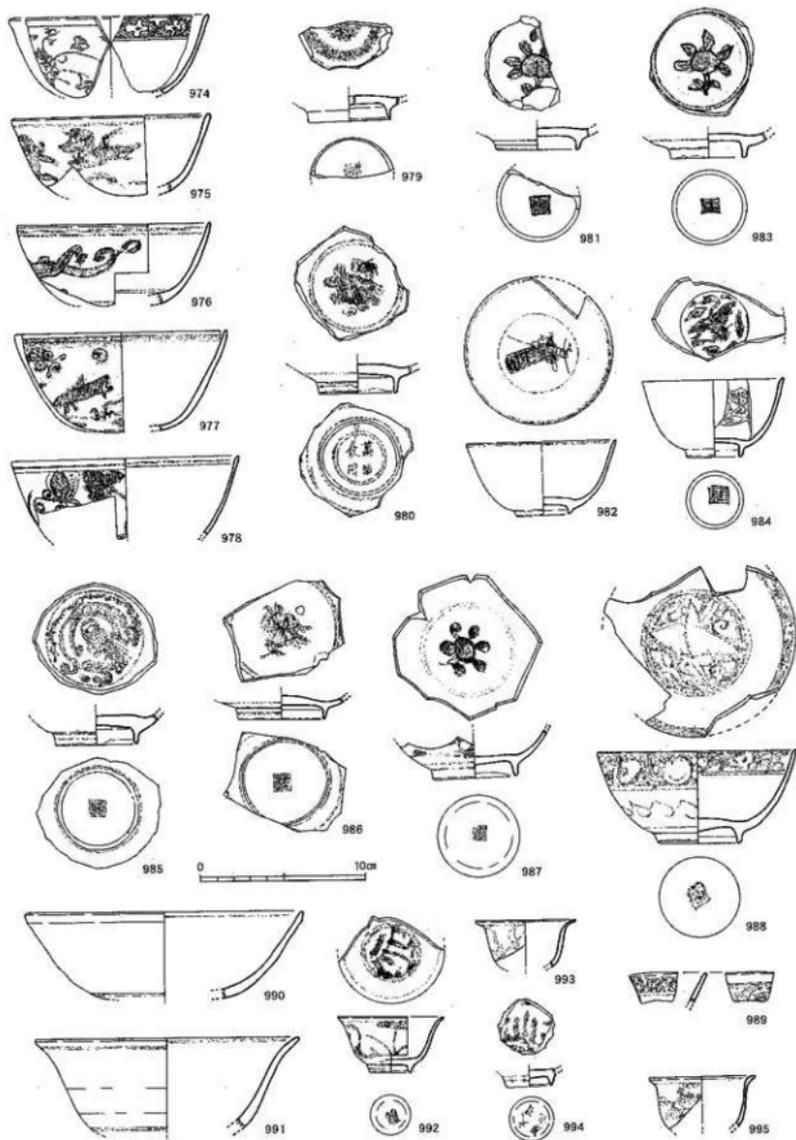
999～1009は口縁部が内湾する器形になるE群青花皿で、999には岩花文、1005には桃果文、1005には人物文、1007には菊花文が内面に描かれている。また、999と1005の外底部には、異体字銘が認められる。

1010・1011は口縁部が外反し、胴部下半と高台の境に変化点をもたず、そのまま底部へと続く器形を呈する小皿で、小野分類に該当する器形がない製品である。口縁部外面と胴部外面下半部および内面の見込み近くそれぞれ一条の圓線を描き、外底部には「富貴佳器」銘が認められる。また、高台内面付近には砂（アルミナ）が付着している。

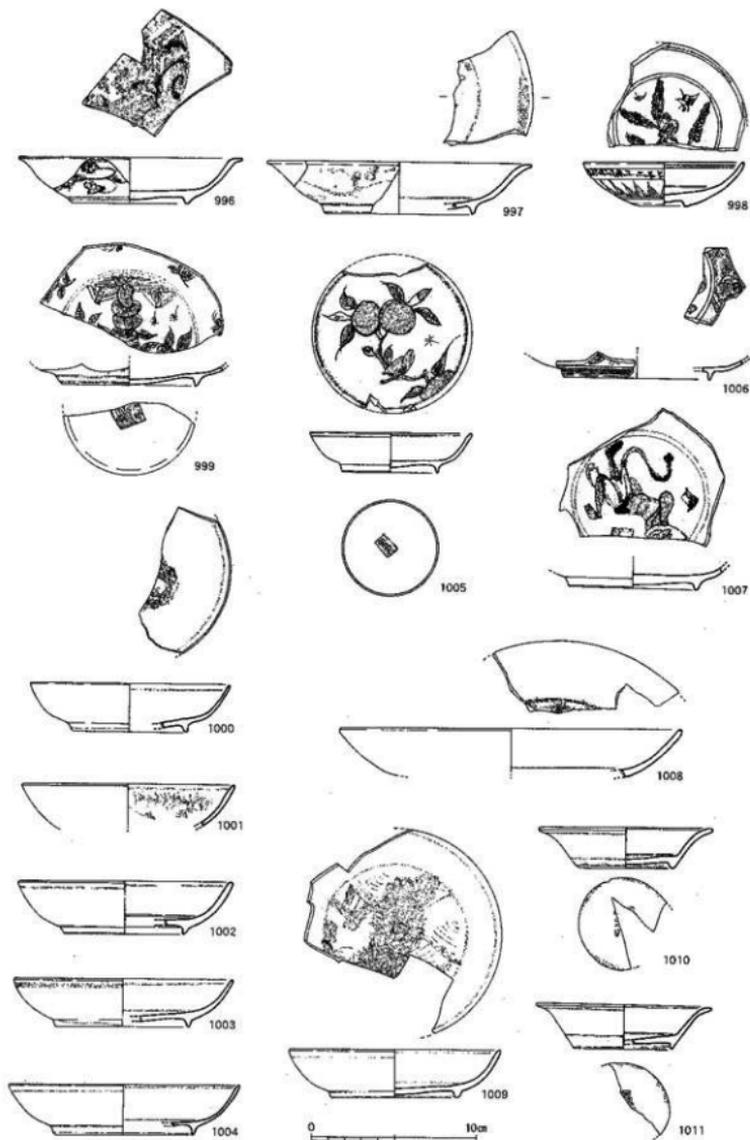
1012～1017はF群青花皿（鈔皿）である。1014の外底部には、二重圓線内に「萬福収同」銘（破片のため、残存するのは「同」字のみ）が認められる。1015は口縁部が輪花となっており、胴部内



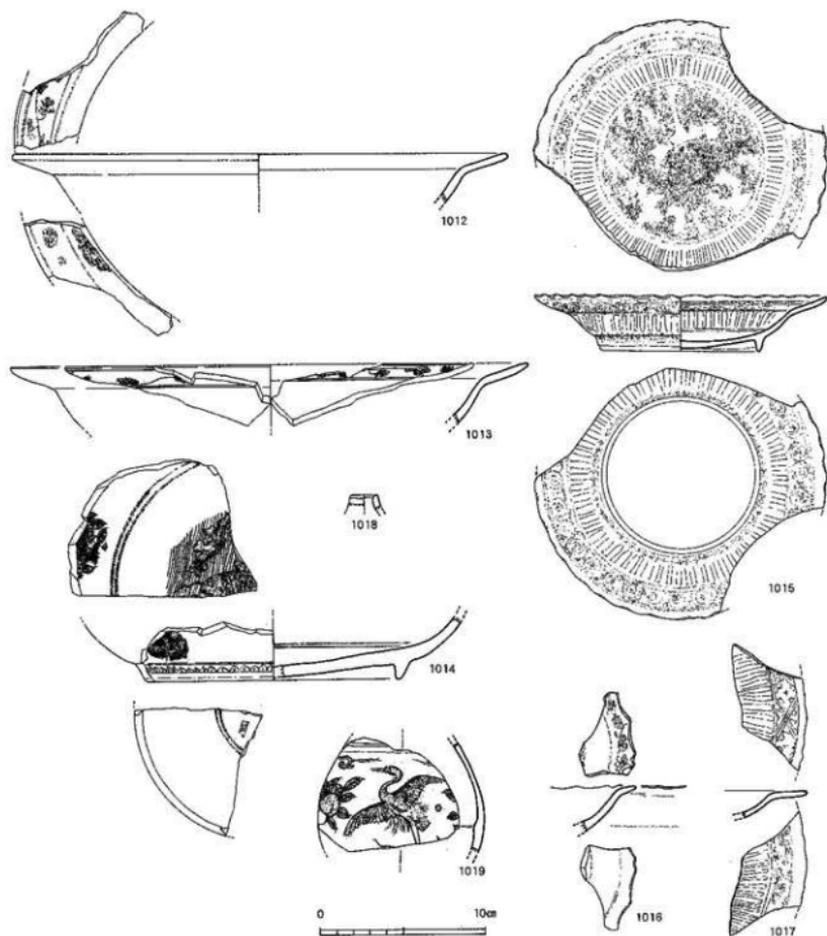
第343図 SD101出土遺物①(1/3)



第344図 SD101出土遺物②(1/3)

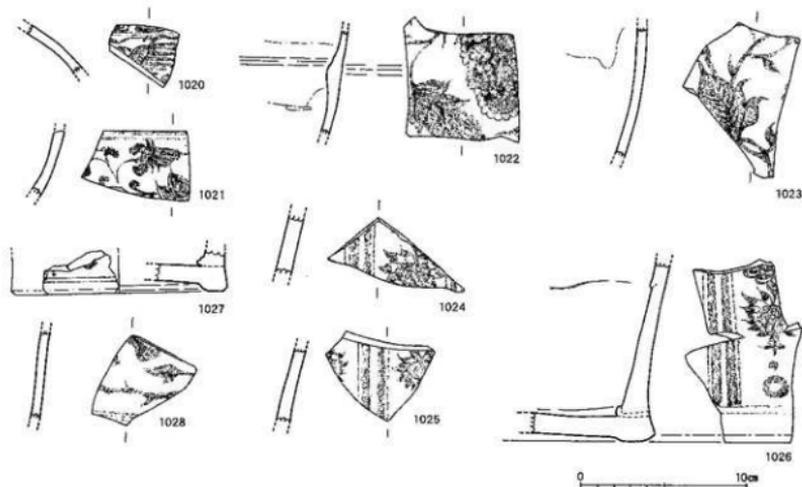


第345図 SD101出土遺物③(1/3)



第346図 SD100出土遺物④(1/3)

外面に鏝を有する。見込みには麒麟文が描かれている。1016・1017についても、口縁部が輪花となる。1018は五彩の製品であるが、小破片のため、器種不明である。1019は瓶の胴部で、外面に鶴・桃・雲気などが青花で描かれている。内面は露胎であり、残存部の下半部には、胴織ぎの痕跡が観察できる。



第347図 SD101出土遺物⑤(元青花、1/3)

元青花梅瓶 1020～1027は注目すべき資料で、元青花梅瓶と思われる資料である。当該資料は1026のように第72次調査と第80次調査での出土破片が接合していることや元青花が日本列島の中でも出土事例が僅少で貴重なることから、調査次第や出土遺構にかかわらず、SD101と関連する破片を併せて提示することとする。

1020は第80次調査街路遺構（J9区）として取り上げた遺物で、梅瓶の肩部の破片である。街路遺構とは第2南北街路のことであるが、層位が不明なため、SF006かSF094のいずれの帰属遺物かの判断ができない。外面には二重の圓線の上に蓮弁文、下に鳳凰文の羽の一部が描かれている。内面は露胎である。後述する1022～1026の個体と同一個体の可能性があるが、接合しないため、確認ができない。なお、当該資料は大友氏館跡第21次調査SX105（大分市教育委員会調査）出土の破片¹⁰と接合した。150m以上離れた地点の遺構からの接合である。

1021は第72次調査SD025の出土で、外面に二重圓線と葉文が描かれ、内面は露胎となる。器表面のうち、特に外面が二次被熱により荒れている。第347図に提示したいずれの破片とも接合せず、呉須の色調や外面文様の描き方も他と異なっている。他の破片とは別個体の梅瓶の胴部であろうか。

1022・1023はSD101出土で、梅瓶胴部中心付近の破片である。外面の花文と葉文は牡丹文で、特に1022の花文などは向日葵（ひまわり）状の花弁をいくつも重ねて描いているなど、元青花に特徴的な表現が認められる。内面には一部に施軸が認められるが、基本的には露胎である。また、1022の内面には胴縫ぎの痕跡も認められる。1024～1026は、梅瓶底部付近の破片である。1024は第80次調査SD101(J9区)、1025は同じくSD101（J10区）出土で、1026は第72次調査SD025と第80次

註 例 大分市教育委員会『大分市市内遺跡確認調査概報—2008年度—』（2009年）
大友氏館跡第21次調査と府内町跡第80次調査出土の破片が接合することについては、柴田幸子氏（愛媛県歴史文化財センター）のご指摘による。また、本報告で報告する資料が元青花であることについては、西田安子氏（根津美術館）・森本朝子氏（元福岡市埋蔵文化財センター）にご教示をいただいた。

SD101 (J9区)の破片が接合している。1024~1026は接合していないが、すべて同一個体と思われる。また、1022・1023とも同一個体である可能性が考えられるが、これについては断定できない。外面には元青花に特徴的なラマ式蓮弁が描かれ、内面は露胎となっている。また、1025の内面には胴継ぎの痕跡が認められる。

1027はSD101出土で、柳瓶底部付近の破片である。外面にはラマ式蓮弁が描かれている可能性が高いが、破片のため不明である。内面は露胎となる。前述した1024~1026と比較すると、底径がやや小型で、明らかに別個体である。

梅瓶
明代初期
または前期
(15世紀前
葉?)

1028も梅瓶の胴部破片で、外面に花文などが描かれ、内面は露胎となる。1020~1027と比較すると、外面文様の具須の青みが弱く、元青花のカテゴリーに入らない製品である可能性が考えられる。明代初期または前期(15世紀前半)頃まで降る資料か。

第348・349図では漳州窯系青花の製品を図示した。

漳州窯系
青花

1029・1030は碗の破片で、口縁内外面に圈線が描かれている。1029・1030とも別個体の破片が融着している。製品の生産段階において窯中で融着したものとと思われるが、不良品ともいえるこのような製品が流通していたことは珍しい事象であると思われる。

融着した碗

1031~1048は碗である。このうち、1045の外底部には墨書が認められる。

テスト・ビ
ース

1049・1050は小皿、1051~1055は中皿、1056・1057は大皿である。このうち、1049は注目すべき資料で、漳州窯系の小皿であるが、底部に径3.3cmほどの円孔が穿たれ、破断面にも釉薬が施されている。陶磁器類を窯で焼成している段階で、製品の仕上がりが状態をみるテスト・ピース(日本では「色見」もしくは「火見(ひみ)」という場合がある)であろう。

1058は無須蓋で、口縁部内面を除く内面と高台髷部周辺が露胎となっている。1059・1060は小杯である。

青磁

1061~1074は青磁である。このうち1061~1070は龍泉窯系の製品で、1071~1074については窯を特定できない資料である。

夜学形器台

花盆

1061・1062は大型器台(夜学形器台)の破片で、口縁部が輪花となり、口縁部下と胴部に透かし孔がある。中国元代(15世紀代)の所産である。1063・1064は深鉢で「花盆(植木鉢)」である可能性が考えられるものである。同一個体と思われる、口縁部は鈔状に屈曲して輪花となり、口縁端部に刻目を施す。口縁上には片彫りによる花卉文があり、胴部上半部の口縁部下にも花文が施されている。また、口縁部と胴部の境付近に沈線がある。中国元代(15世紀代)の製品と思われるが、類例が少なく、他には大友氏館跡第21次調査²⁾で出土しているほか、沖縄県首里城³⁾で出土事例がある。1065・1066は碗で、見込みに刻印(印花)による文様が認められる。1067・1068は盤、1069は大振りの鉢である。1065~1069はいずれも15世紀代の所産であろう。1070~1074は香炉である。

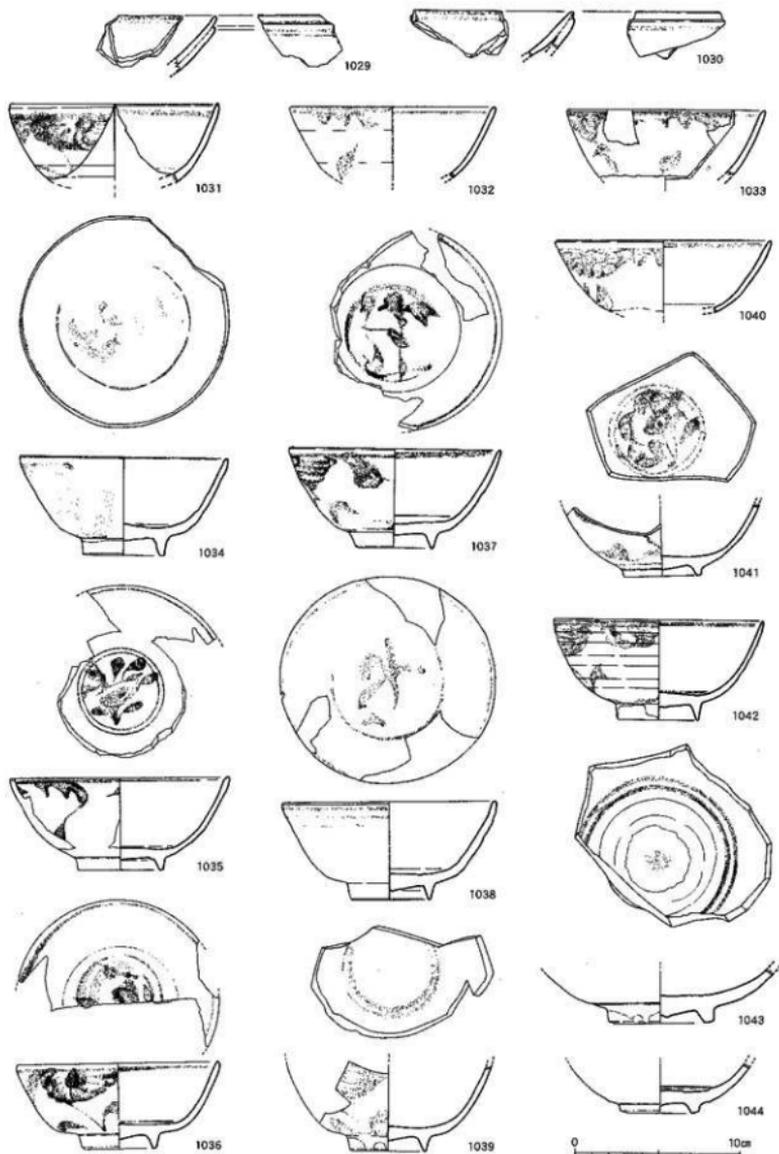
白磁

1075~1084は白磁である。このうち、1075・1076・1079~1082は景德鎮系の製品で、1077は中国南部(福建・広東周辺)陶磁、1083・1084については窯を特定できない資料である。

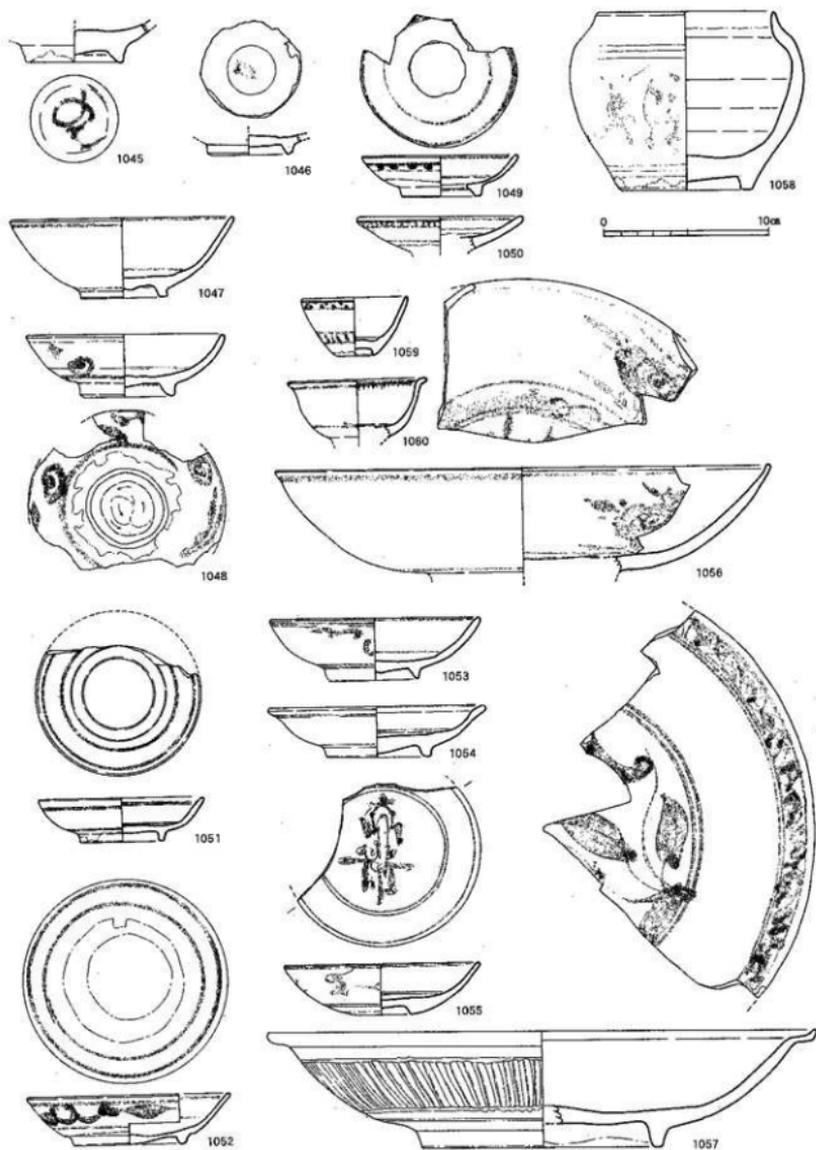
1075は碗、1076~1079・1082は皿で、1080・1081は小杯である。このうち、景德鎮系の製品は森田分類E群に分類されるものである。また、1077は見込みと高台周辺が露胎となるもので、生産年代が16世紀中葉前後まで遡ることが知られている。1082は木瓜形の変形皿である。外底部に裏底銘は認められなかった。1083・1084は香炉で、接合しないが同一個体と思われる資料である。

木瓜形の白
磁皿

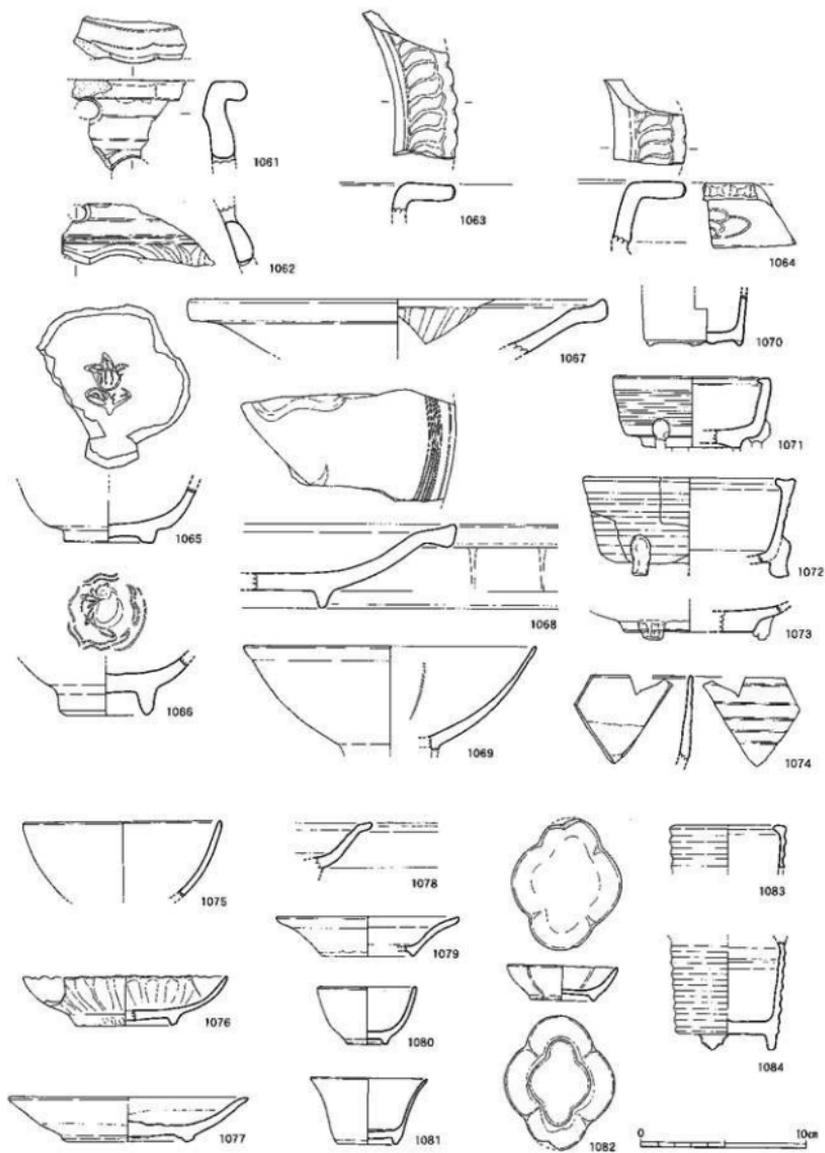
註 2) 大分市教育委員会「大分市市内遺跡確認調査報告—2008年度—」(2009年)10頁第9図14
大友氏館跡第21次調査のものは、同一個体である可能性が考えられるが、接合しなかった。
3) 古岡康輔・門上秀毅「琉球出土陶磁社会史研究」(京橋社 2011年)98頁



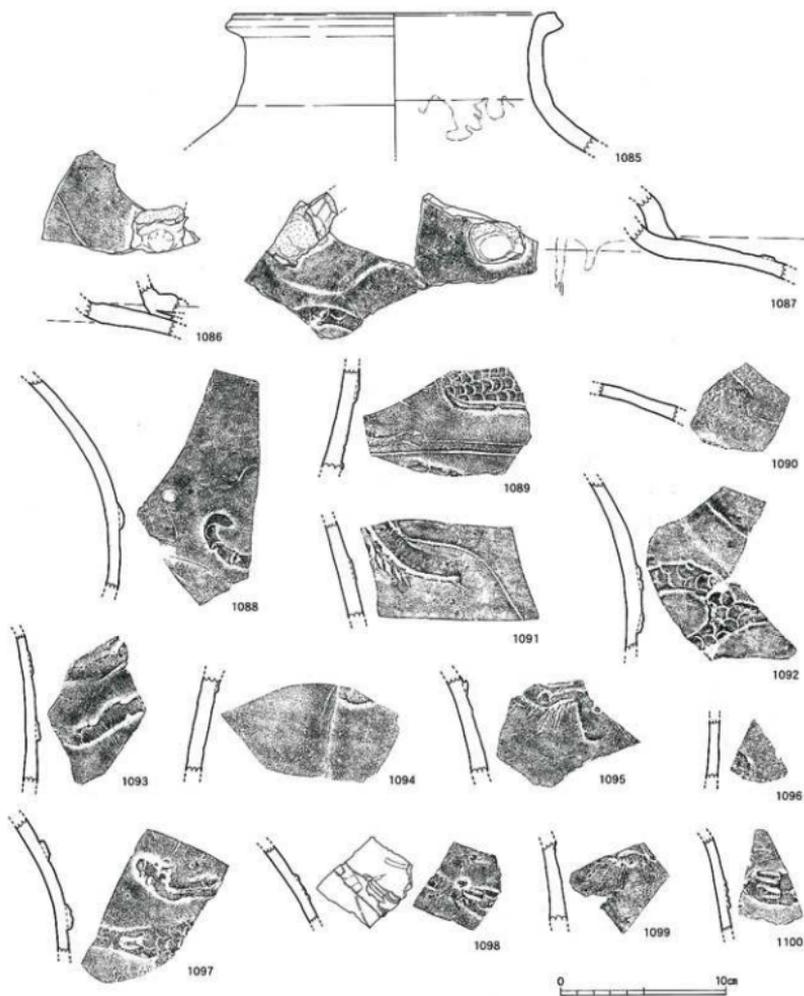
第348図 SD101出土遺物①(1/3)



第349図 SD101出土遺物⑦(1/3)



第350図 SD101出土遺物⑧(1/3)



第351図 SD101出土遺物⑨(ドラゴン・ジャー、1/3)

ドラゴン・
ジャー

1085～1100は中国南部と推定される陶器大壺で、外面に褐軸を施し、肩部から胴部外面にかけて龍の貼付文をめぐる資料である。肩部には複数の把手を設けている。龍の貼付文様が特徴的であることから、「ドラゴン・ジャー」と呼称されることも多い。2011年9月25日に大分県立芸術短期

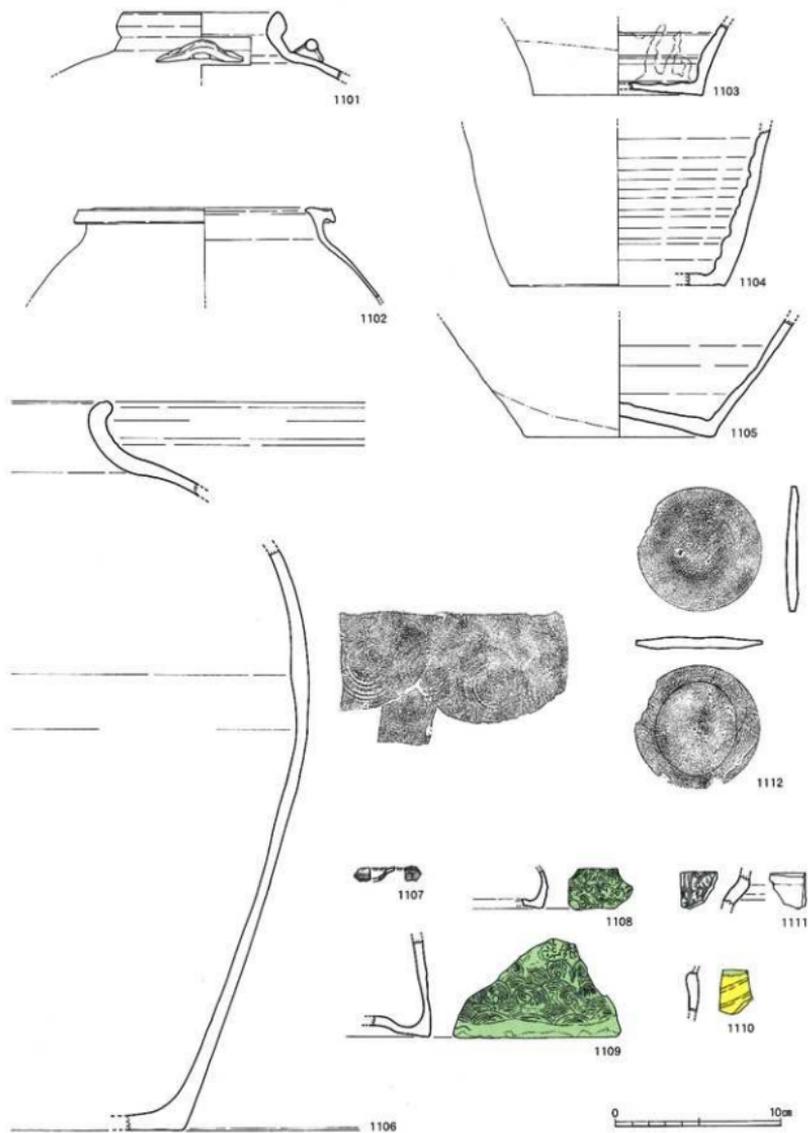
- 大学で行われた日本貿易陶磁学会大分大会にて、会場で資料を実見された森田達也氏（愛知県立陶磁資料館）から、これらが中国福建省磁窯窯の製品であるとの指摘を受けた。確かに、当該資料の胎土には、磁窯窯の代表的な製品である黄釉鉄絵盤などで散見される小豆色の粒子などが多く認められ、氏の指摘は妥当であると思われる。当該資料も遺構間接合が認められるもので、SD101のほか、第2南北街跡SF006・SD101・道路側溝SD091・表土からの破片が接合している。出土地点等の情報は、巻末の遺物一覧表を参照されたい。類型としては、府内町跡では第5次調査B区^註・第60次調査^註などで出土しているほか、鹿児島県津採集資料・宮崎県池之上城跡・長崎県万才町遺跡・愛媛県旧等明寺跡・大阪府大坂城・大阪府堺環濠都市遺跡・山梨県新府城跡などで出土事例が認められる。列島各地に分布しているようにみえるが、出土個体数は極めて僅少である。その反面、東南アジア方面には広く流通していたことが知られており^註、今後注意を払っておきたい遺物である。
- 中国南部陶器壺** 1101～1105も中国南部の陶器壺で、1101・1102は口縁部、1101～1105は底部である。1101は外面に黒褐色釉を施し、内面が露胎となる四耳壺である。1102は鋤先状の口縁部を有し、内外面に薄い褐釉が施されるもので、府内町跡では類例が少ない資料である。1106も中国南部と推定される陶器の壺で、同心円叩きで内面ではなく、胴部外面に認められる。内面にはナデが施されている。
- 1107は青釉陶器皿の口縁部の破片である。
- 華南三彩** 1108～1110は華南三彩の製品。1108・1109は外面に鮮やかな緑釉を施し、内面は露胎となる。
- 1108は小型の製品で、外面に型押しによる波瀾文が認められるが、器形は不明であるが、水滴などの製品であろうか。1109は鶴形水注の台部で、外面には波瀾文と水草の表現が認められる。府内町跡第11次調査（大分県埋蔵文化財センター—調査）と府内町跡第14次調査（大分市教育委員会調査）で出土した遺構間接合資料^註と同一個体の破片と推定される。残念ながら、本破片は府内町跡第11・14次調査の接合資料とは接合しなかった。1110は鶴形水注の可能性が考えられる破片で、外面に緑釉と黄釉が施され、内面は露胎となる。鴨の羽に相当する部位であろうか。
- 1111は中国磁州窯系の製品で、外面文様は鉄絵で、内面は露胎となる。壺などの袋物であると考えられるが、小破片であるため、器形は不明である。
- 窯道具（ハマ）** 1112は円盤状の磁器製品で、その形態から窯道具（日本では「ハマ」と呼ばれる製品）であると思われる。中央部でも片面に布目が認められる部位があるが、釉は全くかかっていない。重量は51.8gである。同様な製品が府内町跡第11次・第88次調査でも出土しており、出土地点はすべて堀SD101と同一遺構である。すでに報告したように、融着した磁器碗（第348図1129・1130）やテスト・ピースと思われる磁器皿（第349図1049）などとともに磁器生産に関わる遺物が、消費地遺跡である府内町跡から出土していることに注意を払うべきであろう。
- 1113～1131は、朝鮮王朝陶磁である。
- 1113～1124は灰青沙器碗で、見込みや壺付部に目跡が認められる。1120を除き、目跡は小さくて、数が多いもののが多数を占めている。また、1117については漆継ぎが認められる資料で、破損した破片が黒漆によって接着されている状況が観察できるとともに、破断面の一部にも漆が塗布され

註 ① 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1—中世大友府内町跡第5次・第8次調査区—』（2005年）第476図7（355頁）

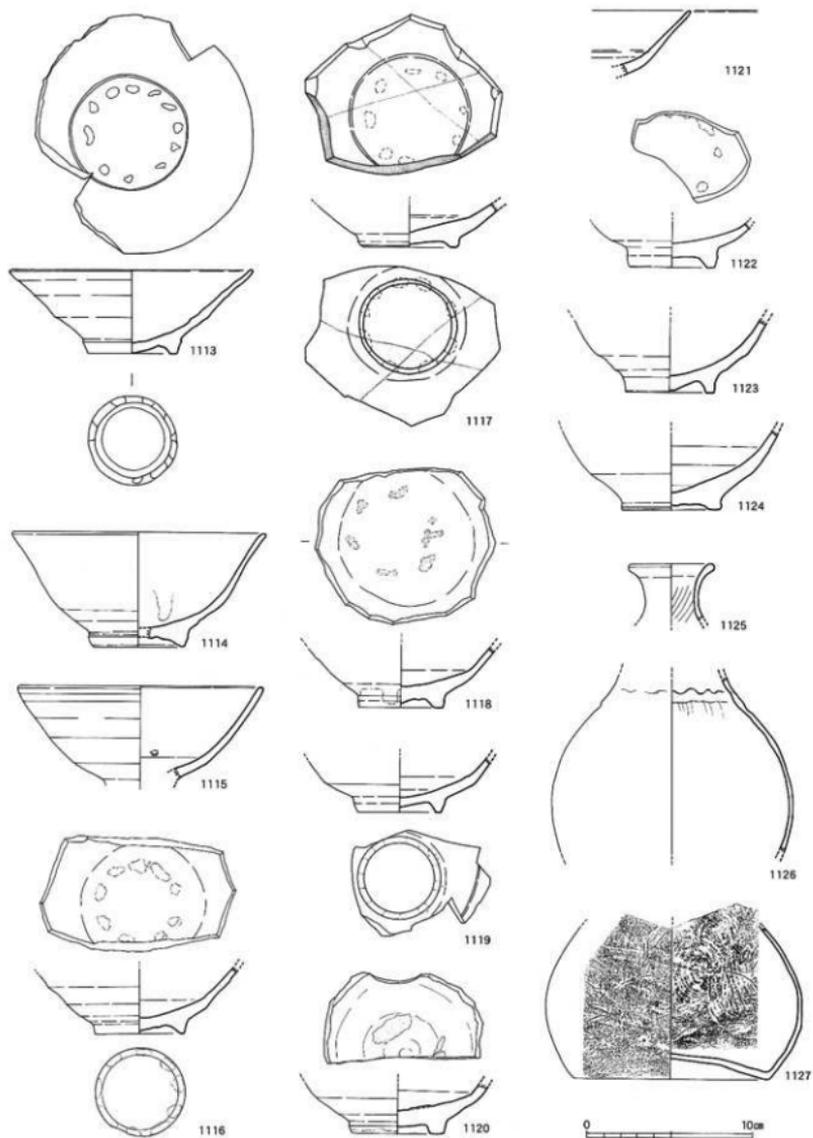
② 大分教育委員会『大友府内13—中世大友府内町跡第5・3・5・7・5・9・6・0・7・3次調査報告書—』（2009年）第15図17（75頁）、第87図64（87頁）

③ Cynthia O.Valdes-Kerry Nguyen Long-Artemio C.Barbosa “A Thousand Years of Stoneware Jars in Philippines” 1992 Barbara Harrisson “PUSAKA Heirloom Jars of Borneo(Oxford in Asia Studies in Ceramics)” Oxford University Press 1986

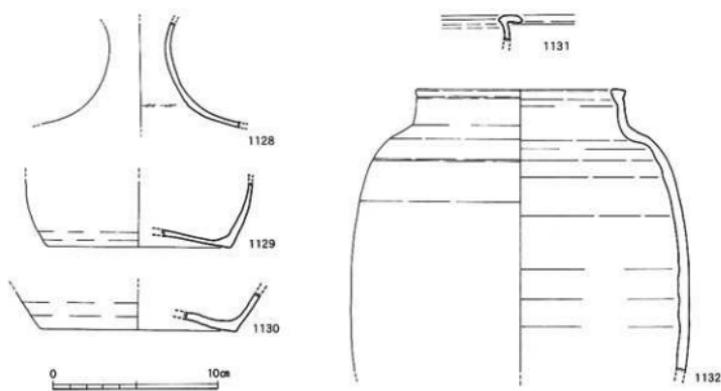
④ 大分市教育委員会『大友府内6—中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書—』（2003年）86頁



第352図 SD101出土遺物⑩(1/3)



第353図 SD101出土遺物①(1/3)



第354図 SD101出土遺物②(1/3)

ている状況が確認できる。当該資料は釉や胎土の色調が赤味を帯びた状態で焼成されており、他の灰青沙器の仕上がりととは異なったものである印象を受ける。漆継ぎによる補修を経た上で、さらに継続して使用され、茶陶として珍重された個体であるのかもしれない。

1125～1130は舟徳利である。1127の内面には叩きが顕著に認められる。1131は片口鉢の口縁部の破片である。

ベトナム陶磁
長胴壺

1132はベトナム陶磁の焼締陶器長胴壺で、口縁部から胴部下半までが残存する大型破片である。第2南北街路SF006・焼土層SX085・第2南北街路094・堀SD101・J8区トレンチ・近世整地層・第11次調査区SD044中層（第80次のSD101と同一遺構）など、多くの遺構から出土した破片が接合している。

タイ陶磁
メナムノイ系四耳壺

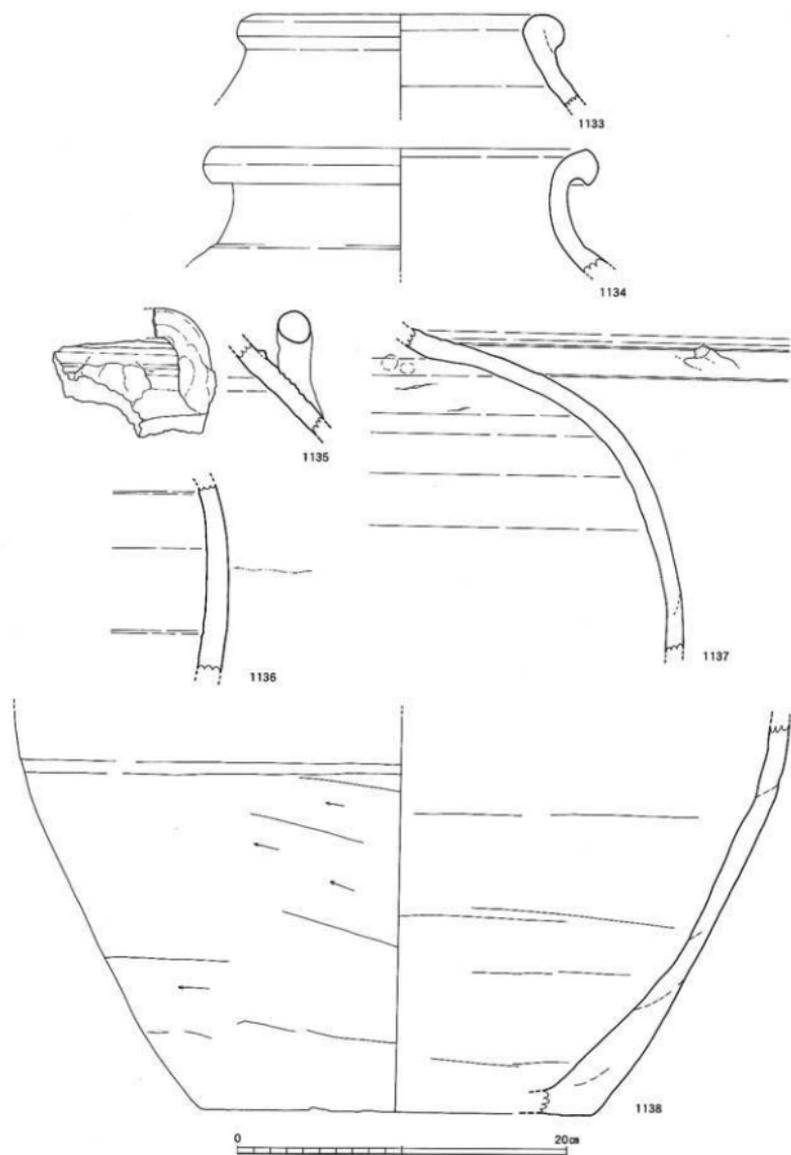
1133～1138はタイ陶磁の焼締陶器で、メナムノイ系四耳壺である。口縁部（1133・1134）、把手（1135）、胴部中位（1136）、肩部（1137）、胴部下位（1138）の破片がある。

瀬戸美濃系陶器

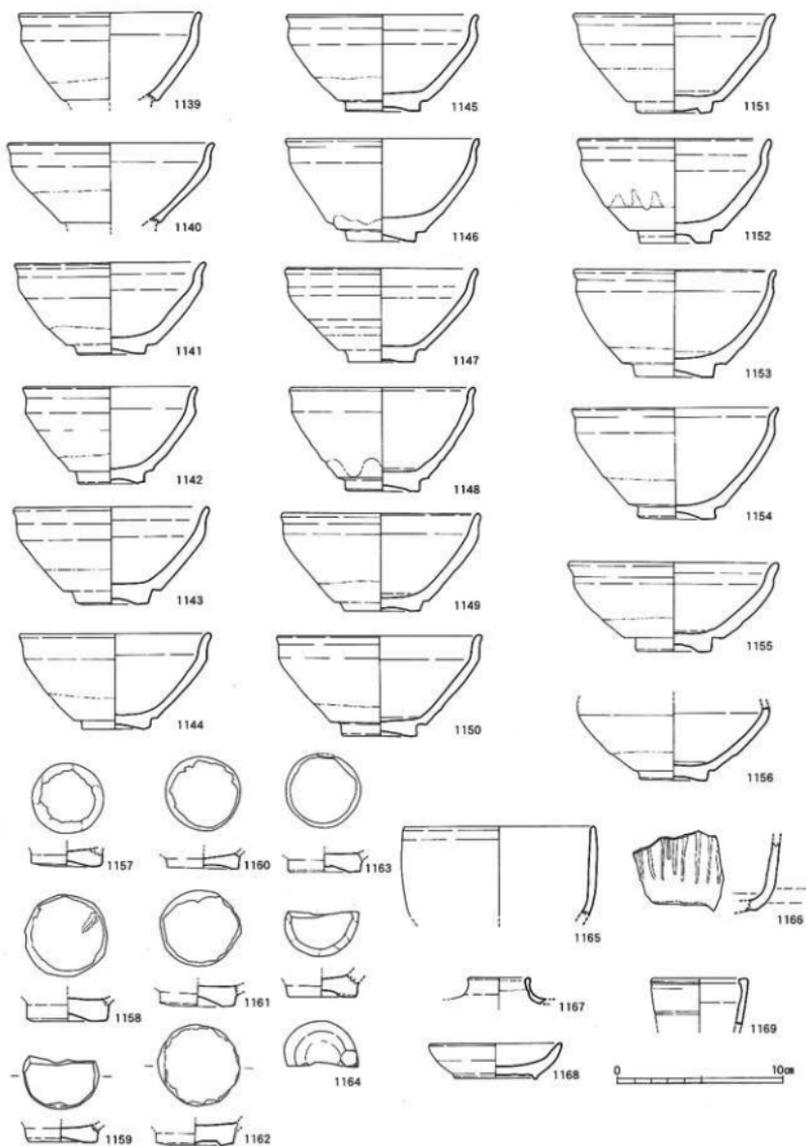
第356図では瀬戸美濃系陶器の製品を提示した。1139～1156は天目碗である。1157～1164は天目碗の高台部のみを残して円形に再加工を行った製品である。散見する出土遺物であるが、何の用途に使ったかは不明である。

1165・1166は碗である。1165・1166とも内外面に鉄種を施し、1166の外面には鱗文を施文している。府内町跡では瀬戸美濃系の天目碗は数多く出土するが、このような形態の陶器碗の出土数は僅少である。

1167は小型の壺の口縁部で、茶入である可能性もある。1168は小皿で、内外面が被熱により荒れていることから、最終的には灯明皿として使用されたことがわかる。1169は香炉で、口縁部と胴部外面に沈線が施されている。



第355図 SD101出土遺物③(タイメナムノイ系四耳壺、1/3)

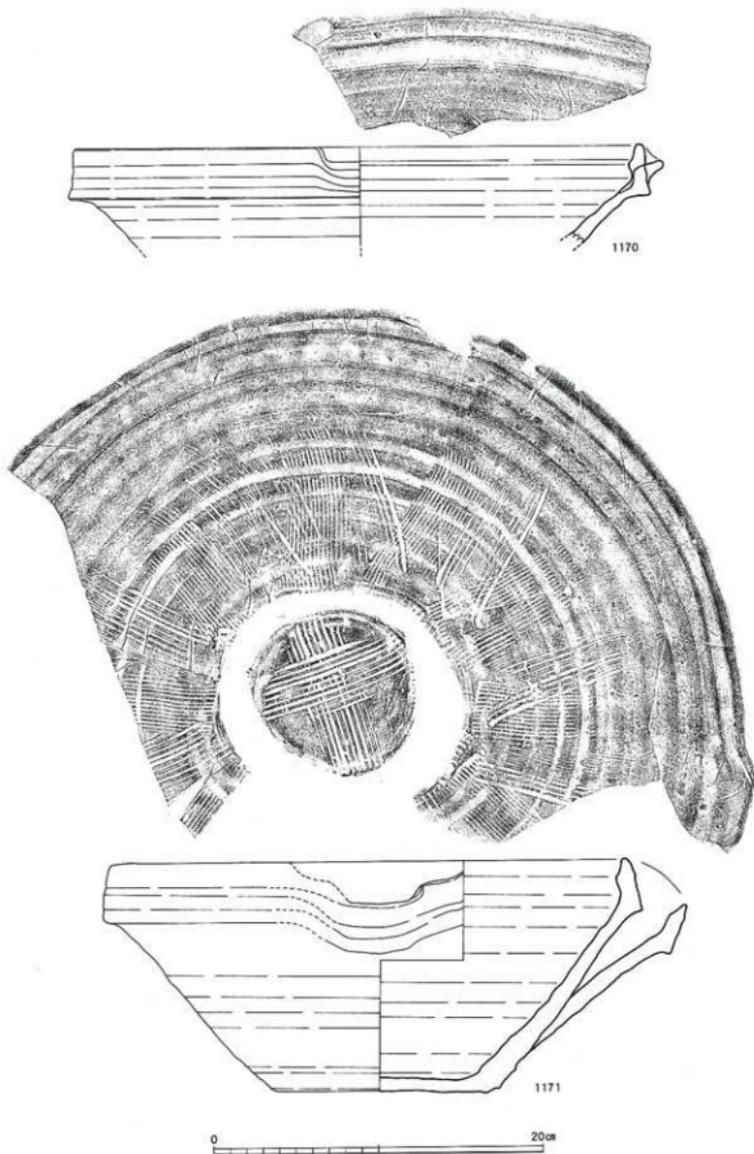


第356図 SD101出土遺物①(1/3)

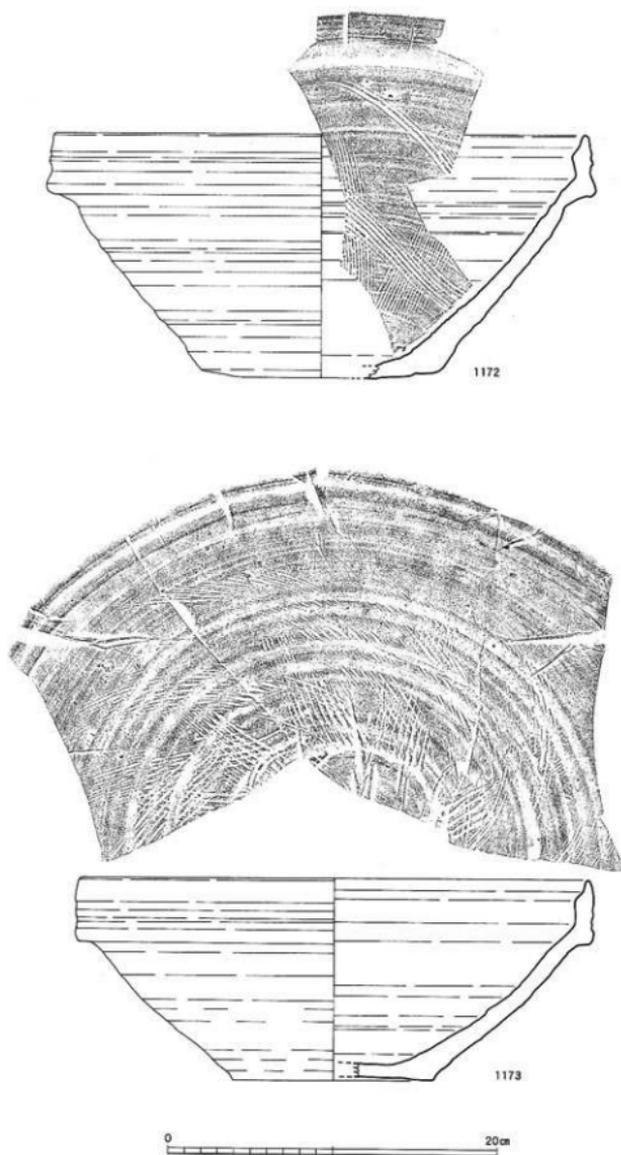
備前焼	<p>第357～366図では、備前焼を提示した。備前焼については播鉢や大甕の破片が大量に出土しているが、大型破片や特徴的な遺物のみを抽出して図化を行った。</p> <p>1170～1186は播鉢である。内面の播目の特徴や口縁部の形態から、1170～1184は乗阿福年の近世Ⅰ期（16世紀末葉）、1185は中世Ⅵ期（16世紀前葉から後葉）、1186は中世Ⅴ期b（15世紀末葉）に分類できる。</p> <p>1187～1204および1209～1214は大甕である。このうち、1187～1199は口縁部、1200～1204は底部で、口縁部については、1187～1195が近世Ⅰ期（16世紀末葉）、1196～1199が中世Ⅴ期（15世紀後葉から末葉）に分類できる。また、1209～1214については、肩部から胴部上半にかけて、ヘラ記号が認められる個体である。</p> <p>1205は鉢と思われる製品で、端部が短く水平に屈曲する口縁をもつ。</p> <p>1206～1208および1215～1218は壺である。このうち、1207・1208は肩部外面に櫛波状を施し、1206および1215～1217には肩部に把手を設けている。1218は壺の底部である。</p> <p>1219・1220は鉢、1221・1222は水屋甕、1223は水注、1224・1225は徳利の口縁部である。</p> <p>1226～1330は京都系土師器である。このうち、1226は小皿、1227～1315は皿、1316～1329は深手の杯、1330は耳皿である。皿は概して器壁が厚く、時期的に新しい様相を呈する資料が大半を占める。また、皿の中にはススが付着しているものとしないものがあり、灯明皿として使用されたものと食器として使用されたものの両者が存在するようだ。なお、1314は注目すべき資料で、底部外面に「めうゑん」と判読できる墨書¹⁰⁰が認められる。「めうゑん」は土師器皿の所有者もしくは使用者と思われる、「明円」もしくは「妙円」などと表記する僧名である可能性が考えられるが、断定はできない。</p> <p>1331～1337は在地系土師器の皿で、このうち1337は内面に顕著なロクロ目が残存するロクロ目土師器皿である。1338・1339は燗台である。胎土は赤褐色を呈し、拓影図を図示していないが、底部に糸切り痕が認められる。1340は天井部にツمامを設けた小型の蓋で、胎土の様相は京都系土師器のそれと共通する。府内町跡では出土個体数は少ないものの、近年徐々にではあるが、出土事例が増加している¹⁰¹。現段階では詳しい用途が不明で、謎の遺物のひとつである。</p> <p>1341は土製品と思われるものであるが、小破片のため、不明である。表面が堅く焼き締っており、二次被熱を受けた可能性もあるが、これについても断定できない。</p> <p>1342はフイゴの羽口である。1343～1345は埴場で、器表面が強く熱を受けており、金属が溶解したと思われる付着物が認められる。府内町跡第88次では、SD101の延長部である同一遺構の堀埋土から数個体がまとまって廃棄された状況が調査されている。1346は取瓶の口縁部である。</p>
ヘラ記号	
墨書 「めうゑん」	
ツمام付き 蓋	
犬形土製品	<p>1347～1352は管状土鉢、1353は土玉、1354は土鈴である。1355は犬形土製品で、中型のサイズに分類される完存品である。犬形土製品は、SD101が機能している時期に堆積した青灰色土中から、確実に出土していることを確認している。</p>

註 100 墨書の判読については、大分県立博物館櫻井成昭氏からのご教示を得た。

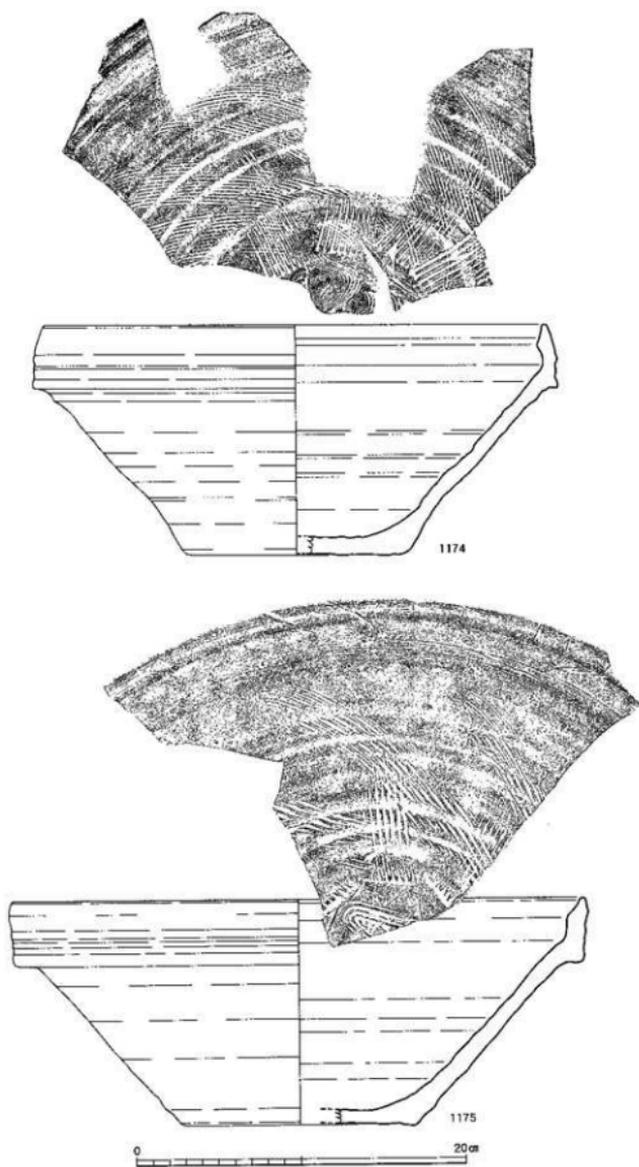
101 長直信「豊後府内における15～16世紀の土器様相—三都市における土師器編年の併行関係を中心に—」（『三都市における土師器研究の現状—博多・山口・大分三都市研究会第2回研究集会』（2012年）42頁



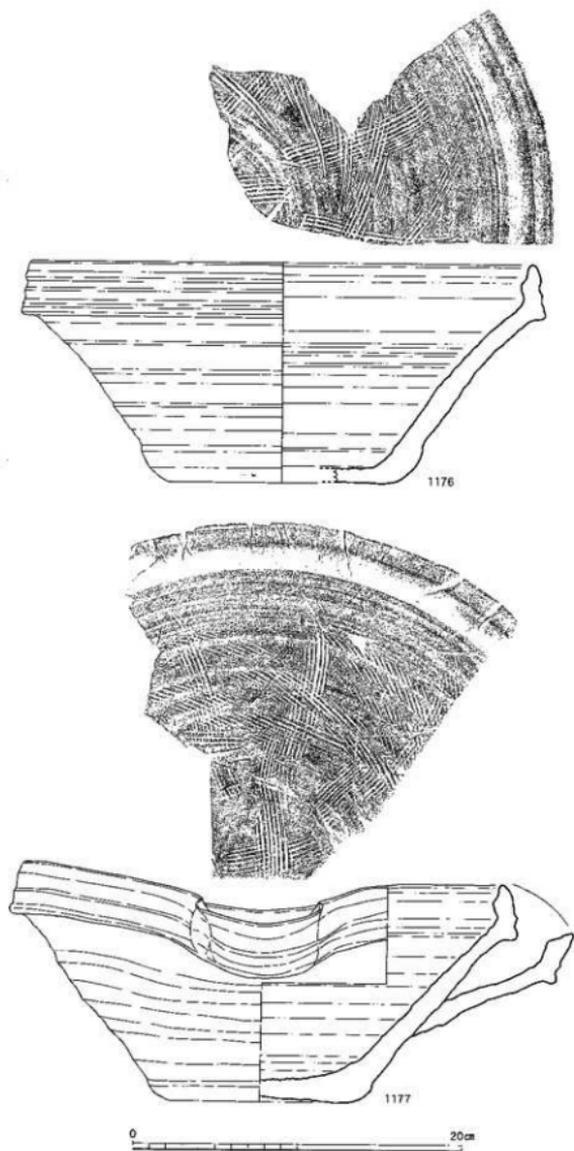
第357図 SD101出土遺物④(1/3)



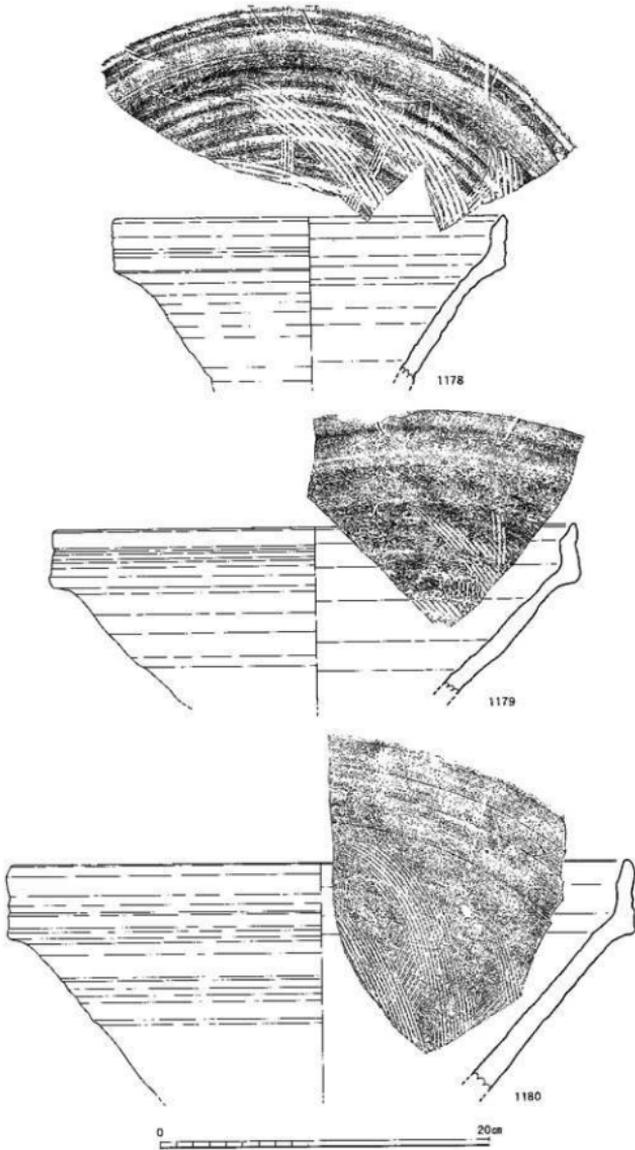
第358図 SD101出土遺物⑩(1/3)



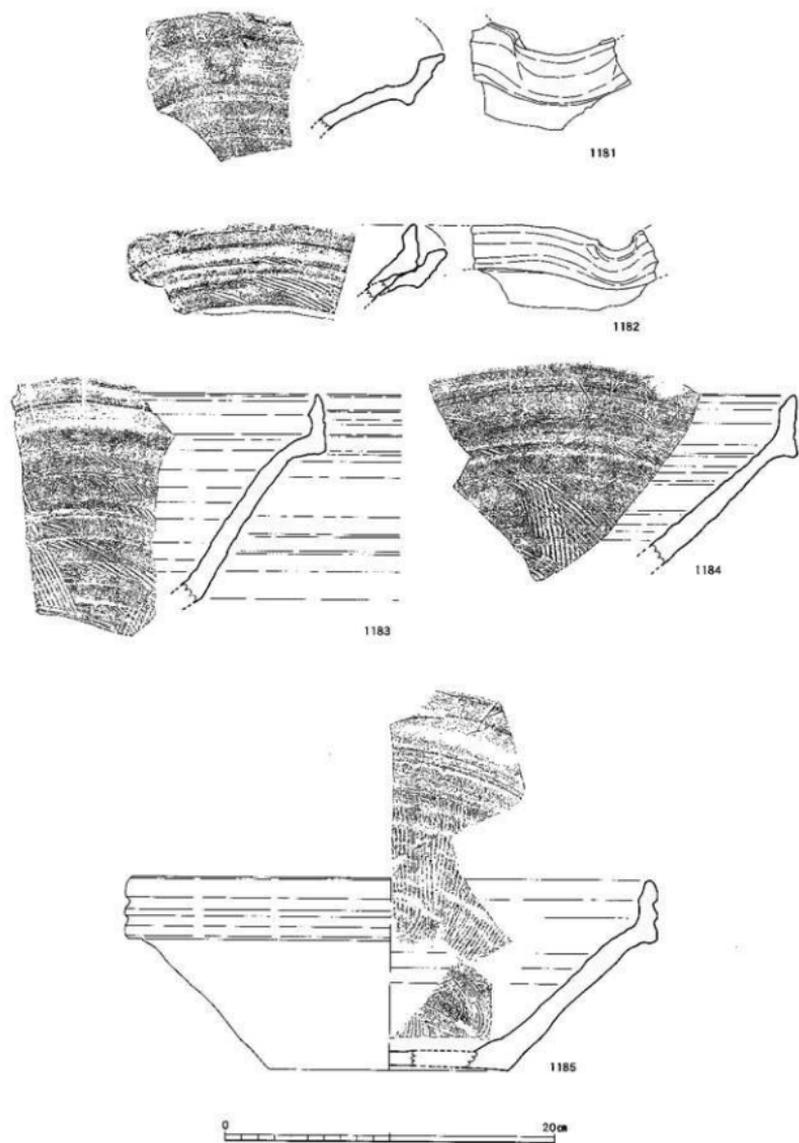
第359図 SD101出土遺物①(1/3)



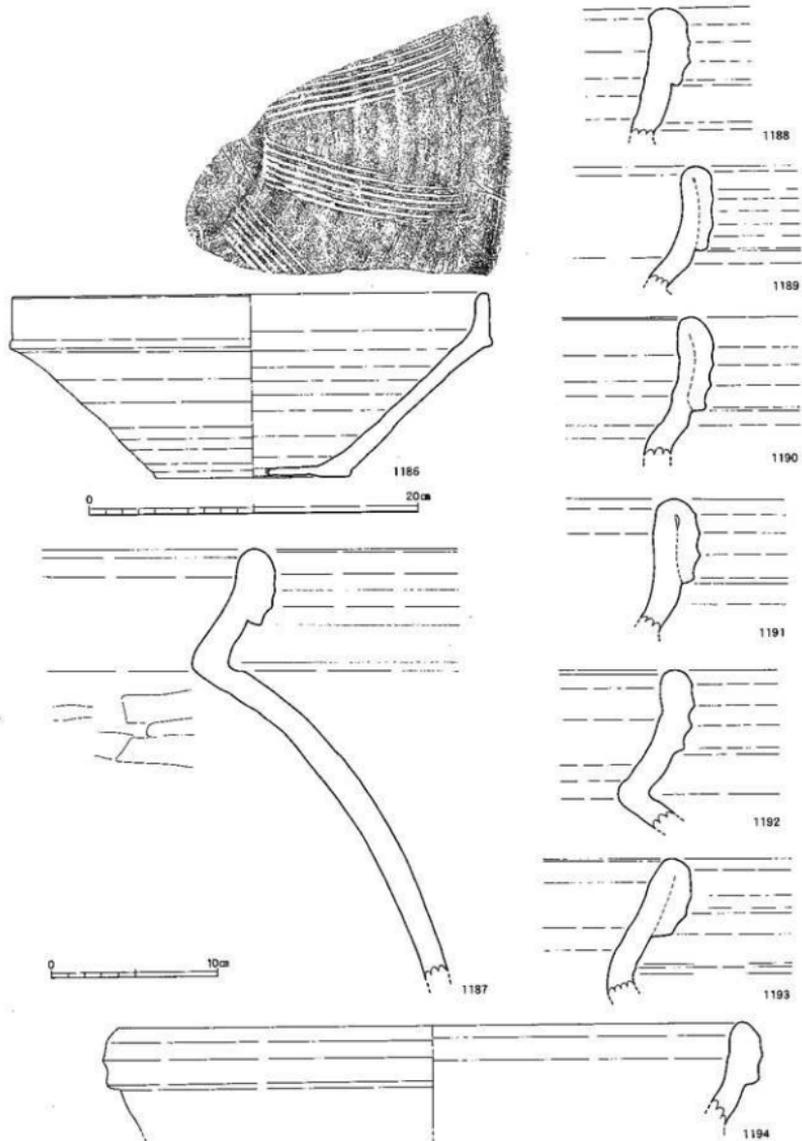
第360図 SD101出土遺物⑩(1/3)



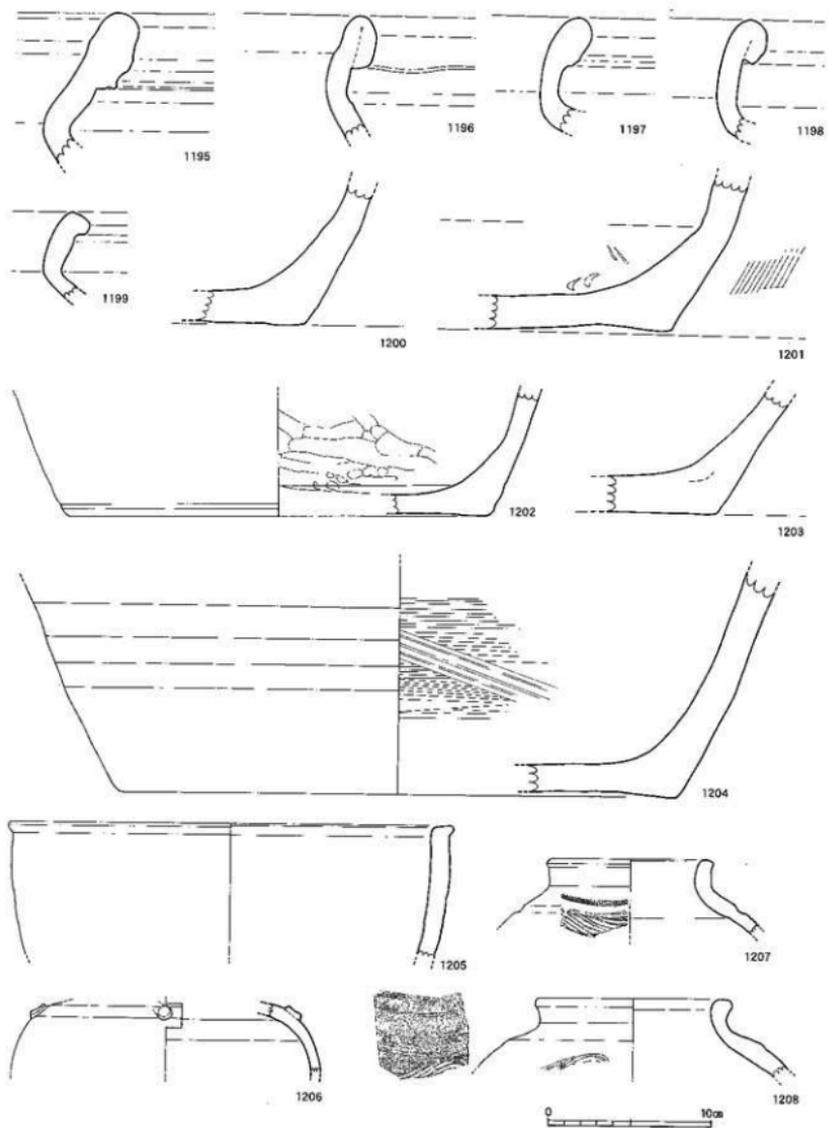
第361図 SD101出土遺物⑨(1/3)



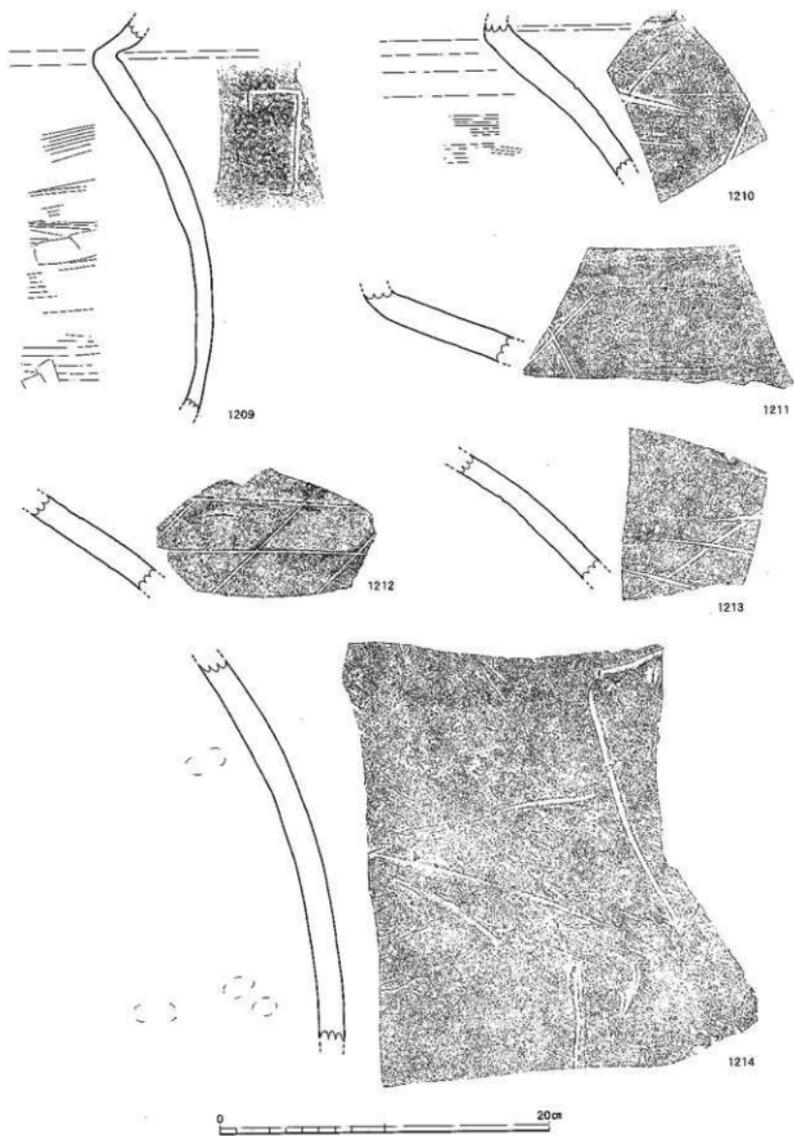
第362図 SD101出土遺物④(1/3)



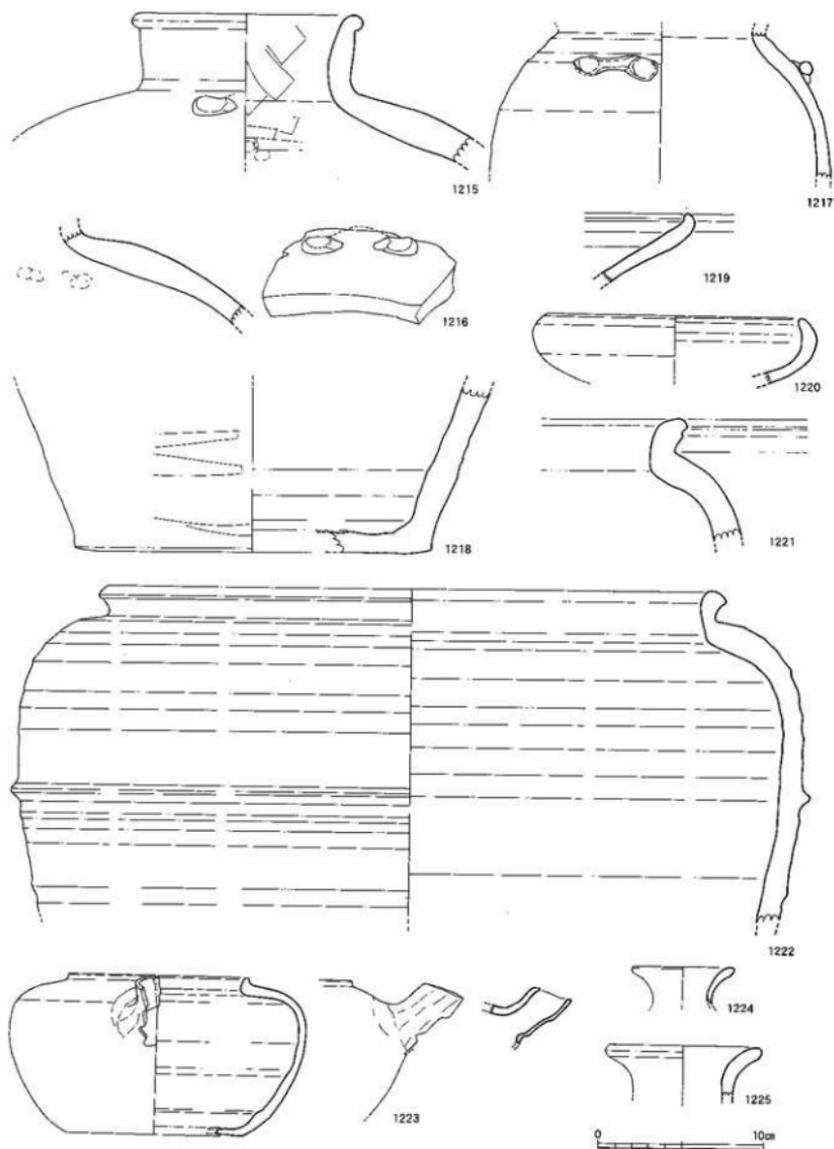
第363図 SD101出土遺物②(1/3)



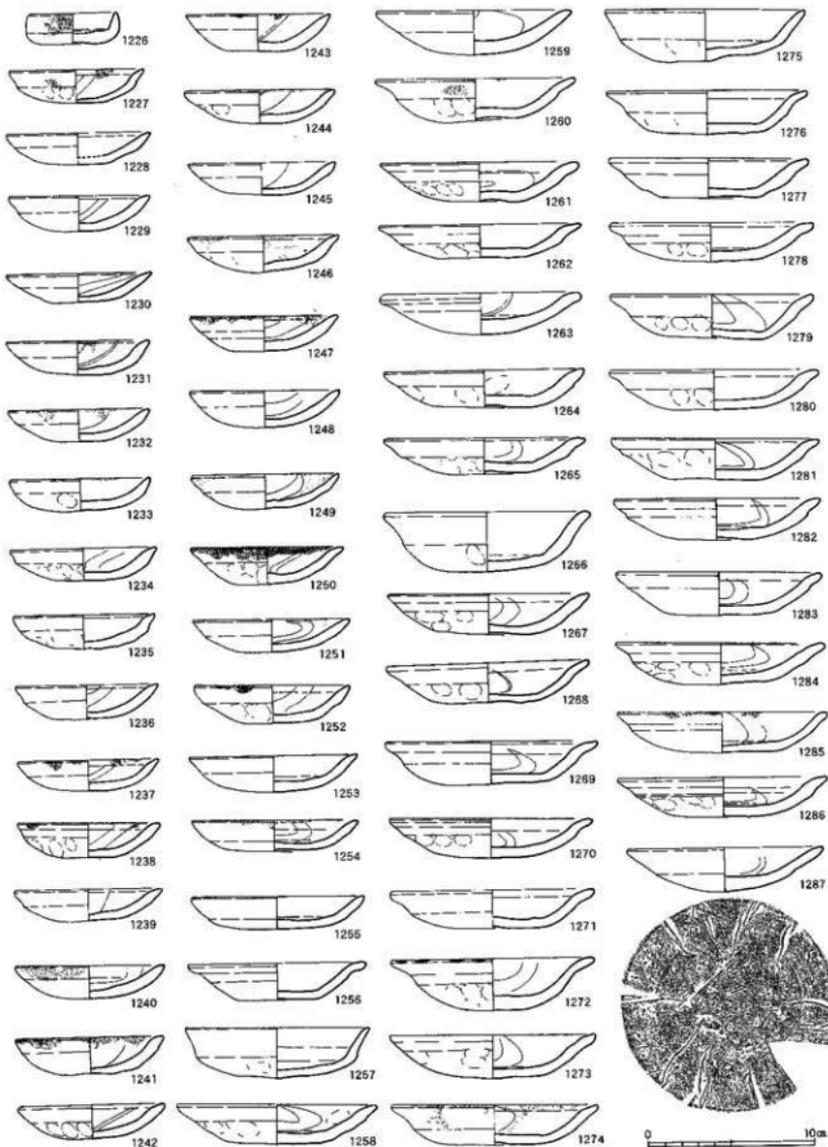
第364図 SD101出土遺物②(1/3)



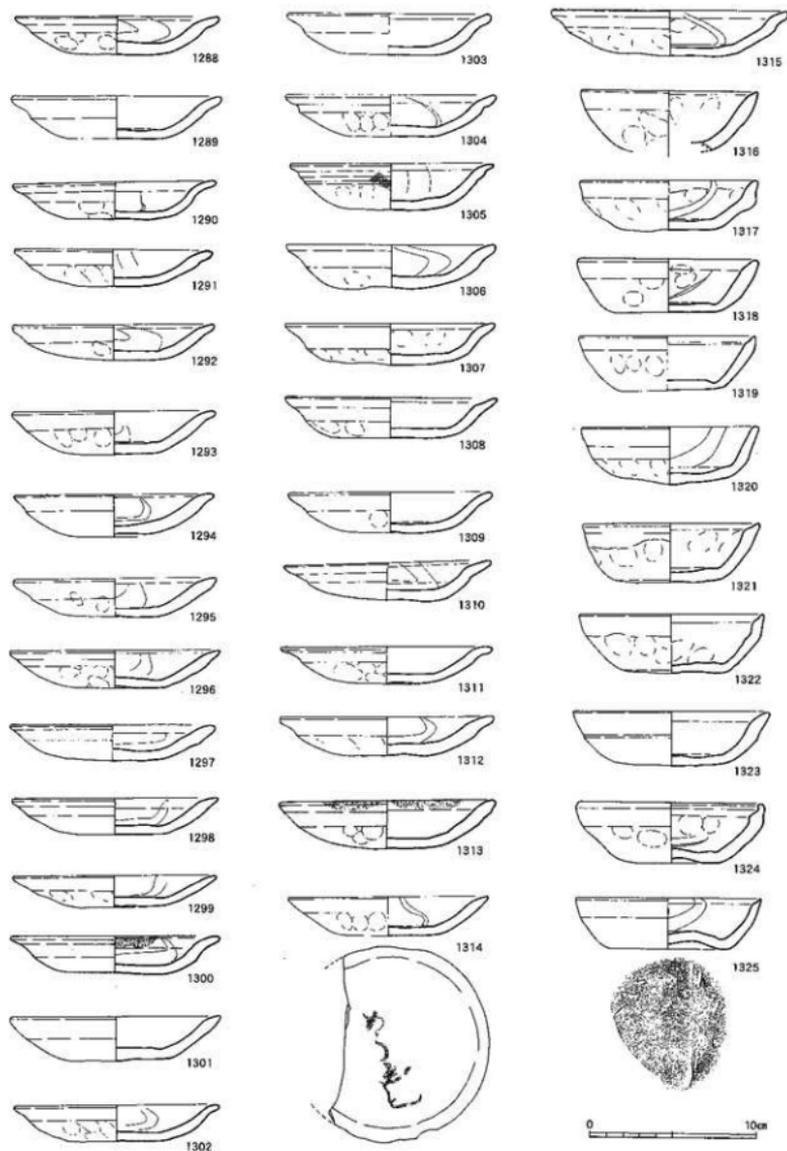
第365図 SD101出土遺物②(1/3)



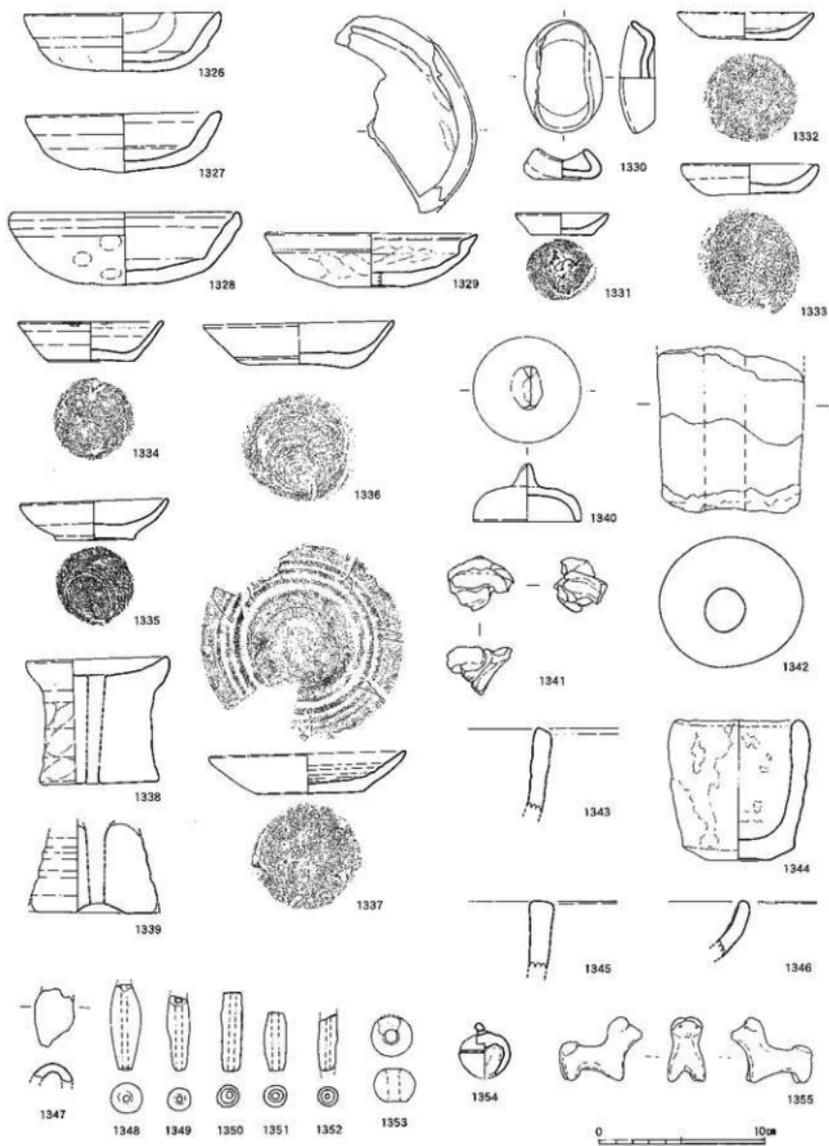
第366図 SD101出土遺物②(1/3)



第367図 SD101出土遺物②(1/3)



第368図 SD101出土遺物④(1/3)

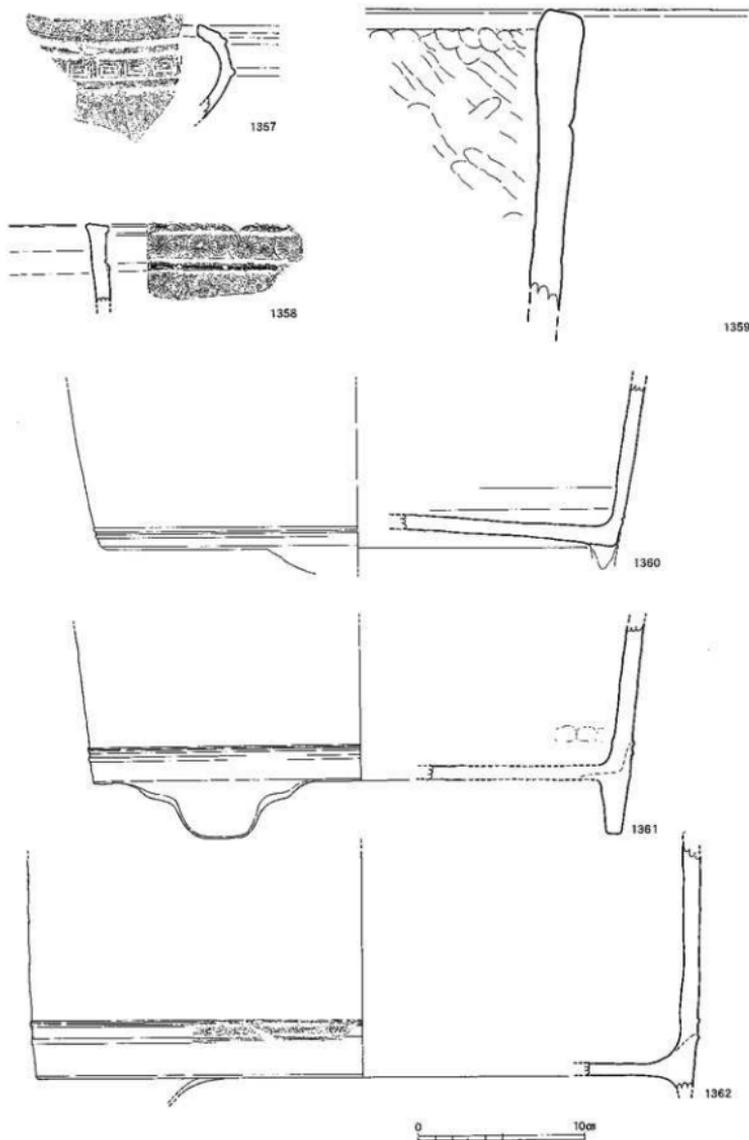


第369図 SD101出土遺物②(1/3)

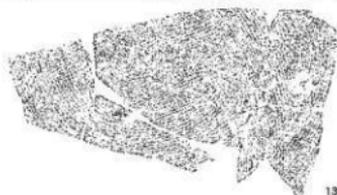
- 瓦質土器 1357~1385は、瓦質土器である。
- 1357~1362は火鉢。1357は口縁部が内湾する浅鉢形の器形を呈し、口縁外面の2条の突帯間に雷文のスタンプ文（刻印）をもつ。1358~1362は長胴形の丸火鉢で、1358は口縁部外面に菊花文、1362は底部近くの胴部外面に双頭蕨手文のスタンプ文を押捺する。なお、1360~1362のような器形と刻印をもつ長胴形の火鉢は、16世紀後葉から末葉にかけて豊後府内を中心に分布する在地系土器であることが指摘されている³⁸。
- 1363~1367は鉢で、底部に板状の脚部を有するものである。口縁端部は僅かに肥厚するもの（1363~1366）と断面が台形状を呈するもの（1367）がある。1368・1370は脚部で、特に1370は円形の脚部の中心に小さな貫通孔を設けている。風炉の脚部であろう。1371も円筒形の火鉢または風炉で、胴部に透かし窓を設けている。1372は長胴形の器形をもち、底部に円形の貫通孔を設けている。器形は不明であるが、鉢または植木鉢などとして使用されたものであろうか。
- 1373~1376は指鉢。1374・1375は口縁部が上方に立ち上がり、口縁端部内面をやや内側に屈曲させる。これに対して、1376は口縁部がやや内湾気味に立ち上げるのみで、端部が肥厚しないものである。1377は鉢で、内面に撞目は認められず、内外面にナデ調整のみを施す。1378~1380は香炉。このうち、1379は口縁部外面に双頭蕨手文、1380は二連雷文のスタンプ文を押捺する。これらの香炉も豊後府内を中心に分布する在地系土器である³⁹。1381は体部に脚または把手状の部位が付属するもので、かなり大型の製品になると思われるが、破片であるため、器形・用途は不明である。
- 1382は瓶で、口縁部外面と胴部外面を文様帯とし、当該部位に巴文・菱形文・雷文のスタンプ文を押捺している。1383は広口壺で、内外面にナデ調整を行うほか、胴部内面には指頭痕が認められる。1384は器種不明で、外面にスタンプ文が認められる破片である。横断面の形態が多角形をなしており、花瓶などの器形が想定されるが、断定できない。1385は壺の口縁部である。
- 1386は瓦質土器の破片を円形に加工した製品である。
- 縄文土器（個人） 1387は縄文土器の深鉢の底部破片である。胴部との接合部に指頭による凹みをつくり、粘土帯の接合を強固にするような工夫がなされている。全体に磨滅しているが、縄文時代晩期の所産と思われる。混入品であろう。
- 瓦 1388~1413は瓦である。
- 1388~1396は軒平瓦で、瓦当文様はいずれも巴文と考えられる。1396については、瓦当部と丸瓦部の端部の接着を強固にするために、沈線が数本施されているのがわかる。
- 1397~1403は軒平瓦である。1397は宝珠唐草文、1398~1400は蓮華唐草文、1401・1402は菱形唐草文、1403は変形菱形唐草文を瓦当文様とする。
- 1404・1405は鬼瓦。1404は眼の部位のみが残存している。1405は周縁の部分で上面と側面に竹管による円形刺突文が施されている。
- 1406~1411は丸瓦。1406・1407はいずれも凸面に縄目叩きが認められるものの、その痕跡のほとんどをナデ状の2次調整によって消されている。凹面には糸切り痕（コビキA）と大きく湾曲する吊紐痕があり、側縁近くには内叩きが施されている。1406については、玉縁部を除く長さ23.6cm、最大幅14.0cm、1407については最大幅13.5cmを測る。以上の規格や技法の特徴は、第72次調査SD025（第80次SD101と同・遺構）で出土した完形品の丸瓦（第183~187図）と特徴を同じくしている。製作年代は16世紀後葉に比定される。1408・1409は丸瓦凹面に横線を設ける個体である。

凹面に横線を設ける丸瓦

註 38 吉田寛「双頭蕨手文と二連雷文一戦国時代末期の「豊後府内」における瓦質土器の一探検」（『山口大学考古学論叢—中村友博先生追任記念論文集—』2012年）
 39 註脚に同じ。



第370図 SD101出土遺物④(1/3)



1363



1364



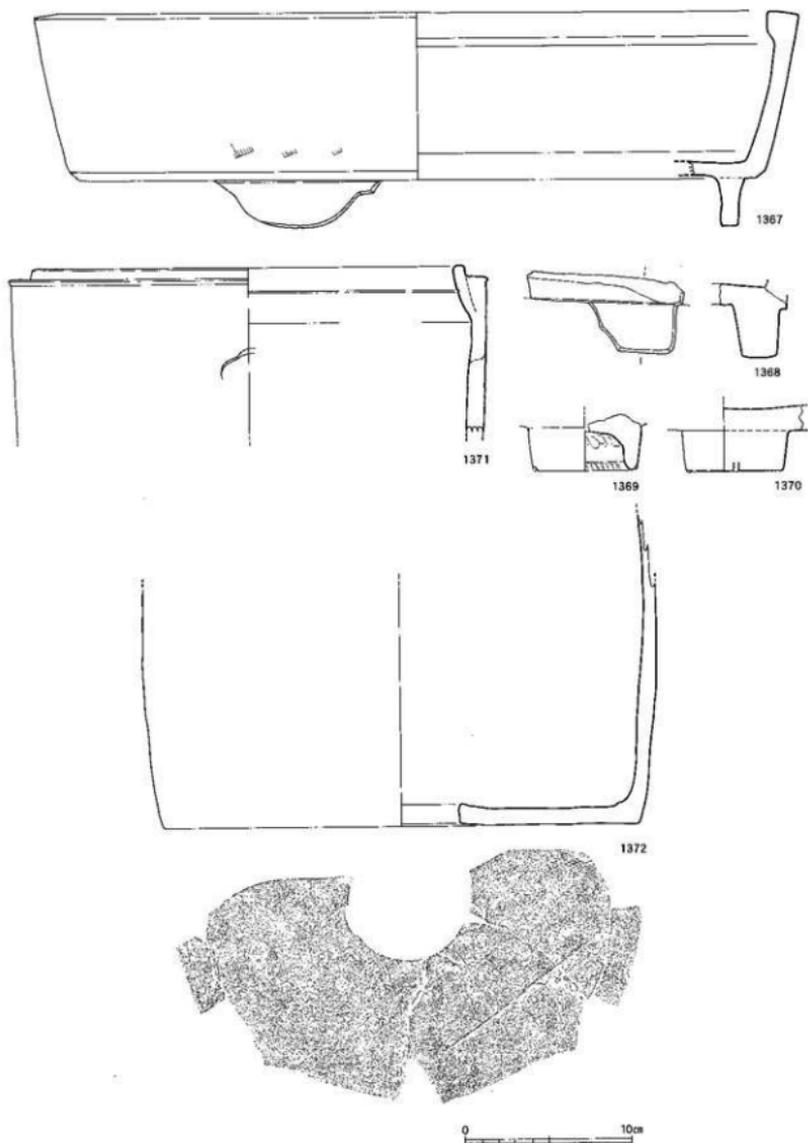
1365



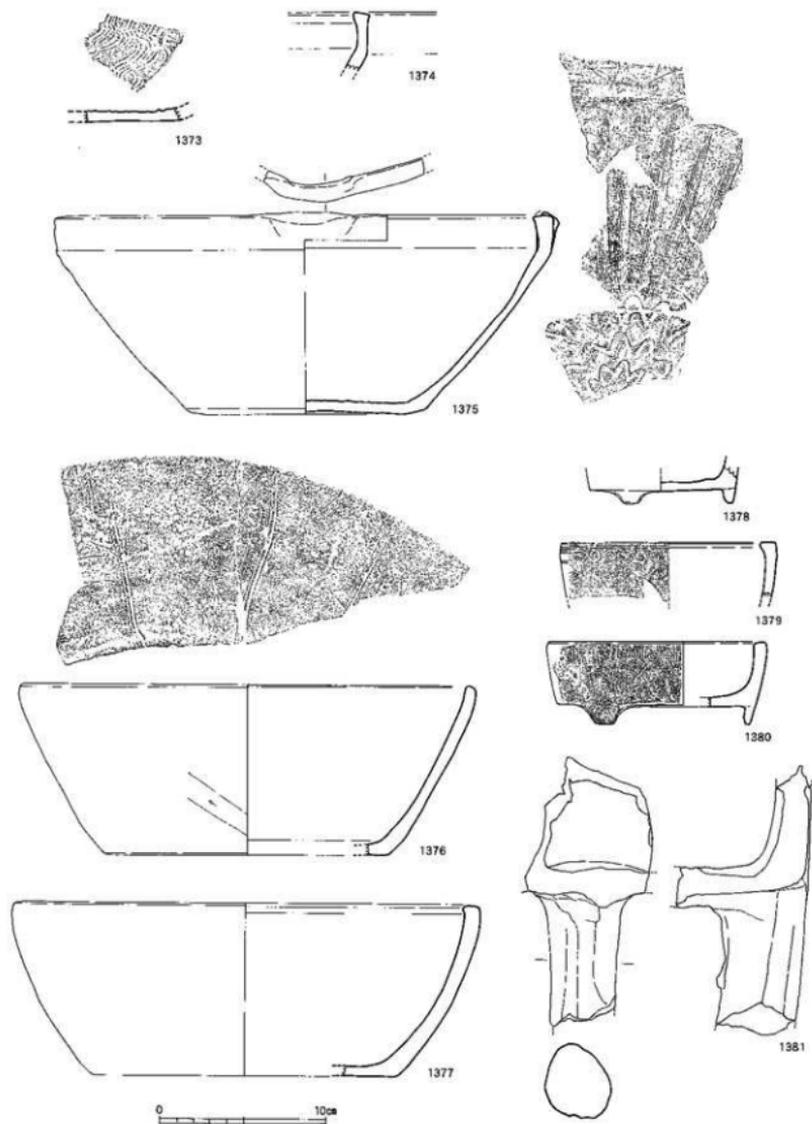
1366



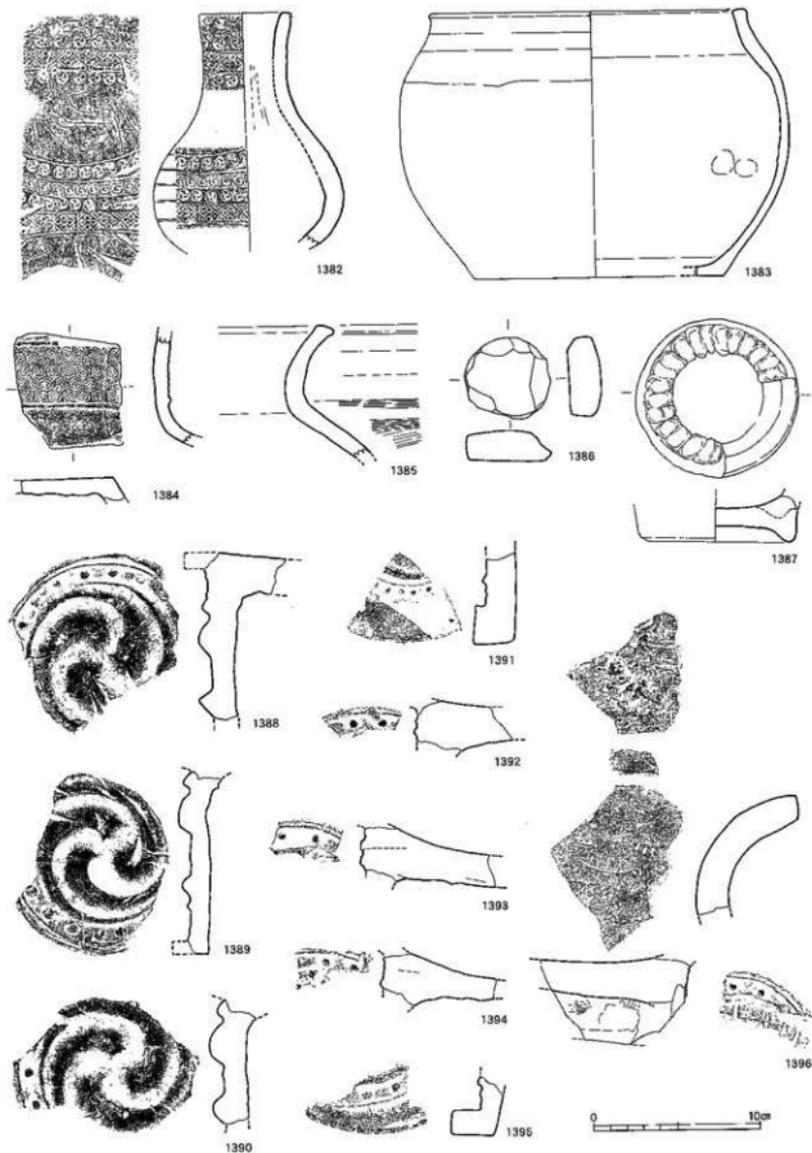
第371図 SD101出土遺物③(1/3)



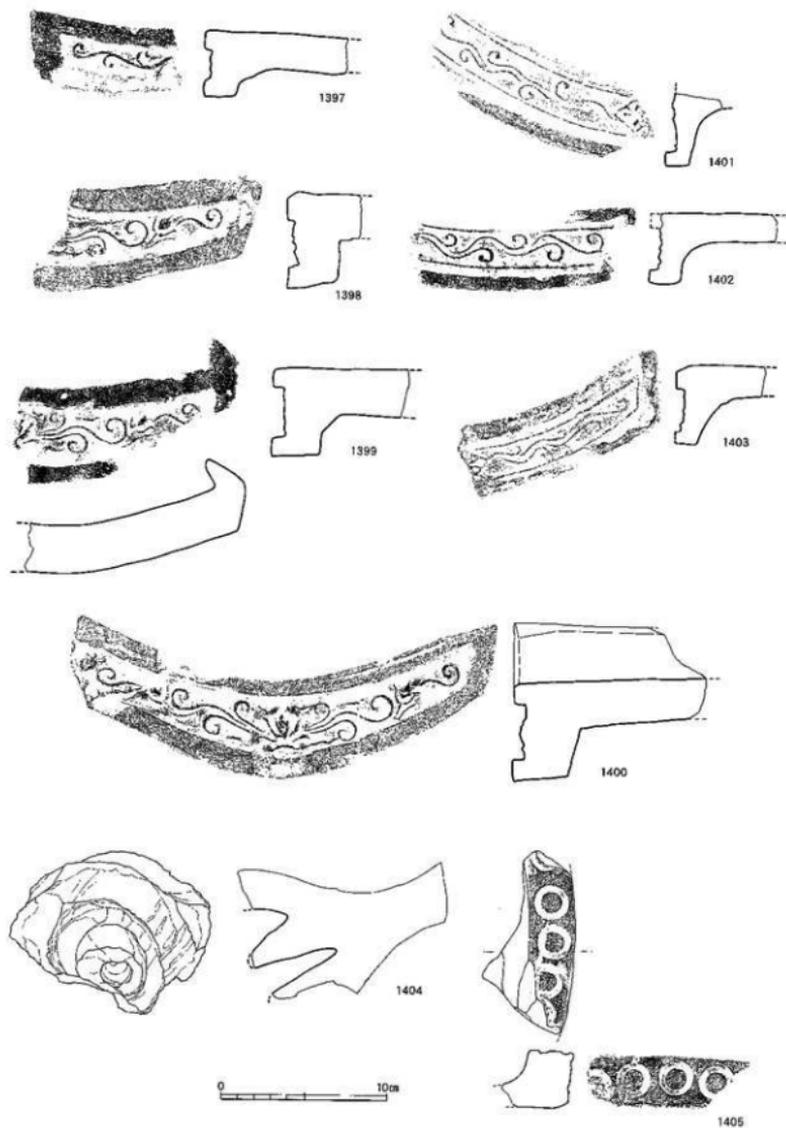
第372図 SD101出土遺物③(1/3)



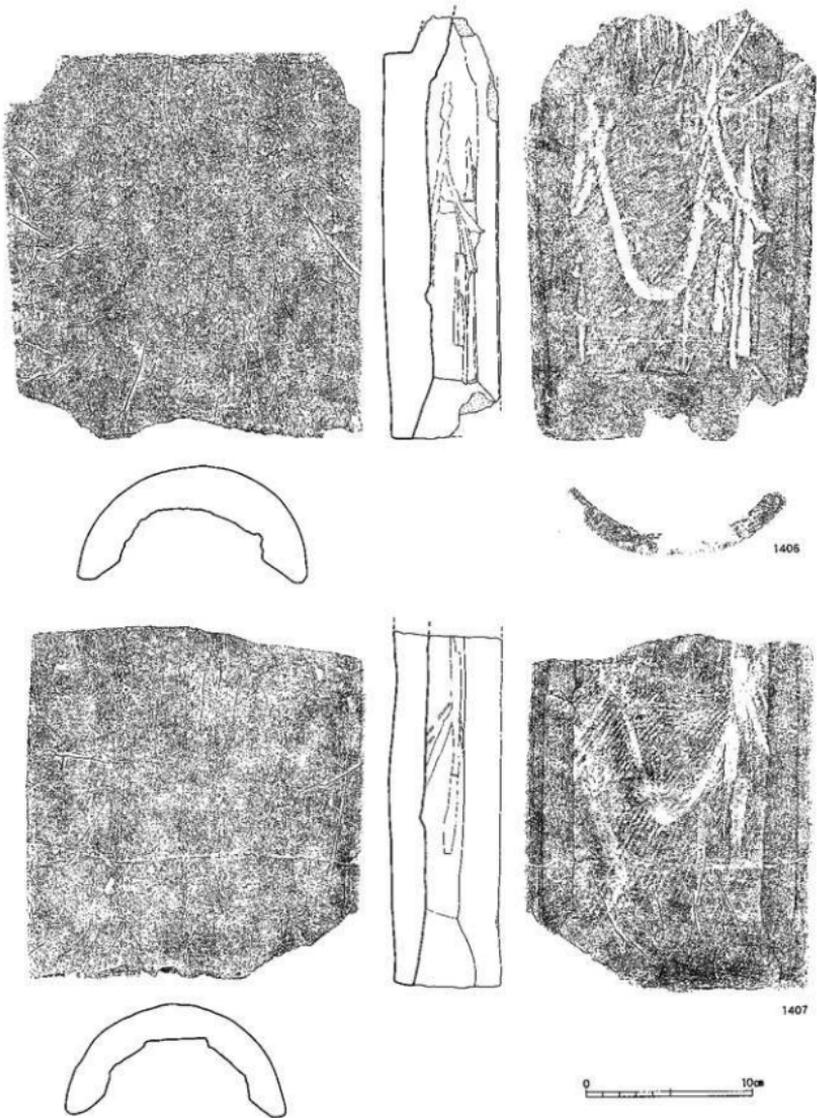
第373図 SD101出土遺物①(1/3)



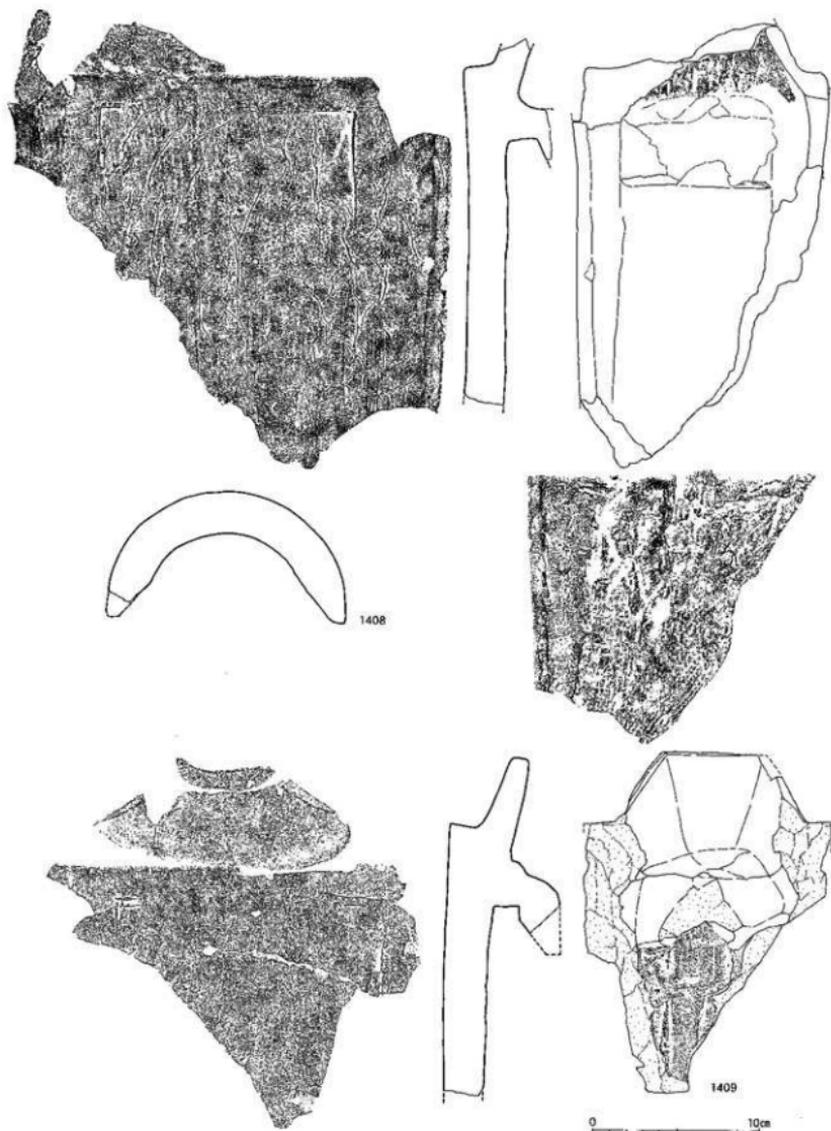
第374図 SD101出土遺物②(1/3)



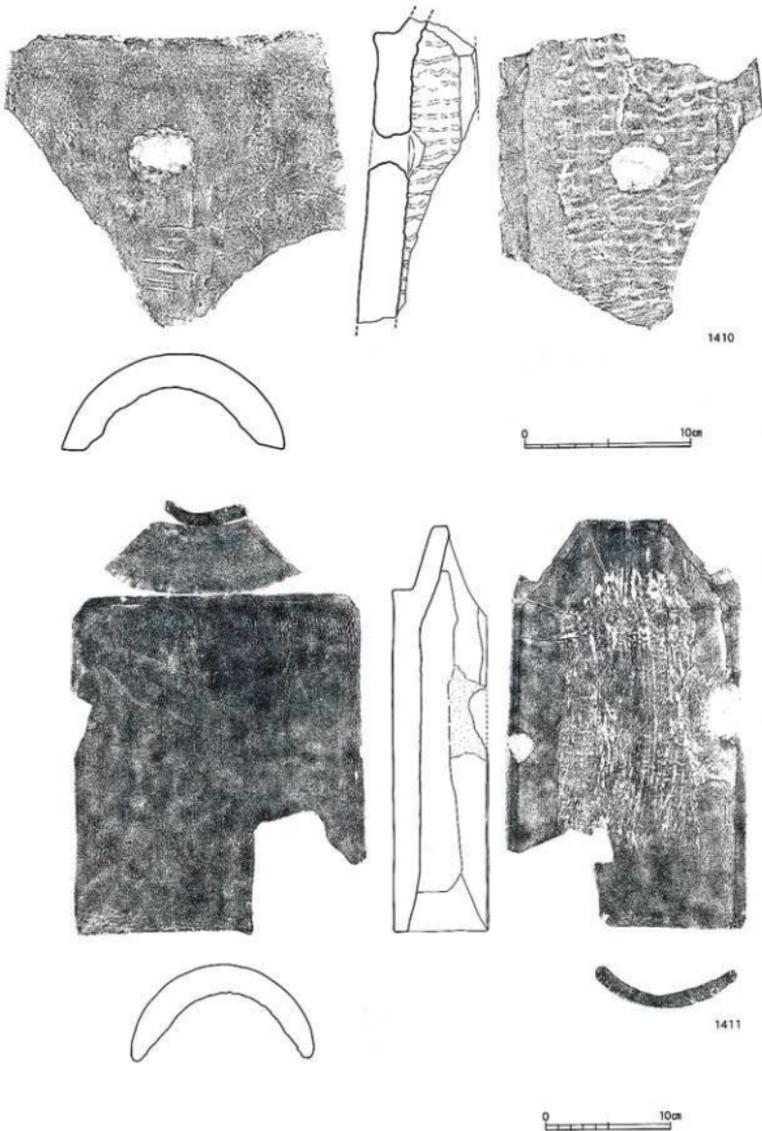
第375図 SD101出土遺物③(1/3)



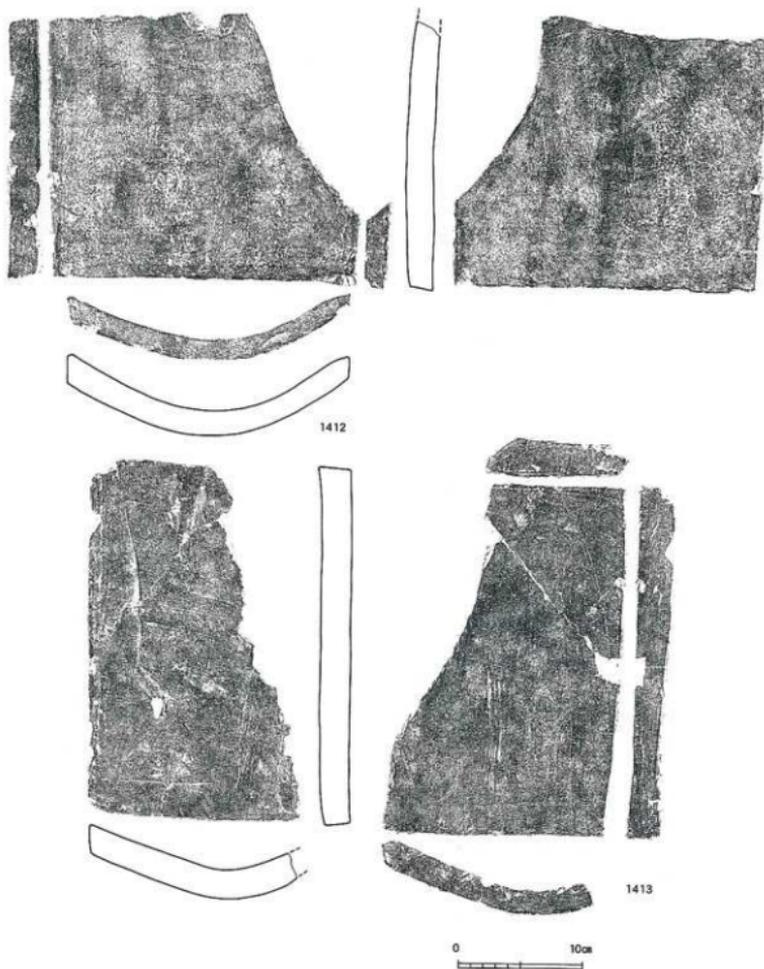
第376図 SD101出土遺物②(1/3)



第377図 SD101出土遺物⑨(1/3)



第378図 SD101出土遺物㊦(1/3)



第379図 SD101出土遺物②(1/3)

中世段階においてこのような特徴をもつ丸瓦の資料は九州地域では未見で、今後類例の探索や技法の起源などの解明が必要であろう。現状では製作年代は不明である。1410は凹面に九州タイプの吊紐痕が見られ、丸瓦筒部に焼成後の穿孔を設けている。1411は凸面に縄目叩き、凹面に布目痕がみられる個体で、吊紐痕は布目痕により目立たないが、九州タイプのものであろう。玉縁部を除く長さは27.6cm、最大幅は14.7cmで、1408・1409より大型である。製作年代は現状では不明であるが、おそらく1408・1409よりは古いであろう。1412・1413は平瓦の大型破片である。

硯・砥石・
石塔・石
臼・茶臼

第380～382図では、石製品を图示した。

1414～1418は輝緑凝灰岩を素材とした赤間硯で、1418は再加工により、砥石に転用されている。1420～1423は砥石である。いずれも砂岩系の石材を素材とする。

1424～1453は石塔類の部材で、いずれも凝灰岩を素材とする。1424～1448は空風輪で、梵字や文字の墨書が認められるもの(1429・1431・1441・1445・1446)や「X」の刻線が施されているもの(1451)なども存在する。1452・1453は地輪の破片と思われるもので、破損した状態で出土した。このため、石塔の部位ではなく、建築材であった可能性もある。

1454～1457は石臼で、安山岩が素材として用いられている。その形態から、1454～1469は上臼で、1457は下臼である。1458～1457は茶臼で、和泉砂岩が素材として用いられている。その形態から、1458・1459は上臼で、1461・1467～1469は下臼、1460・1412～1465は小破片のため、不明である。

金属製品

第383図では、金属製品を图示した。

1470は刀である。柄に蔓状(植物)の繊維を巻き付けた状態で出土した。柄の部位にこれ以上の装飾や拵えがあったかどうかは不明である。その形態については、現在「山刀」などと呼ばれているものに類似しており、武器というよりは生活用具の機能が高い製品であった可能性も考えられる。

1471・1472は小柄である。1471は保存状態が良く、鉄製の刀身部分は錆が生じているものの、銅製と思われる柄の部位については錆がほとんど認められず、表面の色調が金色を呈している。1472は柄の中段に木瓜文と思われる文様を鋳出している。これについては錆が生じており、表面の色調は淡緑色である。1473は目貫金具で、これも保存状態がよく、表面に錆がほとんど認められない。理化学的な分析を行っていないので、材質は不明であるが、表面の色調は金色を呈している。打ち出しによる文様は、鳥と松樹か。1474・1475は用途不明の銅製品であるが、これらも表面が金色を呈している。これについても理化学的な分析を行っていないため、材質は不明。1476～1478は用途不明の銅製品、1479は鋳製の銅製品である。1480～1482は鉄釘である。1483は平面形態が半月形を呈し、器壁の薄い胴部をもつもので、青銅製の小型容器と思われる製品である。小片であるため、全形は不明である。1484は鉄織で、先端部から基部までが残存する完存品である。1485は金属製の筭と思われるもので、これも先端部から基部までが残存する完存品。先端部に匙面状の耳掻きを設けている。耳掻きの部位と基部を繋ぐ部分には、螺旋状の沈線が施されている。1486・1487は青銅製の分銅で、表面に「三」(算木文)を鋳出し、裏面にはタガネで文様を施している。豊後府内のみ分布する特徴的な太鼓形分銅である。重さは1486が1.4g、1487が1.5gである。1488は鎌で、青銅製の完存品である。基部の先端には紐を通すための貫通孔が設けられている。

目貫金具

分銅

耳掻き
または筭

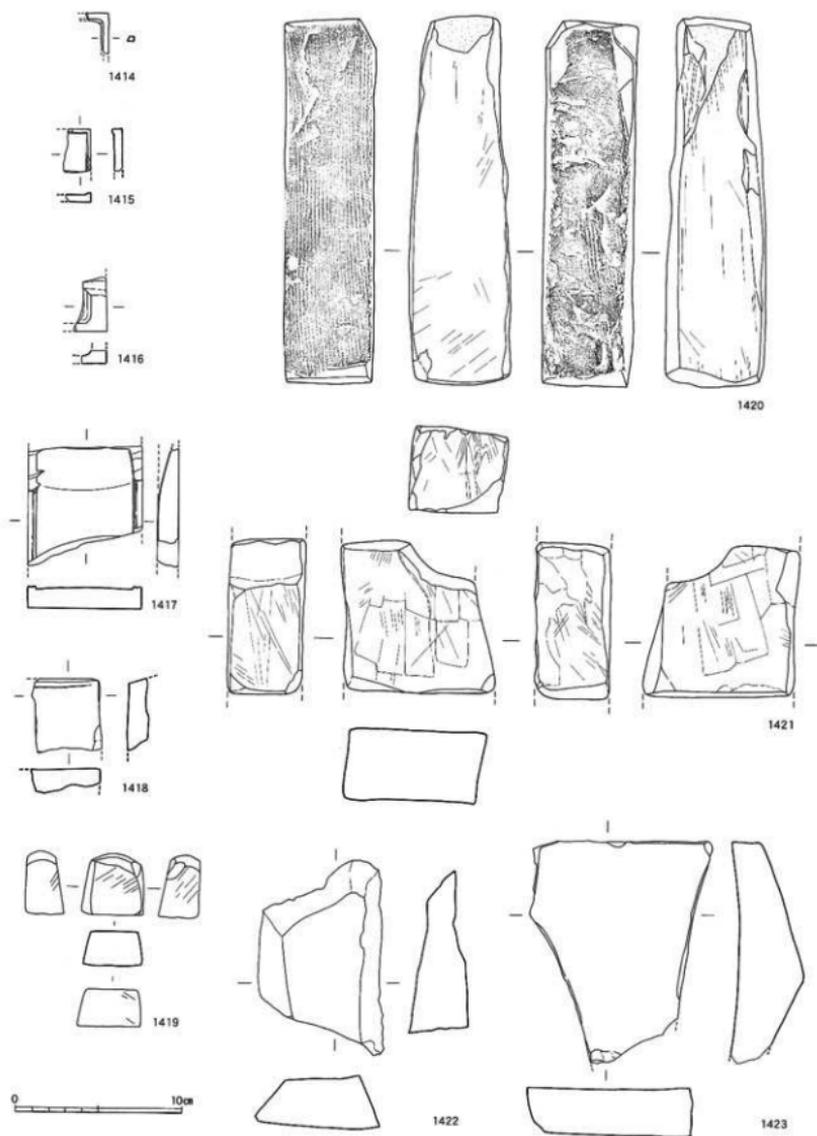
1489～1492は骨製品(骨角器)で、耳掻きまたは筭である。先端の一端は耳垢をすくうための匙状の面をなしており、別の一端は尖るように加工が施されている。このような製品は隣接する第11次調査SD44や第88次調査SD120(第80次調査SD101と同一遺構である堀)でも、複数個体が出土している。1491・1492は欠損部分がない完存品である。

牡丹状の
ガラス製品

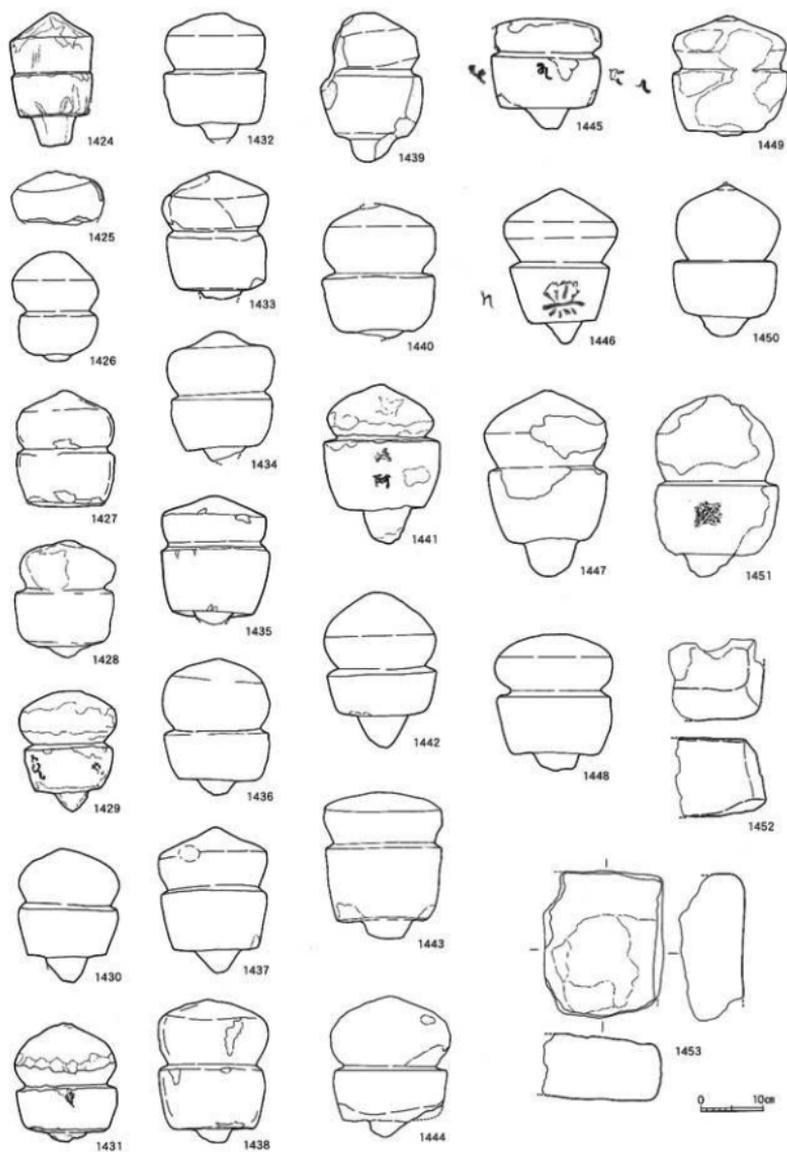
1493・1494はガラス製品である。1493はガラス小玉で、色調は乳白色を呈する。1494はボタン状のガラス製品であり、色調は不透明な乳白色を呈する。用途不明の製品であるが、同様の形態で青色の色調をもつものもあり、装飾品や双六の駒と考える説もある。

銅銭

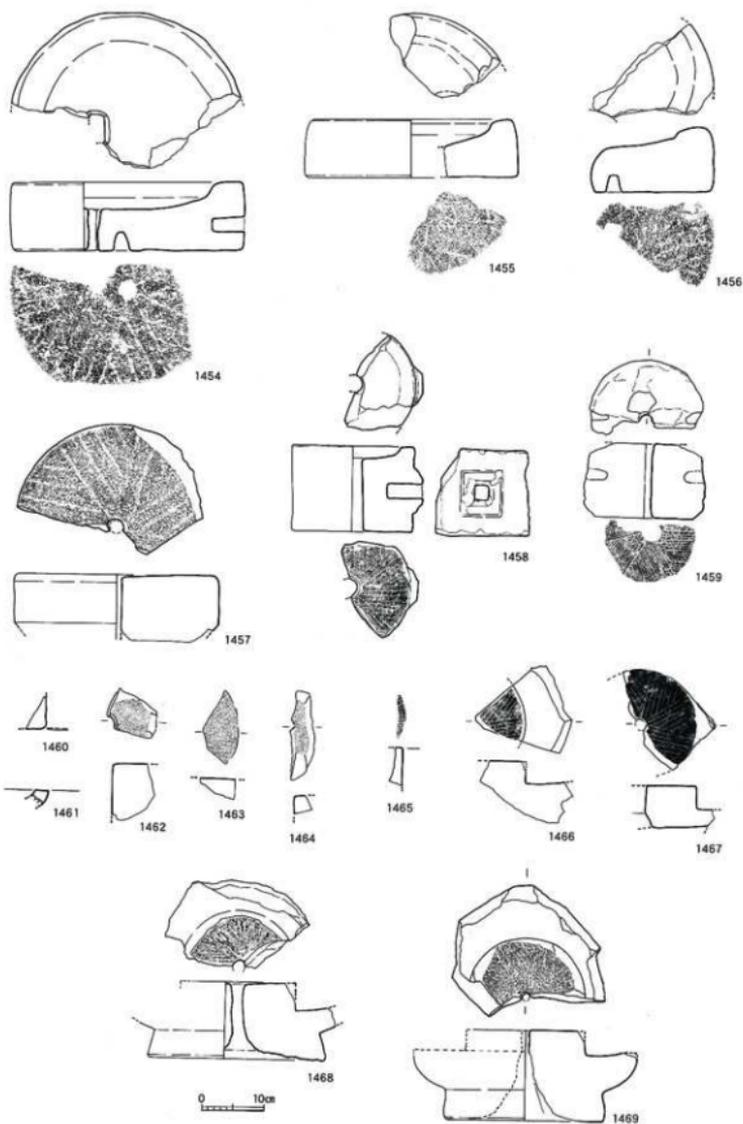
第394図1495～1506は、銅銭である。銭種や初鋳造年などのデータは、巻末の遺物一覧表を参照されたい。



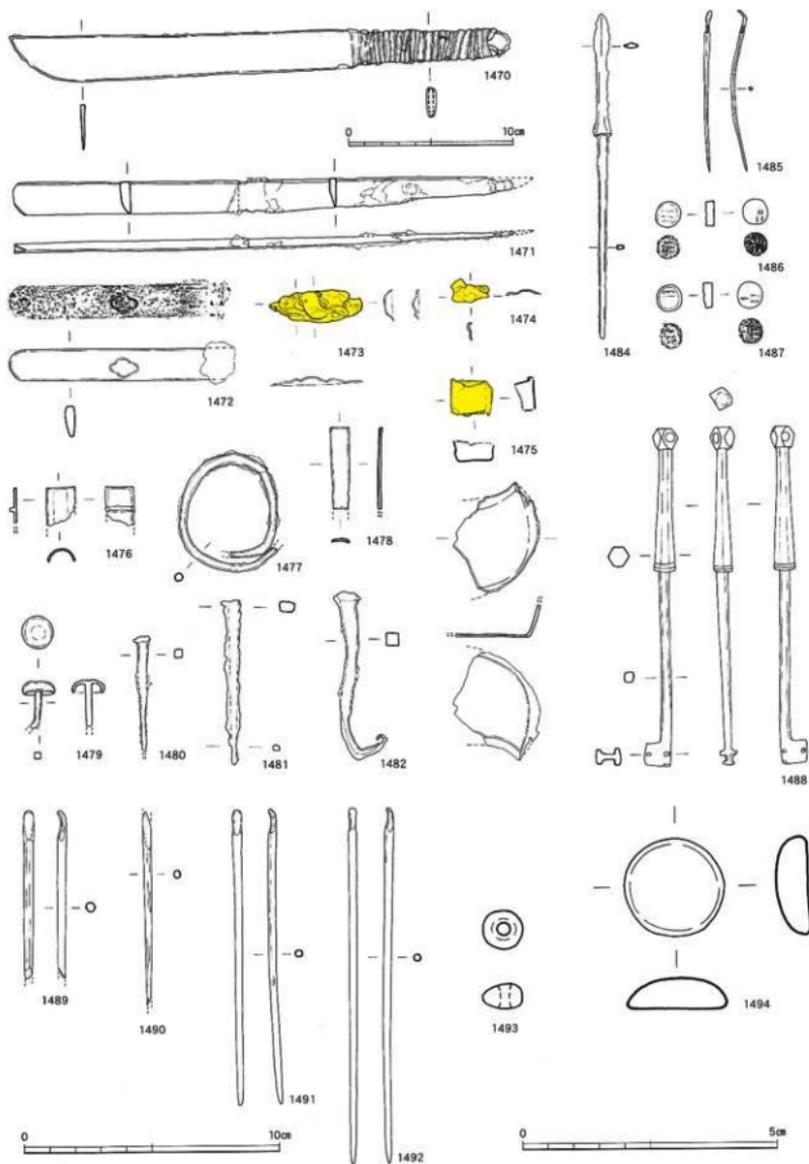
第380圖 SD101出土遺物㊸(1/3)



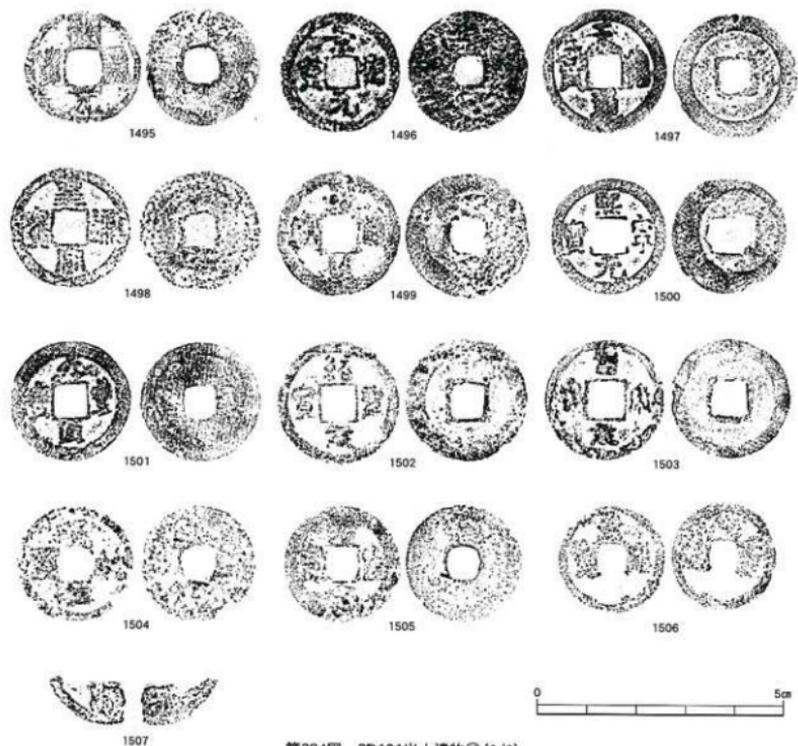
第381図 SD101出土遺物②(1/3)



第382図 SD101出土遺物①(1/3)



第383図 SD101出土遺物①(1/3)



第384図 SD101出土遺物①(1/1)

第385～400図は、木器ないし木製品を図示した。

椰子の実の
容器

1508は椰子の実(ヤシノミ)を二次加工して容器とした製品³⁸⁾の破片である。椰子の実の皮を利用して「容器」として使えるような加工がなされており、現状で口縁部と思える部位が、意図的な加工によるものか、意図のない欠損によるものなのかを判断するのは難しい。

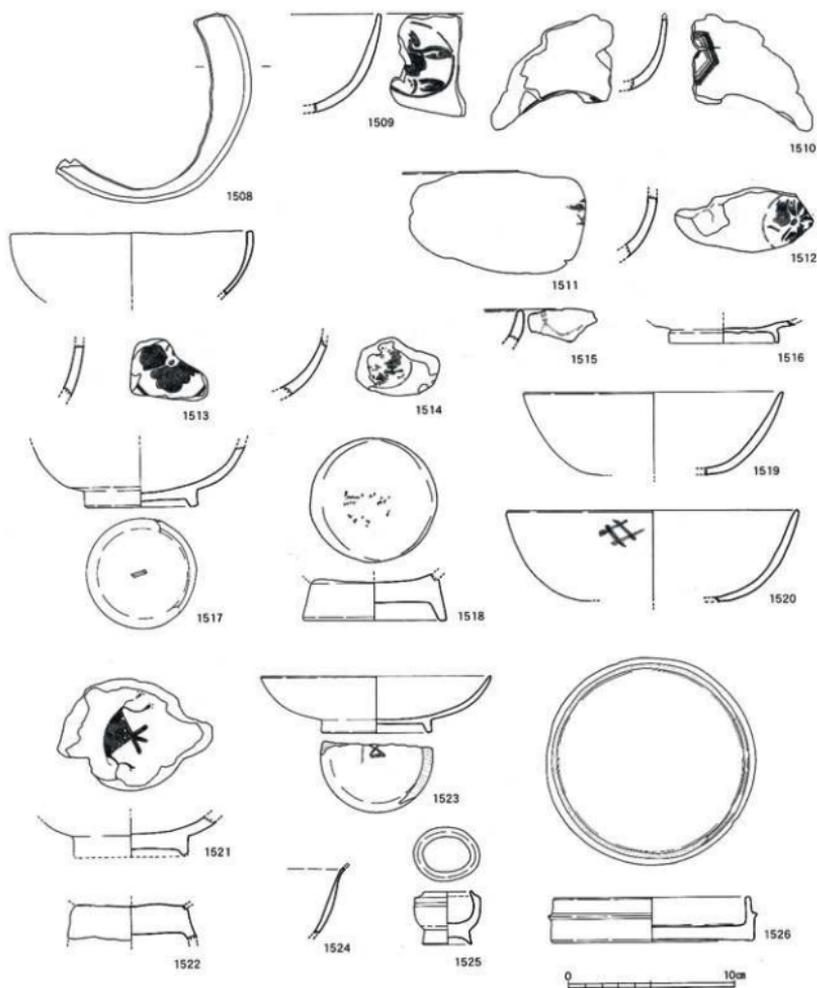
橘文の漆器
碗

1509～1524は漆器碗である。1509は全体に黒漆を施し、外面に赤漆で橘文を描いている。近年、このような「橘文」の文様を描く漆器碗の出土事例が豊後府内の発掘調査で増加している。このため、橘文の漆器碗は豊後府内の塗師による在地系の製品のひとつであると考えている。

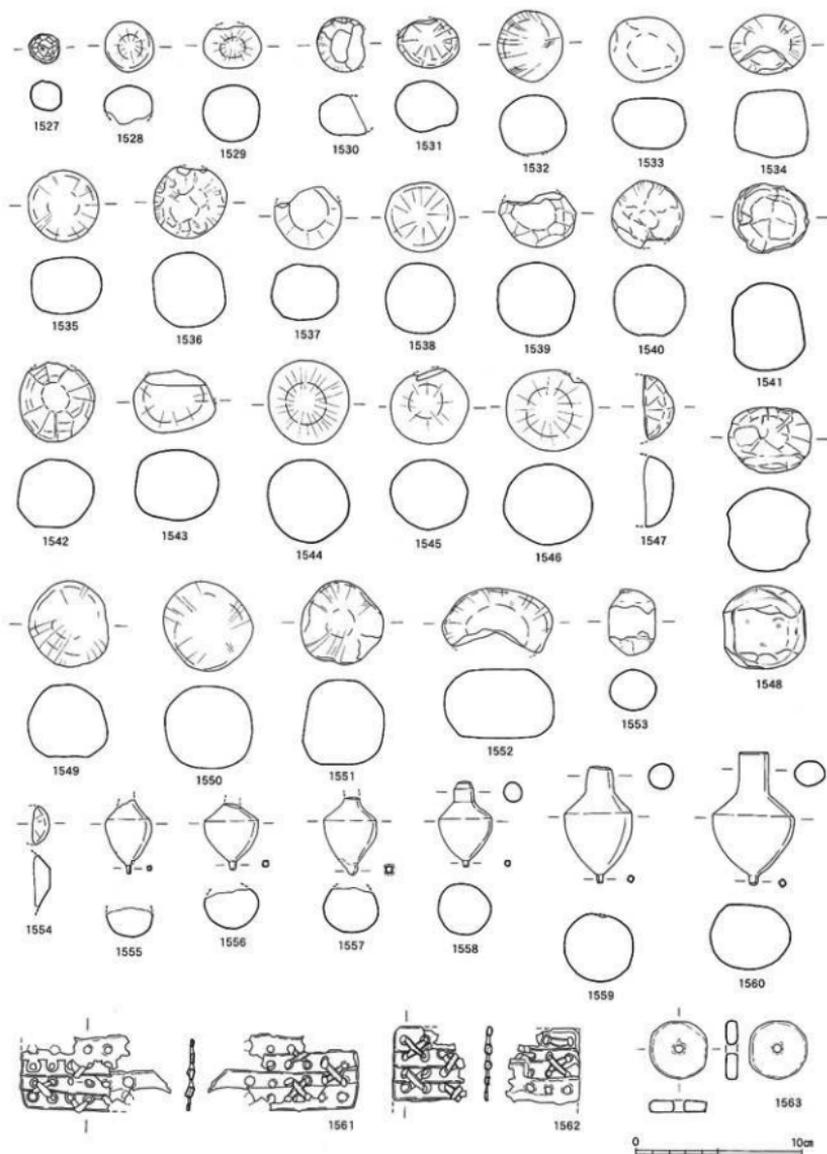
鏡篋

1525・1526は合子の身と考えられる容器である。1525は小型の製品で、外面に黒漆が施されている。口縁部の平面形態は整円ではなく、楕円形を呈しているが、これは経年による変化である可能性も考えられる。1526も黒漆が施されているもので、その形態から「鏡篋」である可能性が高い。

註 38) 松井章氏(独立行政法人奈良文化財研究所)のご教示による。

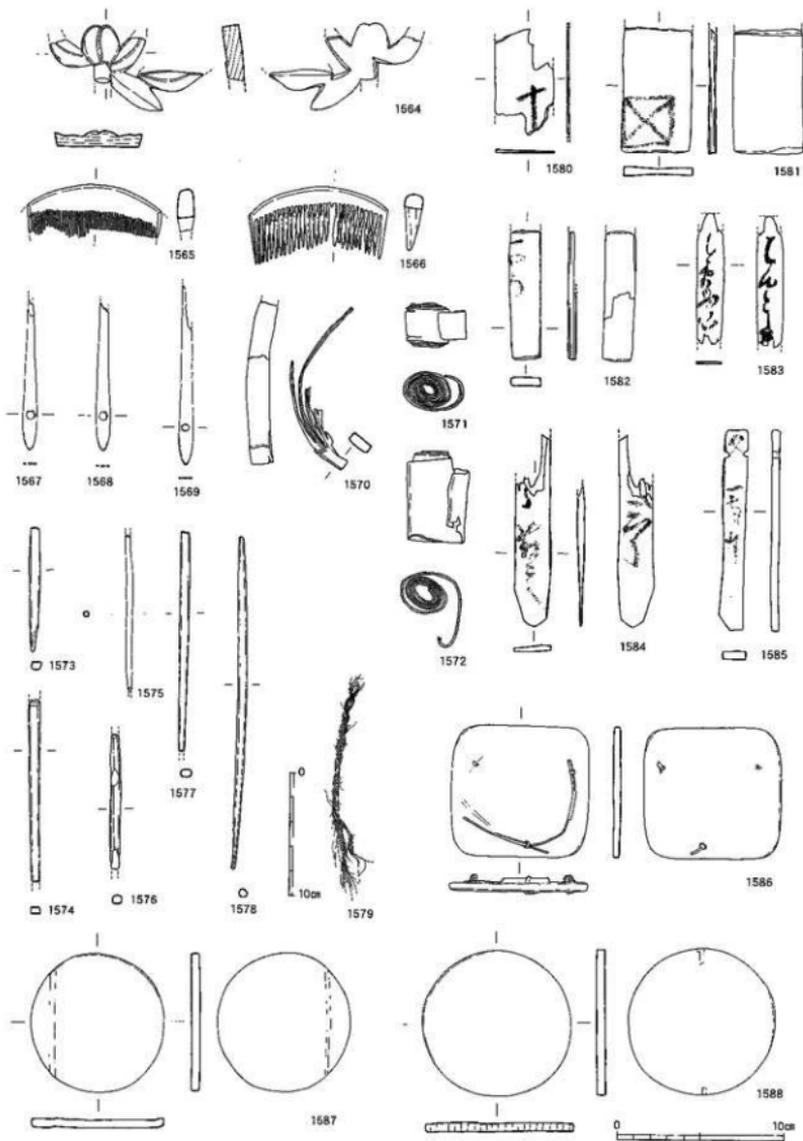


第385図 SD101出土遺物㊸(1/3)

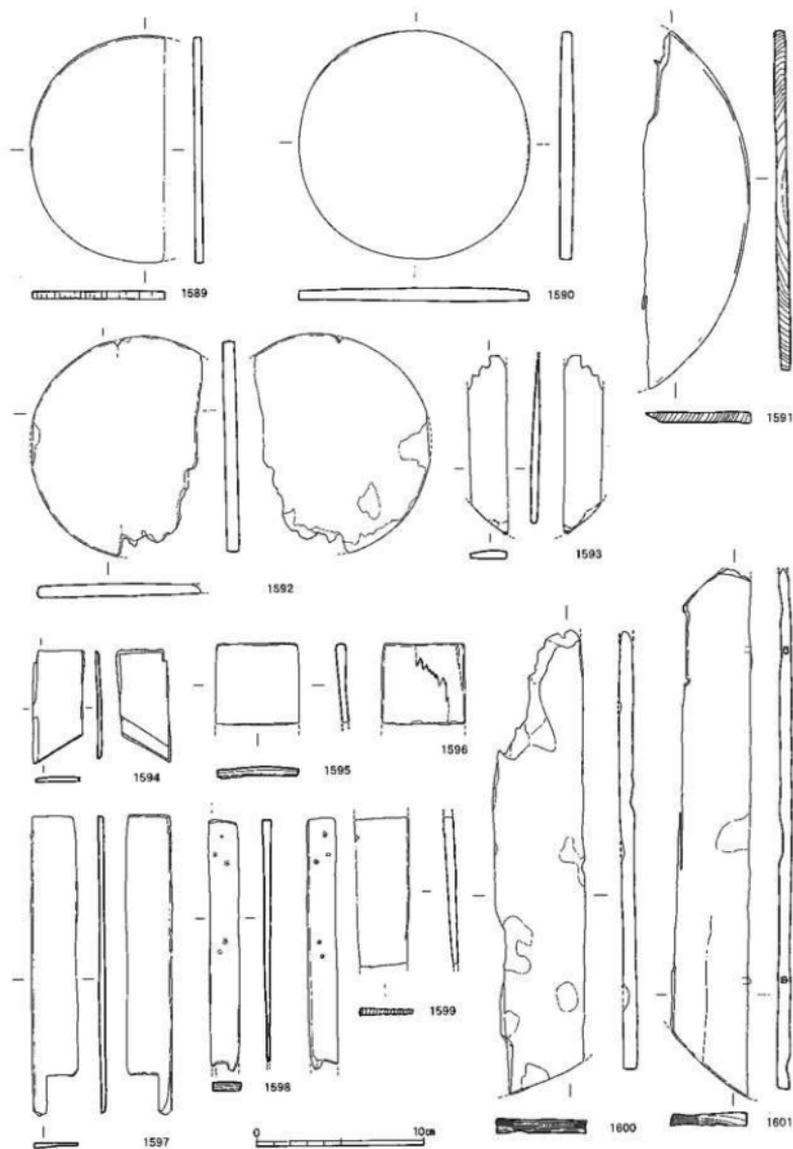


第386図 SD101出土遺物㉔(1/3)

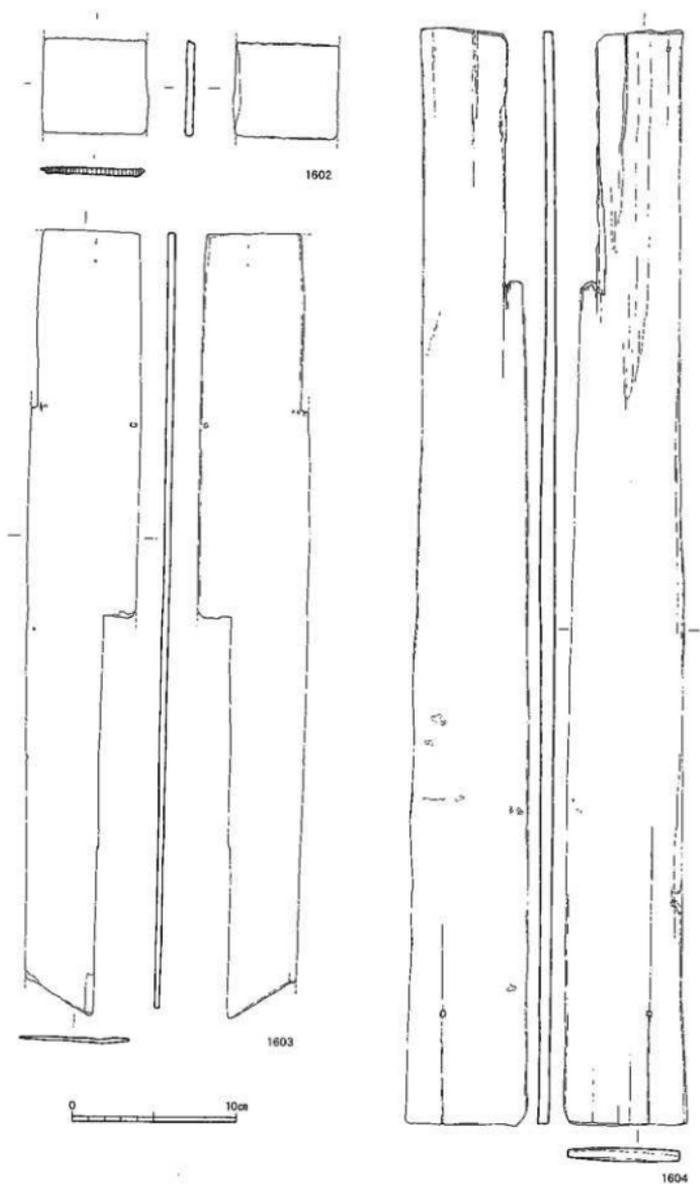
- 毬杖の球 1527～1552は毬杖（ぎつちょう）の球である。大小様々な大きさがあるが、おおむね断面形態が正円になることを意図して作られているようだ。また、1548には上面と側面に墨書が認められ、側面には子供の顔（？）と思われる人面が描かれている。1553は断面形態が正円ではなく、上下端に加工が顕著に認められるもので、これも毬杖の球かとも考えた遺物であるが、断面形態が正円ではないことから、用途不明の製品としておきたい。1554～1560は独楽（コマ）で、これもサイズが統一されておらず、小さなものから中型のものまでの個体が認められた。残りの良いもののみと、木製の本体に断面が方形を呈する鉄製の芯を打ち込んで製作していることがわかる。
- 木製の小札 1561・1562は木製の小札である。表面に黒漆を塗り、表面を強固にしている。1563は小型円盤で、中央に貫通孔を有する。紡錘車の可能性がある。
- 1564は用途不明の製品で、表面に植物の文様を施し、裏面は無文で平滑に仕上げている。建築部材もしくは装飾品の一部か。1565・1566は櫛である。1567～1569は扇の骨である。薄く削って加工した木材の先端に要（かなめ）の金具を嵌めるための貫通孔を有する。1570は竹の破片。製品の一部であった可能性があるが、小片のため不明である。1571・1572は板反製の紐。曲物側板などを固定するために使用されたものと推定される。しかしながら、これらは皮紐のみが丸まった状態で単体で出土しており、特殊な状況といえるのかもしれない。1573～1578は棒状に加工された製品で、「箸」として使われたものであろう。1579は縄紐である。
- 1580～1585は木札もしくは付札。表面もしくは表裏の両面に墨書が認められる。
- 曲物底板 1586～1591・1600・1601は曲物底板。1586は隅丸方形に加工され、3箇所小さな貫通孔が設けられている。底板の上には断面形態が略円形に加工された曲物が固定されていたと思われるが、欠損している。1587～1593は木材を正円形に加工した円盤で、特に1587・1588は小型であることから、柄杓などの底板であった可能性が高い。1600・1601は複数の板材を組み合わせたもので、側面には木釘の痕跡が認められるもの（1601）もある。1594～1599・1602・1604は加工木材で、木釘の孔の痕跡などが認められるものが存在することから、曲物側板として使用されたものであろう。
- 1605～1611も用途不明の加工木材。先端を尖った状態に加工されたもの（1605）や木釘の孔の痕跡が認められるもの（1610）がある。1613も用途不明の加工木材で、複数の加工木材を組み合わせて使用する製品の部材と思われる。1612は桶の側板である。1614も用途不明の加工木材で、中央部に方形の貫通孔が設けられている。
- 1615～1621は建築部材と推定される加工木材。ホゾ穴が設けられているもの（1616）や釘穴が認められるもの（1617・1621）もしくは鉄釘が打ち込まれているもの（1619）などが認められる。
- 杭 1622～1625は杭である。
- 下駄 1626～1628は下駄の歯、1629～1639は下駄の本体である。このうち、1629はサイズが小さいことから、子供用であろう。また、1630・1631は別木で作った歯を下駄本体に差し込むタイプのもの、1632～1639は一木作りのものである。
- 1640・1641は用途不明の加工木材で、1640は丸太を横方向に切断したもの、1641は板状のもの
- 竹筒 1642・1643は竹筒で、杭として使用されたものか。



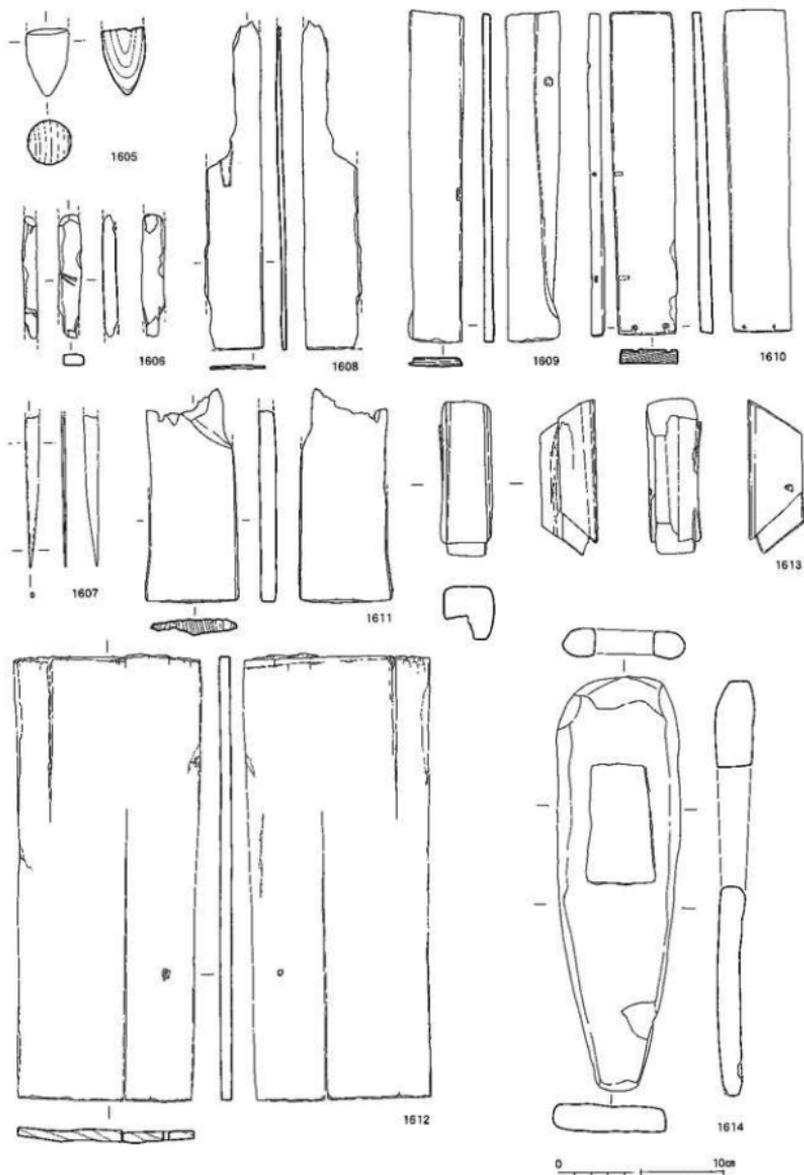
第387図 SD101出土遺物⑥(1/3)



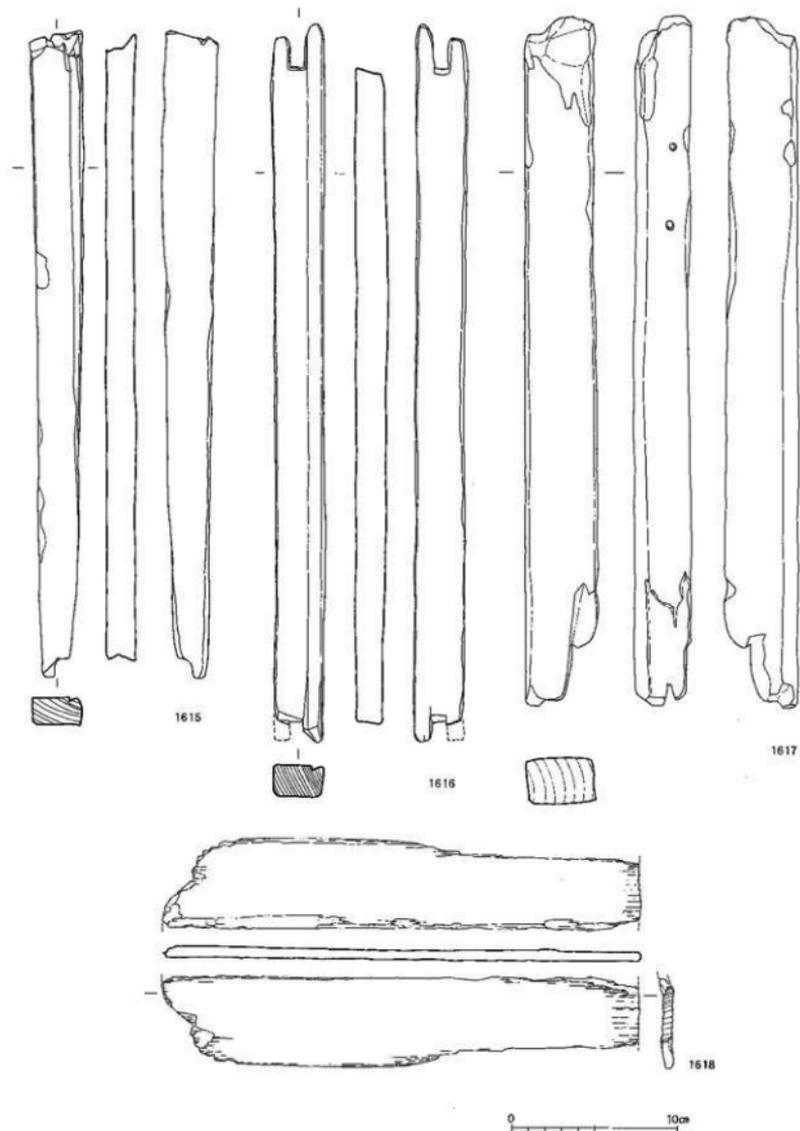
第388図 SD101出土遺物①(1/3)



第389圖 SD101出土遺物④(1/3)



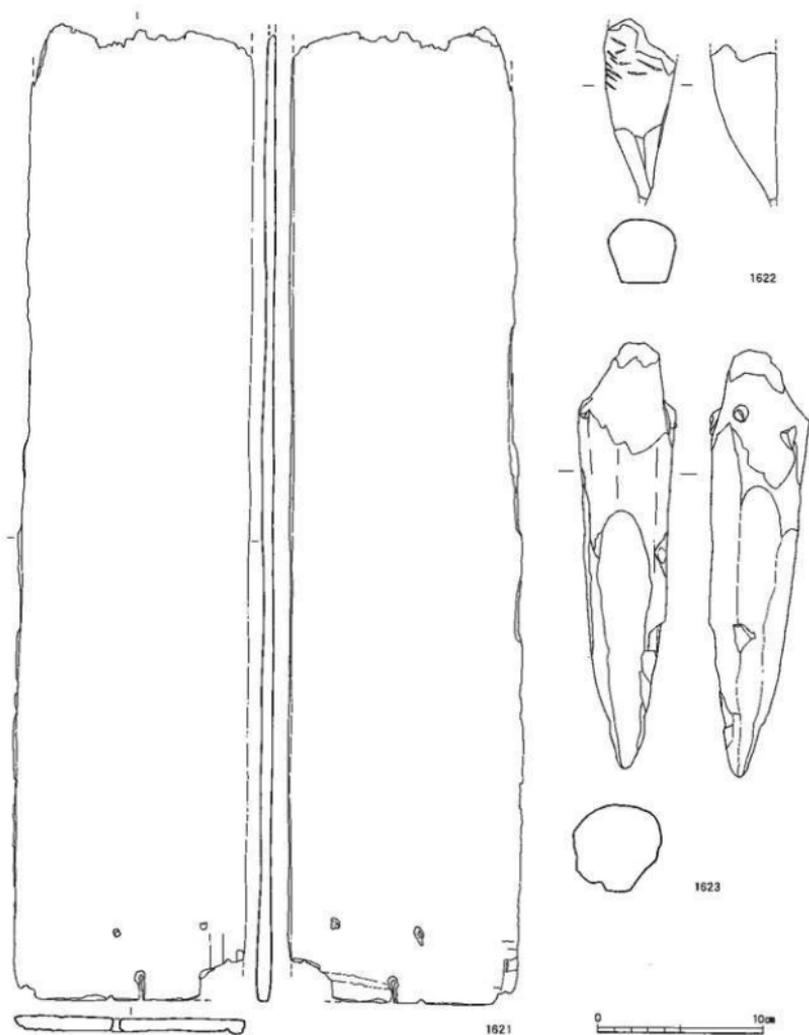
第390図 SD101出土遺物㊸(1/3)



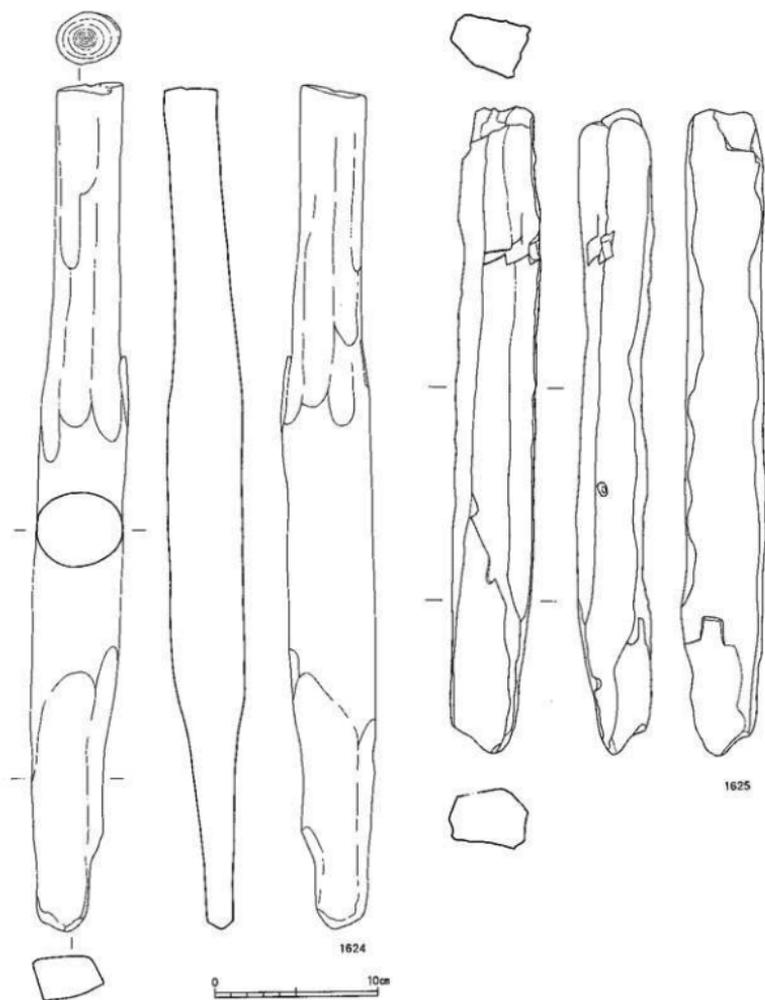
第391圖 SD101出土遺物⑥(1/3)



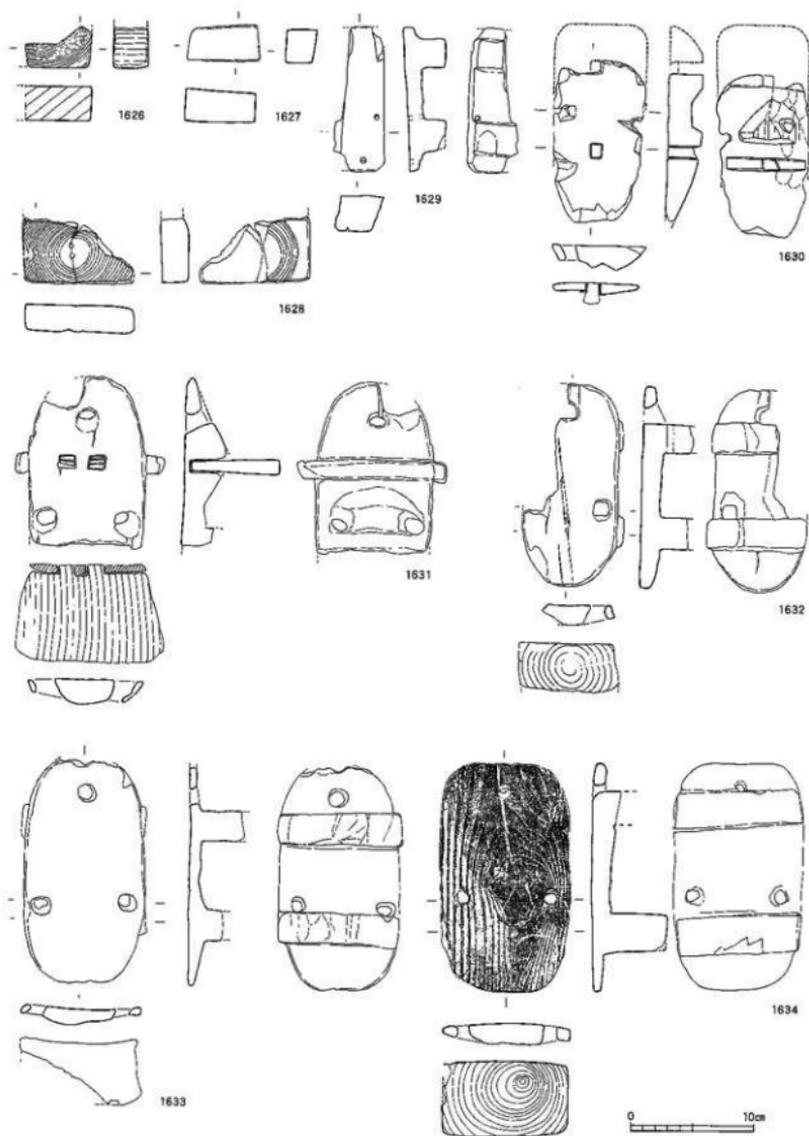
第392図 SD101出土遺物④(1/3)



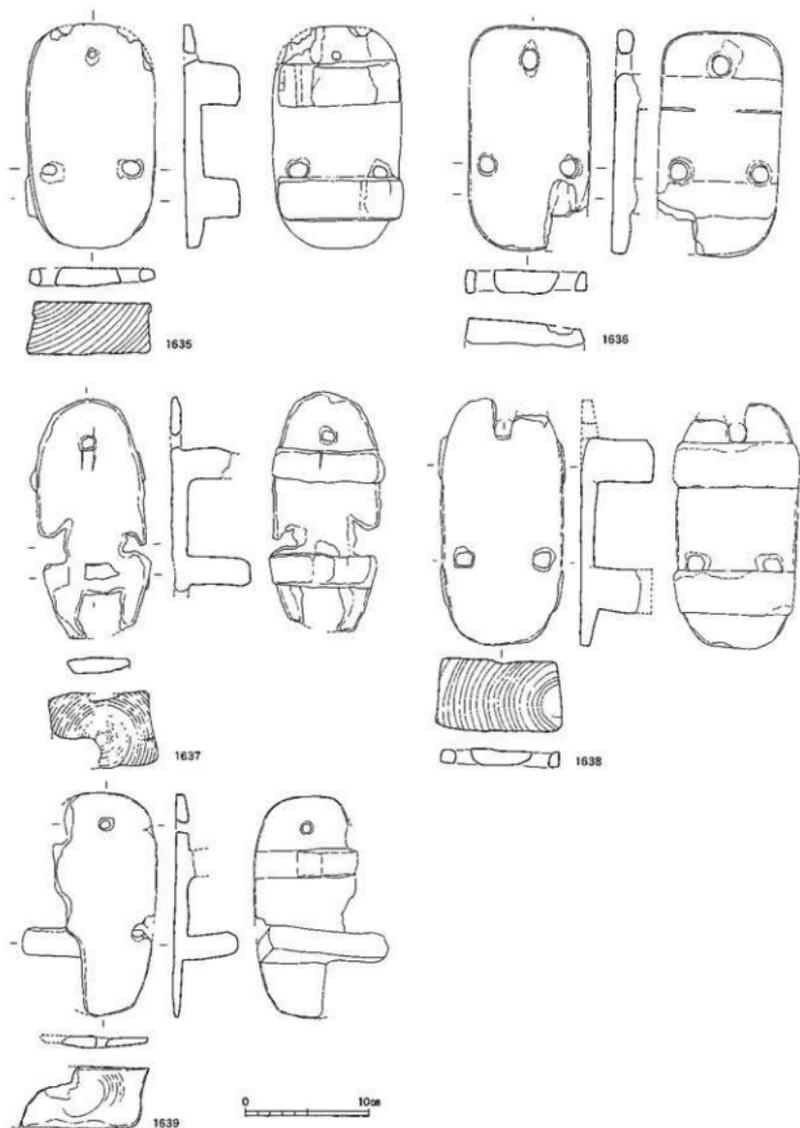
第393図 SD101出土遺物⑤(1/3)



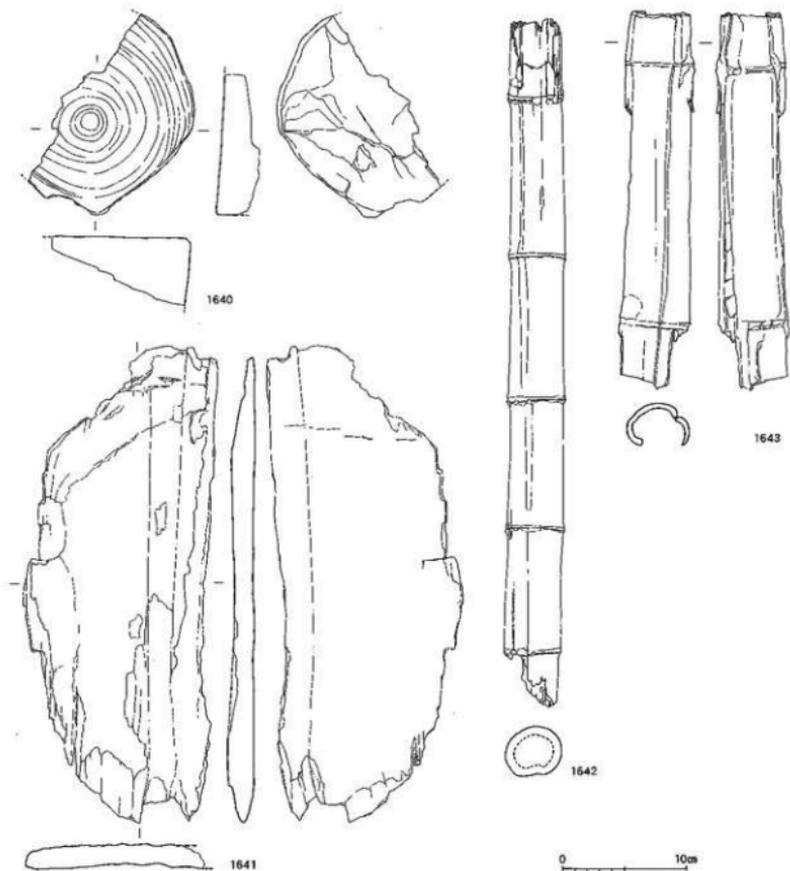
第394図 SD101出土遺物②(1/3)



第395図 SD101出土遺物⑤(1/4)



第396図 SD101出土遺物④(1/4)



第397図 SD101出土遺物⑨(1/4)

朱漆金襴
團扇馬人物
文唐枕

第398～400図に示したものは、注目すべき資料で、木材と漆を使用して作られた「枕」である。当該資料は漆を使った技法と文様から、中国明代に製作された船載品と推定され、「朱漆館金襴團扇馬人物文唐枕」（しゅうるし・そうきん・ろうかくきばじんぶつもん・からまくら……以下、「唐枕」¹⁶⁴⁴）と略称）と命名した。

唐枕の大きさは長さ36.2cm、幅15.4cm、高さ12.0cmである。

発掘調査で出土した直後は、側板の漆などが比較的良好な状態で残っていたものの、本体は非常に脆弱な状態であった。そのため、発掘現場から持ち帰った後、専門業者に委託して糖アルコール法による保存処理を行った。前述した唐枕の大きさは、保存処理後に計測したものである。

唐枕は木材で作った側板を芯材でつなぎ、芯材のまわりは細かい編目でできた布と荒い編目でできた編物で包まれていたようだ(第400図下段)。使用された木材は側板がクスノキ、芯材がコナラ属アカガシ亜属、木釘がスギである。本来、側板と布・編物全体を漆で固め、枕の形を作っていたようであるが、頭を乗せる部位は大きく欠損している。

「鍍金」 側板のうち一枚(第399図上段)には朱漆がよく残っており、「鍍金」の技法で文様が施されている。「鍍金」とは中国における漆器の装飾技法のひとつで、漆塗りの面に専用の刀で文様を施し、そこに金箔または金粉を押し込むので、宋代から清代に盛行した。同様な技法を日本では「沈金」と呼称する。側板には二段の割り込みが設けられ、一段目に複合鋸歯文、二段目に二重圓線文・樓閣(建物)・騎馬人物・樹木・雲などが描かれている。取り上げ直後には、漆面全体にシワが生じるなどの症状が見られたものの、文様全体は良好な状態で残っていたといつてよい(第400図上段)。

「沈金」

しかしながら、漆と木材の収縮率の違いからか、保存処理の過程で漆面に新たな亀裂が複数生じ、文様の一部も不鮮明になってしまった。特に、発掘直後には良好な状態で残っていた樓閣の門で客人を待つ人物や樹木の表現の一部は、ほぼ完全に欠失した状態となっており、非常に遺憾である。

側板のうち他の一枚(第399図下段)には、出土当初から漆面の残存はよくなく、二段目の割り込みの左下のごく一部に朱漆と鍍金文様が残存する。残存する鍍金文様は、二重圓線である。

側板の側面と端面には木釘が打ち込まれた孔が設けられており、木釘そのものが残存している部位も少なくない。布と編物はこの部位で固定されていた可能性が考えられる。また、側板の右側の側縁付近には新たに貫通孔が設けられた部位も存在し、これについては日本に輸入された後に改めて補修された痕跡である可能性がある。

京都系土師器の共伴

枕本体の中央部や右寄りには、完存品の京都系土師器皿が突き刺さったような状態で出土したが、これについては意図的なものではなく、唐枕と京都系土師器皿の廃棄時に生じた偶発的なものであろう。とはいえ、このような遺物の出土状態は、唐枕と京都系土師器皿が同時に廃棄されたことを物語る事象であり、廃棄年代の指標となる土器との共伴関係がわかる資料として注目しておきたい。

なお、唐枕は動物遺存体や貝類などとともにSD101の下層から出土しており、その出土状況から、第2南北街路を挟んで東側に位置する唐人町の住民が廃棄したものと推定される。

註 00 「唐枕」に関する産地特定・年代・技法については、四柳憲幸氏(石川県輪島漆芸美術館長・漆器文化財科学研究所長)より、詳細なご指導を得た。

また、鹿毛敏夫氏からは、大友義隆が畠山義統に送った天文10年(1541)と推定される書状の中に、「唐沈金」の表記が見られることをご教示いただいた。

「速々可申渡之處、故違相過候、非本意候、仍大刀一箇國行・唐錦二端并食籠一・唐沈金遣之候、御重役可申候、恐々謹言、(天文十年)六月廿六日 修理大夫(大友)義隆 在判

源上 畠山修理大夫(義統)殿 (『大友家文書録』1025 『大分県史料』(32)第2部補遺(1) 大友家文書録二所収)

大友家が16世紀代に「唐沈金」をはじめとした唐物を多数所有しており、「唐沈金」等が室町幕府中層部の人物に対する贈答用品として使用されたことを示す史料であるという。

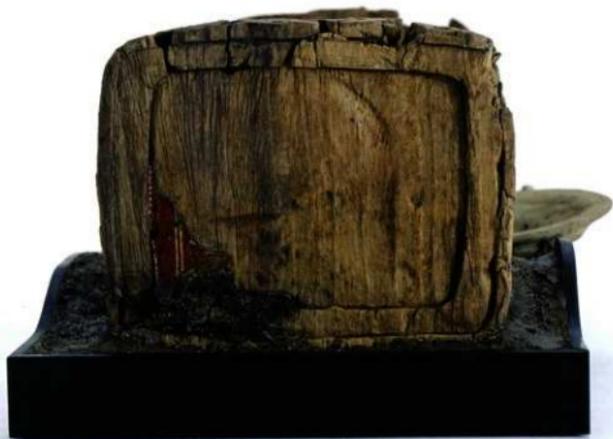
鹿毛敏夫『アジアン戦国大名大友氏の研究』(吉川弘文館 2011年) 225~226頁



「朱漆鍍金樓閣騎馬人物文唐枕」(上 全景 中 上面 下 側面 保存処理後)

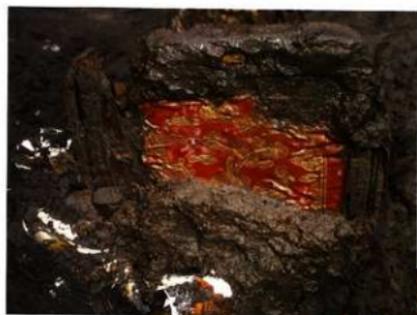
1644

第398図 SD101出土遺物⑤



鍍金唐杖の端面(保存処理後)

第399図 SD101出土遺物⑤



鍍金唐枕の出土状況



取り上げ直後の出土状況



鍍金唐枕の細部(編物と布目の状況)

第400図 SD101出土遺物⑤

(4) 土坑

第2南北街路SF094を掘下げていく過程で、各段階の街路面から掘り込まれた土坑を検出した。これらはすべてSF094の東端部付近に位置しており、堀SD101から切られているものも存在する。路面の比較的初期の改修時に掘られたものが多く、町屋段階（1587～1600年代）の第2南北街路SF006からは完全にバックされているものの、すべての土坑は街路SF094の構築後に掘られたものである。第2南北街路の通行量の少ない地点を利用して設けられた廃棄土坑（ゴミ捨て坑）と推定される。遺構の状況や出土遺物から、これらの土坑の構築年代は16世紀後葉から末葉に比定される。以下、検出された遺構と出土遺物を列挙する（第401図）。

通行量の
少ない地点
を利用して
設けられた
廃棄土坑
（ゴミ捨て
坑）

SK175

J8区に位置する土坑で、平面形態は略円形を呈する。規模は東西0.72m、南北0.65m、深さ25cmである。SK113に切られており、さらに東側は堀SD101によって削平されている。埋土上位から拳大の礫がひとつ出土したほかは出土遺物は僅少で、図化可能なものは認められない。

SK113

J8区に位置する土坑で、平面形態は略円形を呈する。規模は東西0.65m、南北0.68m、深さ25cmである。SK175を切っており、さらに東側は堀SD101によって削平される。底面付近から礫や土器類が出土したが、図化可能なものは認められなかった。

SK107

J8区に位置する土坑で、平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は東西0.35m、南北0.65m、深さ30cmである。埋土上位には炭化物の集中が認められる地点がある。底面は2段階りとなっていた。図化可能な遺物は認められない。

SK194

J8区に位置する土坑で、平面形態は略楕円形を呈する。規模は東西0.33m以上、南北1.00m、深さ10cmである。東側は堀SD101の構築によって完全に破壊されており、SD101に含まれる埋土や礫をすべて除去した後に検出された。埋土中より、景德鎮系のE群青花碗（1645）の破片が出土している。

SK108

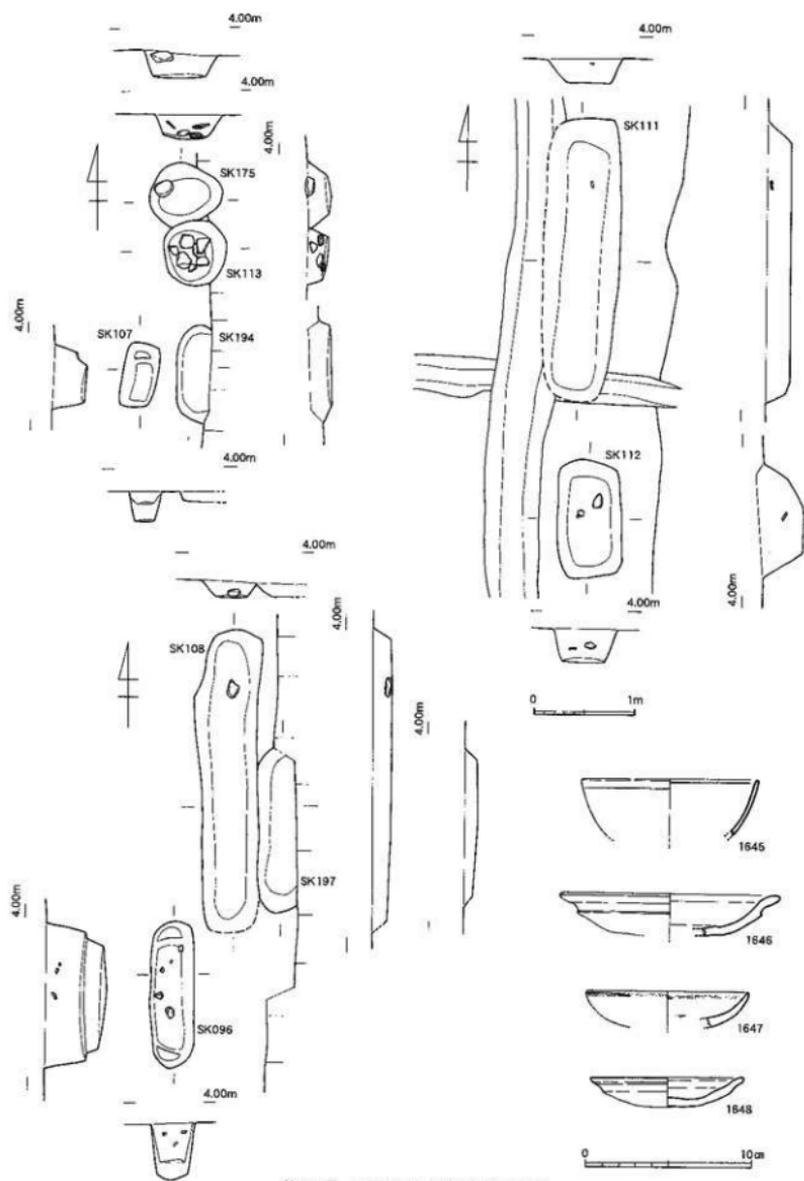
J8～J9区に位置する土坑で、平面形態は溝状の長楕円形を呈する。規模は東西0.56m、南北3.00m、深さ40～45cmである。東に隣接する土坑SK197を切っているほか、調査区に残した土層観察用ベルトの検討により、最下面の道路面を切って構築されていることを確認した。底面付近から拳大の礫がひとつ出土したが、出土遺物は僅少である。遺物の中に図示可能な京都系土師器皿（1646）が1点存在する。

SK197

J8～J9区に位置する土坑で、平面形態は長楕円形を呈する。規模は東西0.36m、南北1.48m、深さ15cmである。西に隣接する土坑SK197から切られており、さらに東側は堀SD101の構築によって完全に破壊されていた。出土遺物は僅少であるが、中国景德鎮系のE群青花皿（1647）の破片が存在したので、提示している。

SK096

J9区に位置する土坑で、平面形態は長楕円形を呈する。規模は東西0.44m、南北1.48m、深さ60cmである。底面は2段になっている。出土遺物は僅少であるが、埋土中よりE群青花皿や漳州窯系青花の小片が出土していることを確認した。16世紀末葉の島津侵攻直前頃に構築された土坑であろう。



第401図 土坑と出土遺物(1/3, 1/50)

SK111

J9区に位置する土坑で、平面形態は溝状の長楕円形を呈する。規模は東西0.75m、南北2.90m、深さ25cmである。街路側溝SD090および暗渠遺構SX089に切られている。埋土はキメの細かい砂質土の単一層で形成されていた。出土遺物は僅少で、図示可能なものは認められない。

SK112

J9区に位置する土坑で、平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は東西0.62m、南北1.22m、深さ35cmである。検出時には上面が陥んでおり、街路の形成層の一部が遺構内に陥没し、埋土の色調が縞状を呈していた。このことから、土坑上面は街路改修の直前まで開口していた可能性がある。また、上層観察用ベルトの検討により、最下面の街路面を切つて構築されていることも確認している。出土遺物は僅少であるが、埋土中より土器や小礫が出土しており、このうち京都系土師器Ⅲ(1648)が図化可能であったため提示している。

(5) 柱穴列・柱穴

柱穴列 (第402図)

礎盤（柱穴内礎石）をもつ柱穴で構成される柱穴列

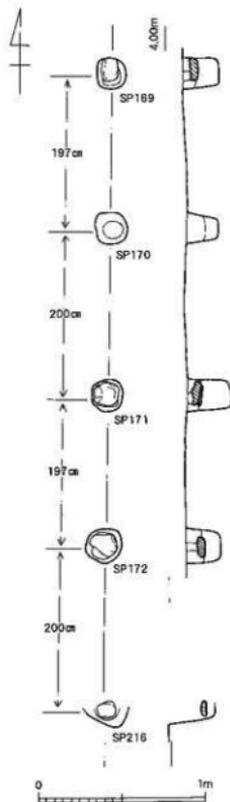
J9区とK9区の境界付近に位置する柱穴列で、SP169～SP172・SP216の5基の柱穴で構成される。柱穴列の方向はほぼ真南北である。個々の柱穴の規模は径17～25cm、深さ20～28cmである。柱穴にはすべてに径10cm弱の柱痕跡が検出された。また、柱穴内にはSP170を除いたすべてに礎盤（柱穴内礎石）が設置されていた。礎盤（柱穴内礎石）上面のレベルはすべて4.05m前後を測り、揃っている。礎盤（柱穴内礎石）に使用された礫は、柱穴の底面ではなく、すべてが柱穴の埋土中位付近に設置されている。従って、礎盤を使用した建造物は柱穴構築当初のものではなく、改修時のものであった可能性も考えられる。柱間は197cmまたは200cmを測り、京間の一間（約198cm）を基本の間尺として採用していることがわかる。また、SP171の礎盤（柱穴内礎石）は重量物を支えた重みで割れていた。柱穴列は堀SD101の東辺に接して構築されており、何らかの重要な建造物である可能性が考えられるが、その性格を解明することはできなかった。いずれの柱穴からも、図示可能な遺物は出土していない。

京間の一間

SP233 (第403図)

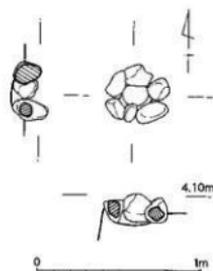
柱穴掘形周辺を線で囲む

K8区で検出された柱穴である。柱穴掘形周辺を6個の礫で囲んでいる。単体で構築されており、この柱穴と組み合うものは検出さ



第402図 柱穴列実測図(1/60)

れなかった。規模は径20～25cm、深さ20cmである。一般的な掘立柱建物を構成する柱穴とは異なる機能をもつ遺構と思われるが、その性格を明らかにすることはできなかった。出土遺物は認められない。当該遺構の床面は地山である明茶褐色粘質土に掘り込まれているので、ここでは「大規模遺跡段階」の遺構として報告しているが、さらに古い「寺院」段階に遡る遺構である可能性もある。類似した遺構が、第18次調査SX302^mでも検出されている。



第402図 柱穴列実測図(1/60)

注 ④ 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第9集 2006年）106頁

4 「寺院」段階（14世紀前葉～16世紀後葉）の遺構

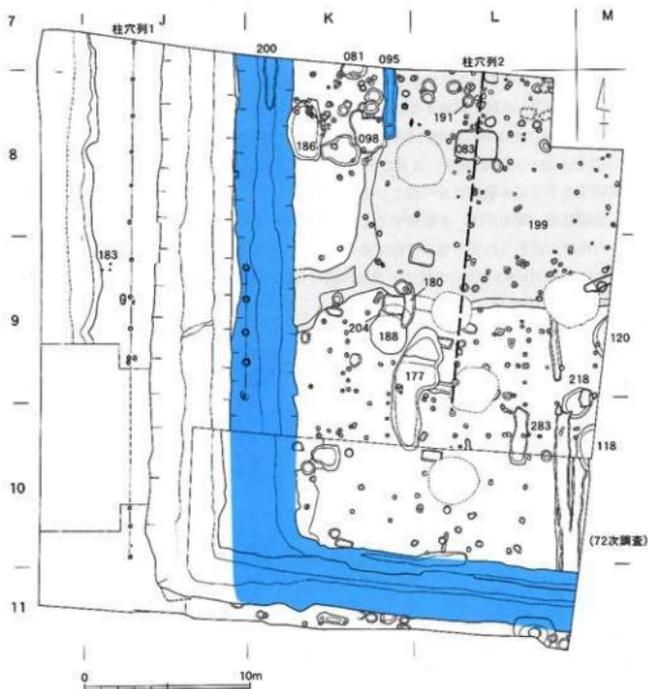
暦応4年
(1341)～
永祿年間
(1558～
1570)

本項目では、暦応4（1341）に称名寺が名ヶ小路町に創建されてから、永祿年間（1558～1570）に沖の浜に移転するまでの時期に相当する遺構を報告する。堂塔など寺院の中核をなす建物遺構は確認されていないが、寺域の西を画する堀・土坑・井戸・土取り遺構・柱穴列などが検出されている（第404図）。なお、記述の都合上、遺構の種類ごとに報告を行っていくため、寺域内と寺域外の遺構が項目ごとに区別されていないが、それについてはその都度、遺構の位置を確認していくこととした。

(1) 溝・堀

SD095（第405図）

I8～K8区（寺域内）で検出された溝である。第80次調査では、幅0.7～0.75m、深さ40cm、長さ4.2mを確認したのみであるが、第11次・第88次調査でも延長部が確認されており、3箇所調査区を縦断する形で南北方向に延びている。従って、第80次調査では当該溝の南端部を確認したこととなる。埋土中からは拳大の礫が多量に出土しており、礫に混じって陶磁器片・土器片・瓦片な



第404図 「寺院」段階の遺構(1/300)

どが認められた。出土遺物の中には器壁が薄い京都系土師器皿が一定量認められ、遺構の年代が16世紀前葉から中葉に比定できることを示している。当該時期における称名寺の区画遺構と推定されるが、寺域そのものを区画するほどの規模ではないことから、寺域内を区画する溝であったと考えられている。

第406図はSD095からの出土遺物である。

1649は景德鎮系青花で、小野分類B1群青花皿である。1650は瀬戸美濃系の天目碗の底部で、高台部周辺が露胎となる。1651は青磁碗の底部である。1652～1657は京都系土師器の皿である。器壁が薄いものが大半を占めており、おおむね16世紀前葉から中葉に比定されるものである。1658は称名寺創建時と推定される変形唐草文軒平瓦の破片である。

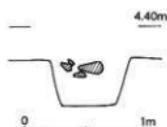
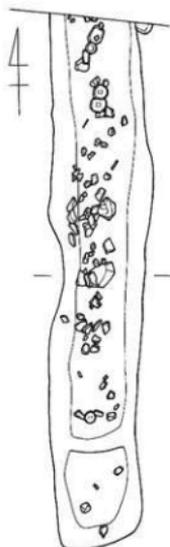
SD200

J・K8～J・K10区（寺域内）に位置する堀である。堀の規模は幅約4m、深さ約1.4mで、第80次調査では長さ約23mが検出された。当該堀は北側では第11次調査SD44と同一遺構であり、南側では第72次調査SD025Bと同一遺構で、第72次調査区では東側に向けてL字形に屈曲することが確認されている。16世紀後葉の堀SD101やSD101の東側に展開する柱穴列（SP169～SP172）、15世紀末から16世紀初頭に比定される土坑SK186など、周辺に展開するすべての遺構に切られている。

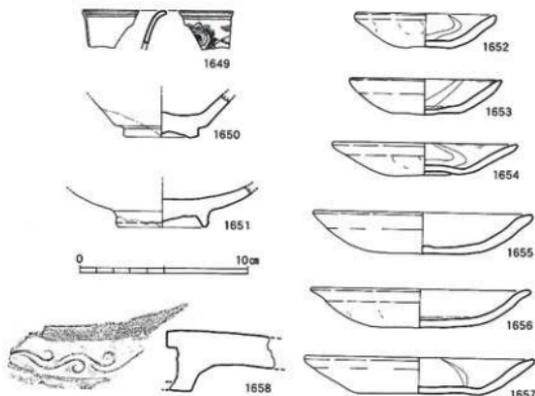
空堀

土層断面（第407図）を観察すると、水が溜まったり、流れていた痕跡は認められず、堀は空堀であったことが断定できる。堀底から20～30cmほど上に砂質土の流入が認められる部分があり、

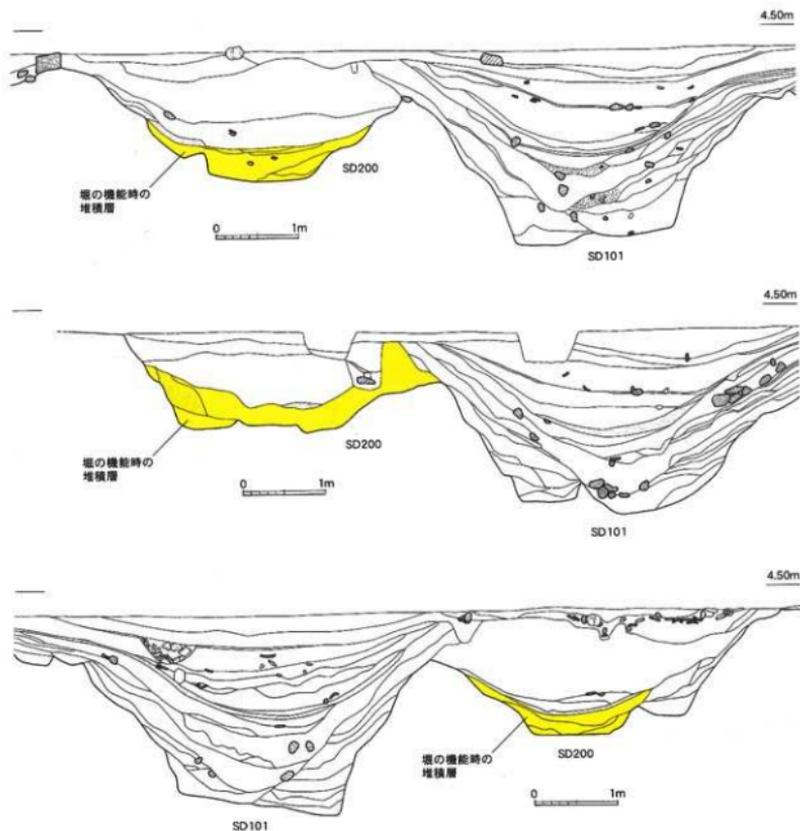
これより上位の埋土は堀が人為的に埋め立てられた状況を示していた。従って、砂質土より下が堀の機能時、砂質土より上が堀の埋め立て時の土層となり、出土遺物については前者を下層、後者を上層として取り上げを行った。しかしながら、上層・下層の出土遺物は基本的に大きな様相の違いは認められなかった。また、堀底の形態や土層の



第405図 SD095実測図(1/40)



第406図 SD095実測図(1/3)



第407図 SD200土層断面図(1/60)

状況から、少なくとも1回の掘り直しが行われていたことも確認できる。

遺構の時期であるが、その決め手となるものが大内Ⅲ式Bの土師質土器皿と中世4期bに分類される備前焼摺鉢である。このほか、在地系の土師質土器小皿や坏・燗台などが出土しており、以上の遺物の年代観から、溝の構築時期は15世紀中葉から後葉に比定できると考える。堀が埋められた時期は資料不足のため、明らかでないが、埋土の上層と下層で遺物の大きな様相の変化が認められないことから、堀が機能していた時期はそれほど長くなかったと推定される。

SD200は堀の規模としては大型のものであるため、15世紀中葉から後葉における称名寺の寺域を画する堀であると考えられる。

15世紀中葉
～後葉

称名寺の
寺域を区画
する堀

第408～410図はSD200からの出土遺物である。

1659～1664は青磁碗で、いずれも15世紀代に比定される龍泉窯系の製品である。1659・1661は口縁端部が外反する。1660は外面に蓮弁文、内面に印花による文様をもつ。1662・1663は底部の破片で、いずれも見込みみに刻印による文字または文様が認められる。1664は文様がなない青磁碗の底部である。1665も中国陶磁の青磁と思われ、蓋状の器形を呈し、外面には口クロ目による条線が施されている。焼成良好な製品であるが、小破片であるため、器形や年代は不明である。1666は青白磁で、胴部の小片であるが、外面に把手が付いていた痕跡が認められることから、水注などの肩部であった可能性がある。1668は景德鎮系の青白磁梅瓶の胴部で、外面には櫛状工具で描かれた渦巻文が認められ、内面は露胎となる。13～14世紀代の製品である。

1669～1674は瓦質土器。1669・1670は碗である。内外面にミガキまたは削り調整が行われている。口縁端部がやや屈曲しながら立ち上がるなど、その器形から一見して、天目碗の模倣品であることがわかる。16世紀代になるとこの種の瓦質土器が数多く生産され、豊後府内でも一定量の出土が認められる⁹⁴が、16世紀代のもものと比較すると、口縁端部の屈曲が強いなど、天目碗の形態により近い古相を呈する資料であると思われる。1671は黒風の口縁部で、円形の透かし孔が設けられている。1672は火鉢の脚部である。脚部外面にハート形の押圧文を有するのが、特徴的である。1673は播鉢で口縁部内外面にナデを施し、外面には刷毛目調整、内面には4条を一単位とする播目が施されている。1674は羽釜で、口縁部から胴部中段までが残存するが、胴部下位から底部は欠損している。口縁部が上方に伸びている。

1675は管状土罐で、上端部を欠損する。

1676～1678は瓦で、1676・1677は巴文軒平瓦、1678は菱形唐草文軒平瓦である。

1679～1692は胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器小皿または坏である。このうち、1679～1690・1692は15世紀代の所産と思われ、遺構の年代を反映する遺物であるが、1691は14世紀代の資料と思われ、混入品の可能性が高い。1693～1695は胎土が白色を呈し、器壁が極めて薄手となる土師質土器皿で、周防地域からの搬入品である可能性が高いものである。北島大輔氏の編年⁹⁵を参照すると、大内ⅢB式に比定される資料で、15世紀中葉から後葉の所産となる。1696～1698は胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器燗台で、底部に糸切り痕が残し、脚部の高さが低い形態を呈するものである。

1699～1701は備前焼。このうち、1699・1700は大甕の口縁部、1701は播鉢である。播鉢は口縁部の形態などから、中世4期bに分類されるもので、15世紀中葉頃の所産と思われる。当該遺構の年代の決め手となる遺物のひとつである。1702は古瀬戸の底部と思われる破片である。

1703～1705は石製品。1703は粘板岩系の石材を素材とした砥石である。1704は凝灰岩製の五輪塔空風輪で、外面に墨書の痕跡が認められる。1705は方形に加工された凝灰岩の大型石材の破片で、側縁に平行して、断続的な沈線が施されている。用途は不明であるが、建築材として使用されたものであろうか。

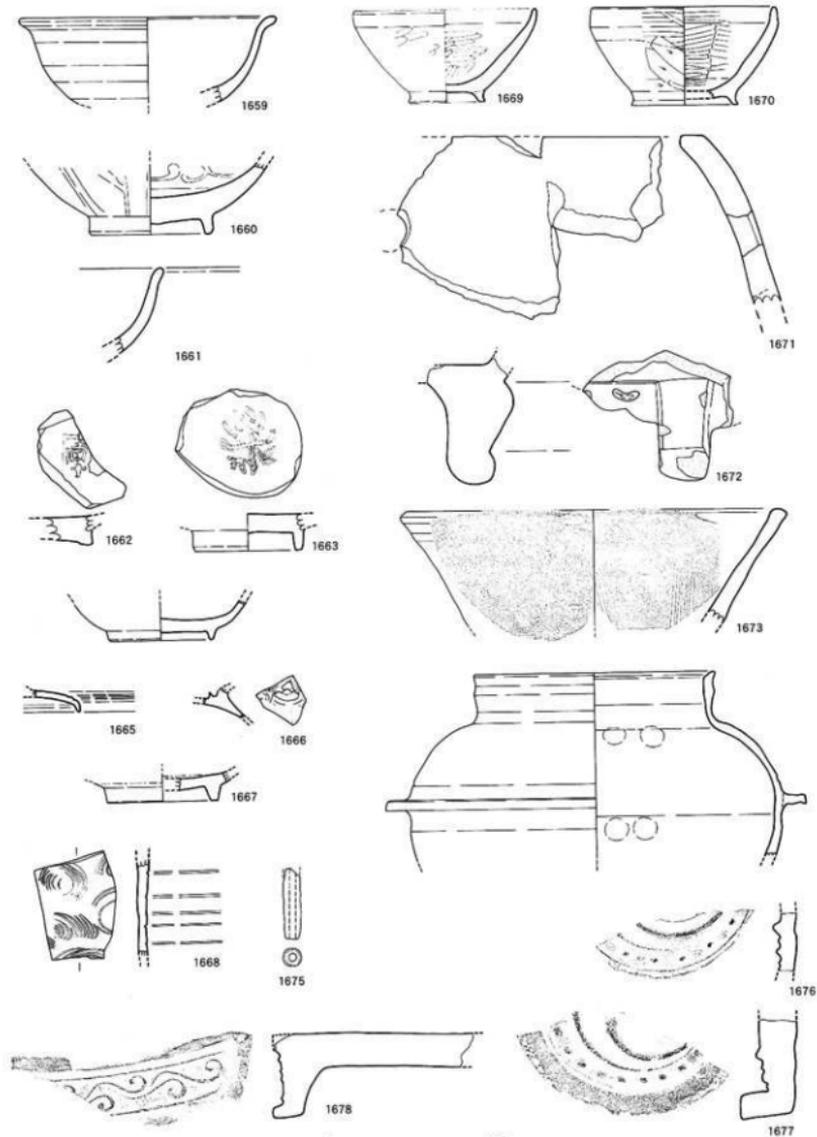
1706・1707は青銅製品であるが、ともに用途不明。1708は初鑄造年が1039年の北宋銭「皇宋通寶」である。銅銭の方孔は中央が僅かに凹んでおり、「星形孔」と呼ばれる形態を呈している。

天目碗模倣
の瓦質土器
碗

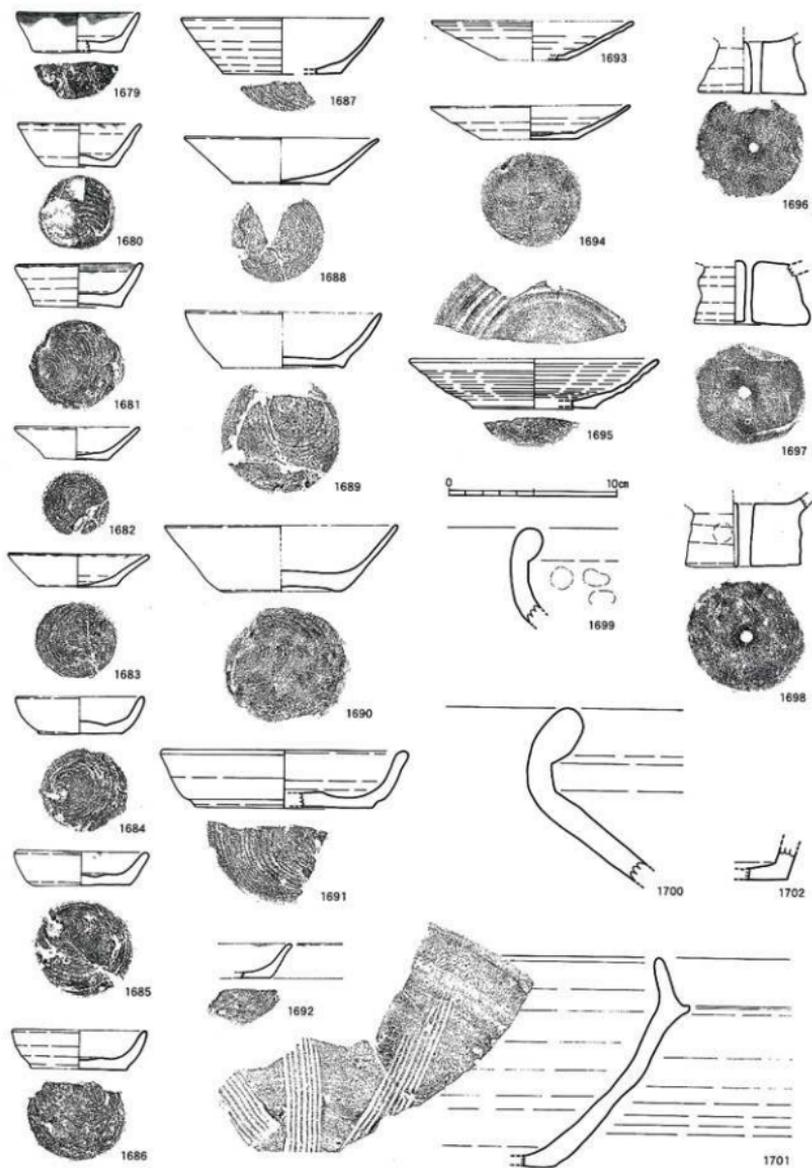
大内ⅢB式
の土師質
土器皿

注 94 塩田潤一「戦国時代土師器論についての一考察」（『大分・大友土器研究』第16号 1997年）

95 北島大輔「大内式の設定」（『大内氏館跡X』山口市埋蔵文化財調査報告第101集 2010年）



第408図 SD200出土遺物①(1/3)



第409図 SD200出土遺物②(1/3)

(2) 土坑

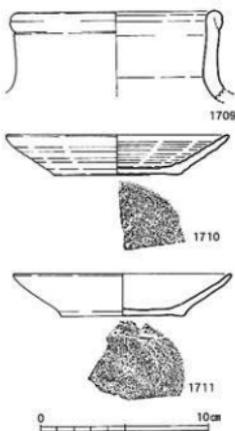
SK186 (第411図)

K8区(寺域内)に位置する土坑である。平面形態は不整形を呈し、その規模は長軸1.65m、短軸2.4m、深さ約15cmである。堀SD200を切って構築され、出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。

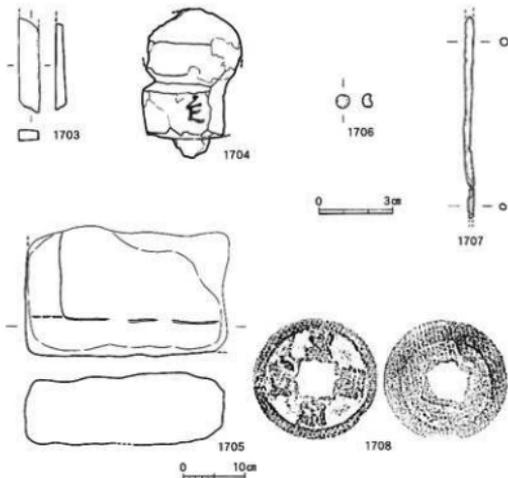
出土遺物は第412図に示した。

1709は備前焼で、壺の口縁部である。

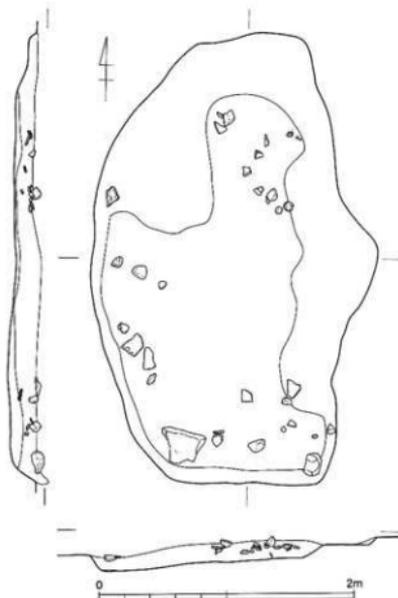
1710・1711は在地系のロクロ目土師質土器皿で、1710は内面にはロクロ目が顕著に認められるが、1711にはそれが認められない。



第412図 SK186出土遺物(1/3)



第410図 SD200出土遺物(1/3, 1/8, 1/2, 1/1)



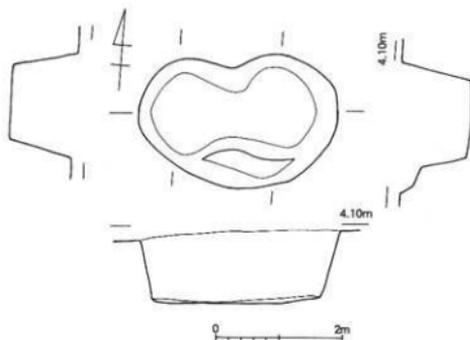
第411図 SK186実測図(1/40)

SK081 (第413図)

K7・K8区 (寺城内)

に位置する土坑である。検出時には1基の土坑と認識していたが、完掘状態をみると切り合い関係にある円形の土坑2基が重複した形態を呈していた。埋土を一気に底面まで掘り下げてしまったため、遺構の構築順序は把握できなかった。遺構の規模は長軸1.6m、短軸1.0m、深さ約60cmである。東側は径0.8m、西

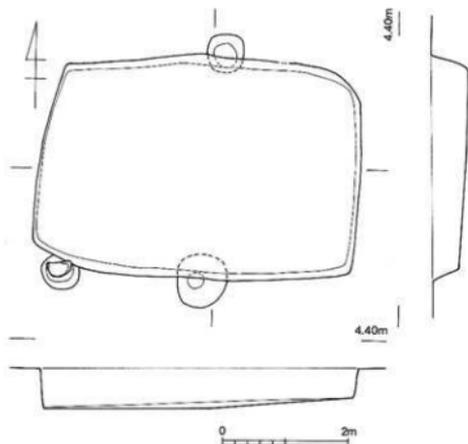
2基の土坑



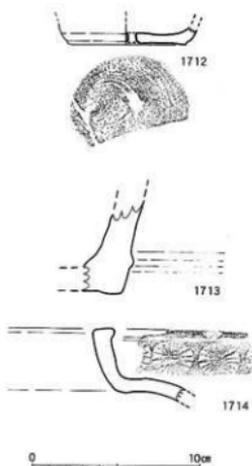
第413図 SK081実測図(1/40)

側は径0.9mの土坑が位置を違えて構築された遺構である。その形状から、内部に甕や桶などが埋置されていた可能性も考えられるが、断定には至っていない。

出土遺物には図示できるものはないが、胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器皿と白色を呈する罔防系(大内系)の土師器皿の小片が出土している。出土遺物の様相から、遺構の構築年代は15世紀後葉に比定できる可能性が高い。



第414図 SK083実測図(1/40)



第415図 SK083出土遺物(1/3)

SK083 (第414図)

L8区(寺城内)に位置する土坑である。遺構の平面形態は隅丸方形で、その規模は長軸2.55m、短軸1.8m、深さ約25cmである。後述する柱穴列を形成する柱穴SP179・SP183を切って構築されている。方形竪穴遺構や半地下式の倉庫のような形態を呈しているが、床面には柱穴や溝などの施設はなく、遺構の性格は不明である。出土遺物には瓦質土器や土師質土器の破片が認められ、遺構の構築年代は15世紀代と思われる。

性格不明

出土遺物は第415図に示した。

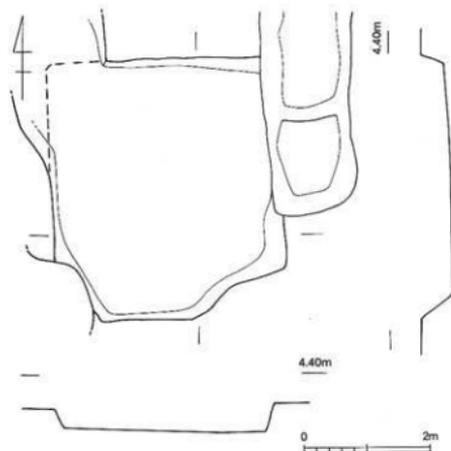
1712は胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器の底部である。底部外面には糸切り痕が認められ、貫通孔を設けている。口縁部と胴部を欠損しているため、詳細な年代が不明であるが、15世紀代のものか。1713・1714は瓦質土器で、これらも15世紀代の製品であろう。1713は火鉢の底部で、外面に一条の突帯をもつ。1714は風炉の口縁部と推定されるもので、口縁外面にはスタンプ文(退化した菊花文か)を押捺する。

SK098 (第416図)

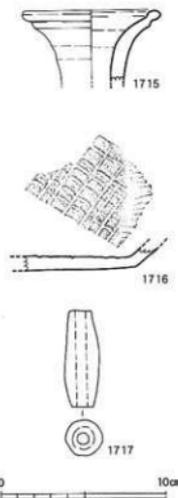
K8区(寺城内)に位置する土坑である。遺構の平面形態は不整形で、その規模は長軸2.15m、短軸1.85m、深さ20cmである。16世紀前葉から中葉に比定される溝SD095をはじめ、周辺の遺構すべてに切られている。貯蔵穴または廃棄土坑(ゴミ捨て穴)と推定されるが、遺構の性格を明確にすることはできなかった。出土遺物は僅少であるが、瀬戸美濃系陶器御皿の破片が含まれているため、15世紀代の遺構であろう。

性格不明

出土遺物は第417図に示した。1715は龍泉窯系青磁の瓶で、口縁部の破片である。1716は瀬戸美濃系陶器御皿の底部で、底部内面に格子状の御目、僅かに残存する胴部の内面に放射状の御目が施されている。1717は管状土錘である。



第416図 SK098実測図(1/40)



第417図 SK098出土遺物(1/3)

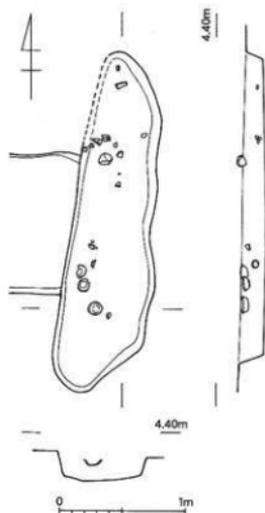
SK180 (第418図)

K9~L9区(寺城内)に位置する土坑である。遺構の平面形態は不整形形で、その規模は長軸2.8m、短軸0.6m、深さ約20cmである。町屋段階の廃棄土坑SK017に切られており、さらに西側に位置している土取り遺構SX204を切って構築されているようだ。土坑の南側より、ほぼ完形の状態である土師質土器杯がまともに出てきたほか、埋土中から小型の礫や土器片が少量出土している。遺物の出土状況から、単なる廃棄土坑とは考えられないと思うが、遺構の性格は明らかにすることはできなかった。

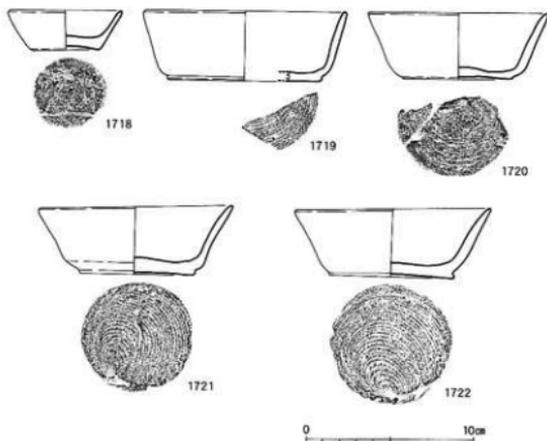
性格不明

出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は14~15世紀代と推定される。出土遺物は第419図に示した。

1718は土師質土器の小皿、1719~1722は杯である。いずれも胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器である。杯の形態は器高がやや高く、口縁部が外反する。このうち、1720~1722はほぼ完形の状態で、土坑の南側からまともに出てきている。土器の形態は互いに類似しているが、型式学的な位置や詳細な年代は未だ明らかではない。14~15世紀代の製品と思われる。



第418図 SK180実測図(1/40)



第419図 SK180出土遺物(1/3)

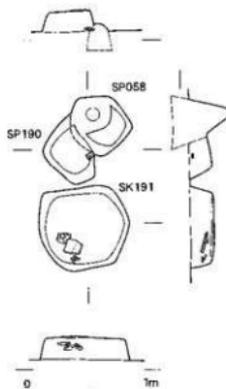
SK191 (第421図)

L8区(寺城内)に位置する土坑である。遺構の平面形態は不整形で、その規模は東西0.7m、南北0.65m、深さ約15cmである。土坑の底面近くから白磁皿と瓦質土器火鉢が出土している。廃棄土坑(ゴミ捨て穴)である可能性が高い。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は15世紀代と推定される。

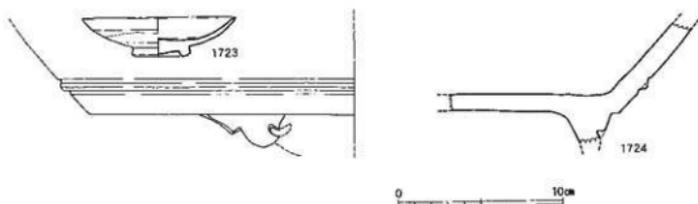
出土遺物は第421図に示した。

1723は中国陶磁の白磁皿である。内面と口縁部外面から胴部上半の外面に白磁釉を施軸し、高台付近は露胎となる。森田分類D群の白磁製品で、近年これらの製品が福建省邵武窯の製品であることが確認されている。1724は瓦質土器火鉢の底部付近の破片で、ハート形の押印文をもつ脚部が僅かに残存している。1723・1724はいずれも15世紀代の所産である。

廃棄土坑

福建省
邵武窯

第420図 SK191実測図(1/40)



第421図 SK191出土遺物(1/3)

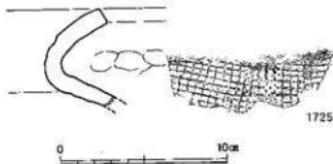
(3) 井戸

SE120

M9区(寺城内)で検出された井戸と思われる遺構である。平面プランは円形で、規模は径1.6m以上となる。調査区の東壁に接して検出され、そのまま深く掘り下げると危険が生じるため、検出面から約40cm掘り下げたところで調査を断念した。そのため、井戸の構造等は不明である。構築時期についても確定できていないが、埋土中より亀山・勝間田系の須恵質土器甕が出土していることから、14世紀代に遡るものであろう。

出土遺物は第422図に示した。

図示した遺物は、亀山・勝間田系の須恵質土器甕である。胴部外面に格子状の叩きが認められ、内面はナデ調整が行われている。頸部外面には指頭痕が顕著に認められる。14世紀代の所産であろう。

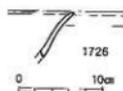


第422図 SE120出土遺物(1/3)

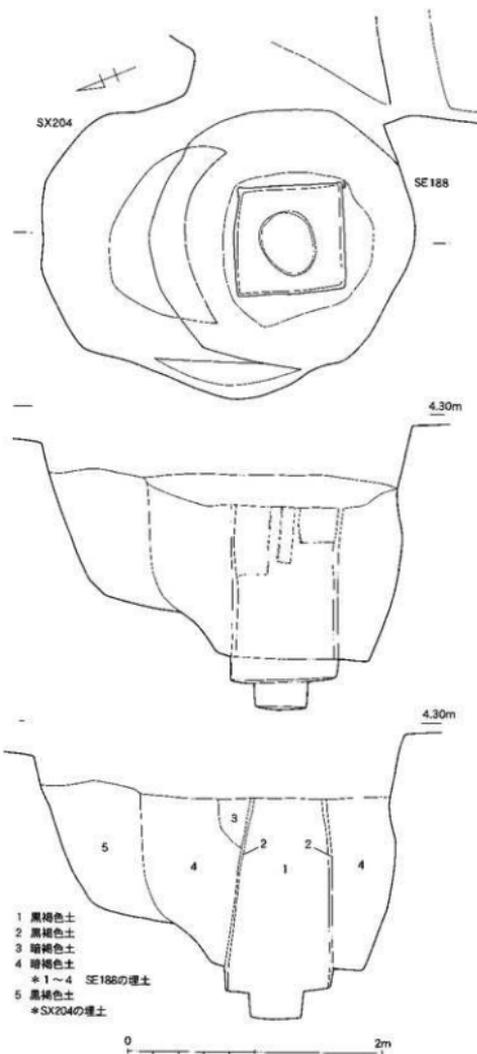
SE188 (第423図)

K9区(寺域内)で検出された井戸である。井戸の掘形は径2.15mの不整形円形を呈し、深さは約2mを測る。検出面から約50cm掘り下げた段階で、埋土上に、辺85~90cmの方形プランを呈する井側の痕跡を確認した。そこで、井戸埋土を半載する形で掘り下げたところ、使用された木材は残っていなかったが、土色の違いや埋土中に残された圧痕より、井側の形態が明瞭に観察できることがわかった。井側はいわゆる「方形縦板組隅柱横棧型」^註であり、縦板や添板および四隅の支柱の痕跡が確認できる部位がある。井筒には径50cm程度の曲物が使用されていたと思われるが、これについても曲物自体は残存していなかった。出土遺物は僅少で、図化可能な遺物は少ないが、埋土中から口縁部内面が口剥げとなる中国陶磁の白磁碗が出土している。井戸の形態や出土遺物より、遺構の構築年代は14世紀代に比定される。

出土遺物は第424図に示した。図示した遺物は、中国陶磁の白磁碗の口縁部である。14世紀代の所産であろう。



第424図 SE188出土遺物(1/3)



第423図 SE188実測図(1/40)

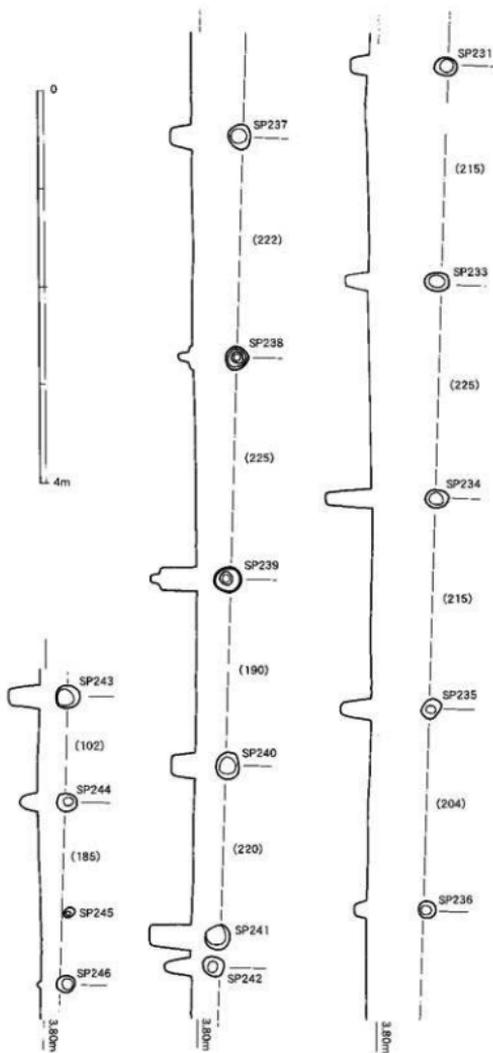
註 04 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V—中世大友府内の集落遺跡—』(1996年)の分類名による。

(4) 柱穴列・柱穴

柱穴列1 (第425図)

J7~J10区 (寺域外)

で検出した柱穴列である。第2南北街路を形成する整地層を完全に除去した後で検出された。柱穴の埋土は暗茶褐色、地山は明茶褐色であるため、街路撤去後に遺構プランが明瞭に確認できた。柱穴列は北から、SP231・SP233~SP246の15個の柱穴で構成される。SP242とSP243の間は木戸遺構を現状保存するため、掘り下げを実施していない。さらに北に延びる可能性が考えられ、第11次調査でもこの柱穴列に含まれる可能性がある柱穴数基が存在する。第80次調査で検出された柱穴列の長さ (SP231—SP246間) は30.7mを測る。柱穴列の方向は真南北に対して強かに東に振れており、第2南北街路の方向とほぼ同じである。柱穴間の距離は1.02~2.25mと幅があるが、2.00~2.25m前後を測るものが多い。個々の柱穴の規模は径15~20cm、深さ45~20cm程度である。柱穴内からの出土遺物で、図示可能な遺物はものはなく、第2南北街路以前の遺構である



第2南北街路以前の遺構

第425図 柱穴列1 実測図(1/50)

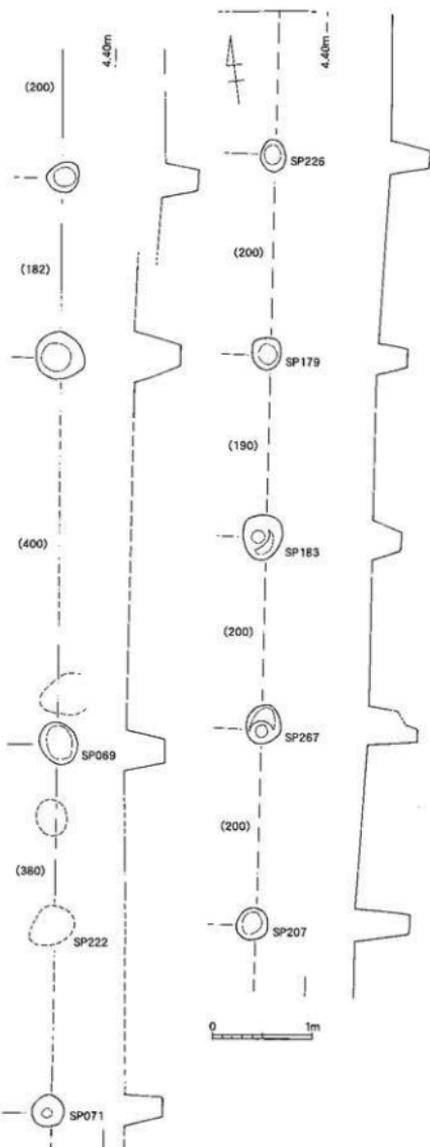
性格不明

ことは間違いないが、遺構の詳細な年代は不明である。遺構との関係も不明で、現状ではこの柱六列の性格についても不明である。

柱六列 2 (第426図)

K9区(寺城内)で検出された柱六列である。柱六列は北から、SP226・SP179・SP183・SP267・SP207・未設定・未設定・SP069・SP221・SP071の10個の柱穴で構成され、さらに北側の第11次調査でも延長部が検出されている。南側については、延長部に相当する地点に井戸が存在しており、第72次調査区まで柱六列が延長するかどうかは不明である。第80次調査区で検出された柱六列の長さ(SP226—SP071間)は19.7mとなる。柱六列の方向は東に振れており、柱穴間の距離は185~200cm。個々の柱穴の規模は径25~40cm、深さ約20cm程度である。切り合い関係については、15世紀後葉の土坑SK083や16世紀末葉から17世紀初頭の土坑SK174に切られていることを確認している。また、後述する整地層SX199との関係については、整地層をすべて除去した後に柱六列を検出したので、SX199よりも古い可能性がある。しかしながら、個々の柱穴は小型であるため、SX199の上面で検出できなかった(見逃した)可能性もある。従って、整地層SX199と柱六列との前後関係については、保留しておきたい。柱穴内から図示可能な遺物はなく、遺構の詳細な年代は確定できない。柱六列の方向は第95次調査で検出された礎盤(柱穴内礎石)を有する厩立柱建物群(本書第2分冊第7章参照)の主軸と同一である。称名寺の初期の遺構である可能性が考えられるが、現状では不明である。

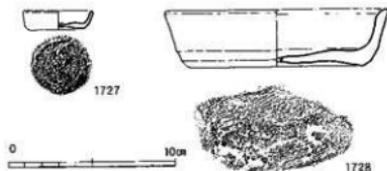
第95次調査の建物群と同方向



第426図 柱六列 2 実測図(1/50)

柱穴出土遺物 (第427図)

出土遺物の年代観より、確実に寺院段階に位置づけられる柱穴から出土した遺物を報告する。該当する柱穴はいづれも寺域内に位置する遺構である。1727はSP057、1728はSP060の出土遺物で、前者は土師質土器小皿、後者は坏である。両者とも底部に糸切り痕が認められる。



第427図 柱穴出土遺物(1/3)

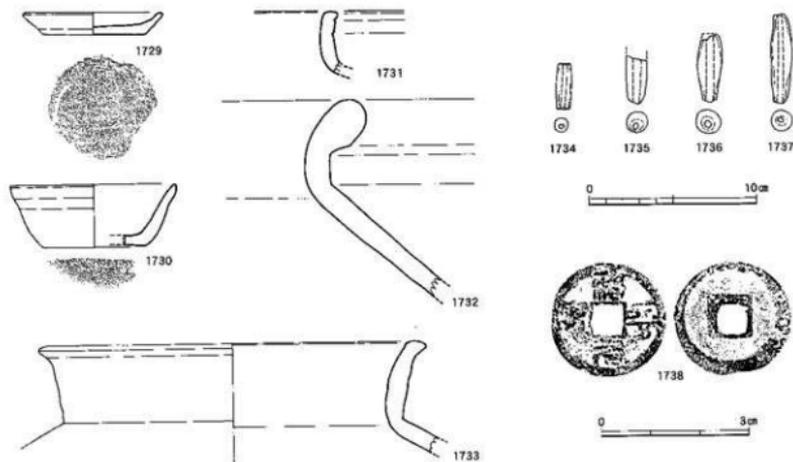
(5) その他の遺構

SX202

I・J7～I・J9区(寺域外)で検出された不整形の掘り込み遺構である。遺構の規模は、東西0.9～2.0m、南北18.8m、深さ約40cmである。断面形態は匙面状を呈し、埋土は暗茶褐色粘質土の単一層となる。西側は道路側溝SD201の構築によって破壊されている。第2南北街路を形成する整地層から完全にバックされており、街路が形成される以前の遺構であることがわかる。SX202と南北街路や側溝SD201との関係は、第326図で提示した土層図を参照願いたい。遺構の性格は不明である。埋土中から土師質土器や備前焼、土鏝、銅銭などが出土している。出土遺物の年代観から、15世紀代の遺構と推定されるが、これ以上の詳しい年代を確定できない。

性格不明

第428図はSX202からの出土遺物である。1729は土師質土器小皿で、器高が低く、口縁が関く形態を呈する。1730は土師質土器坏で、器高が深く、口縁径が小型のものとなる。1731・1732は備前焼で、1731は壺、1732は大甕の口縁部である。1732は乗阿彌年3期に比定され、14世紀後半から15世紀前半の所産である。1733は須恵器の甕の口縁部で、混入品であろう。1734～1737は管状土鏝である。1738は銅銭で、初铸造年1064年の「治平元寶」である。



第428図 SX202出土遺物(1/3、1/1)

SX118 (第429図)

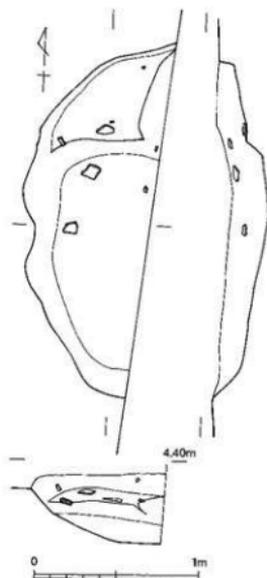
土取り遺構

L10～M10区(寺域内)で検出した平面形態が不整形を呈する遺構である。遺構の南側は第72次調査SK003に連続するようである。その規模は東西1.05m以上、南北2.8m、深さ35cmを測る。遺構の性格は不明であるが、遺構底面が平坦でないことや平面形態が不整形であることから、土取り遺構の可能性が考えられるかもしれない。埋土から白色系の土師質土器皿が出土しており、遺構の年代は15世紀後葉に比定される。

白色系の土師質土器皿

出土遺物は第430図に示した。

1739は白色系の土師質土器皿である。その形態から大内Ⅲ式に比定され、15世紀後葉の製品と推定される。豊後地域以外からの搬入品と思われるが、周防(大内氏館跡など)の出土品と比較して、胎土に白色粒子の混入が目立つことから、周防地域のものでもない可能性も高い。詳細な産地は現状では不明としておきたい。



第429図 SK118実測図(1/40)

土取り遺構

SX177 (第431図)

K・L9～K・L10区(寺域内)で検出した不整形を呈する遺構である。その規模は東西2.8m、南北7.55m、深さ58cmを測る。遺構の形態が不整形であることから、土取り遺構の可能性が高い。北西で井戸SE188と僅かに重複するが、切り合い関係を明らかにすることはできなかった。出土遺物には中国産の茶入や土師質土器杯や小皿、白色系の土師質土器皿などがある。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は15世紀後葉であろう。

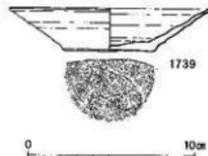
出土遺物は第432図に示した。

茶入

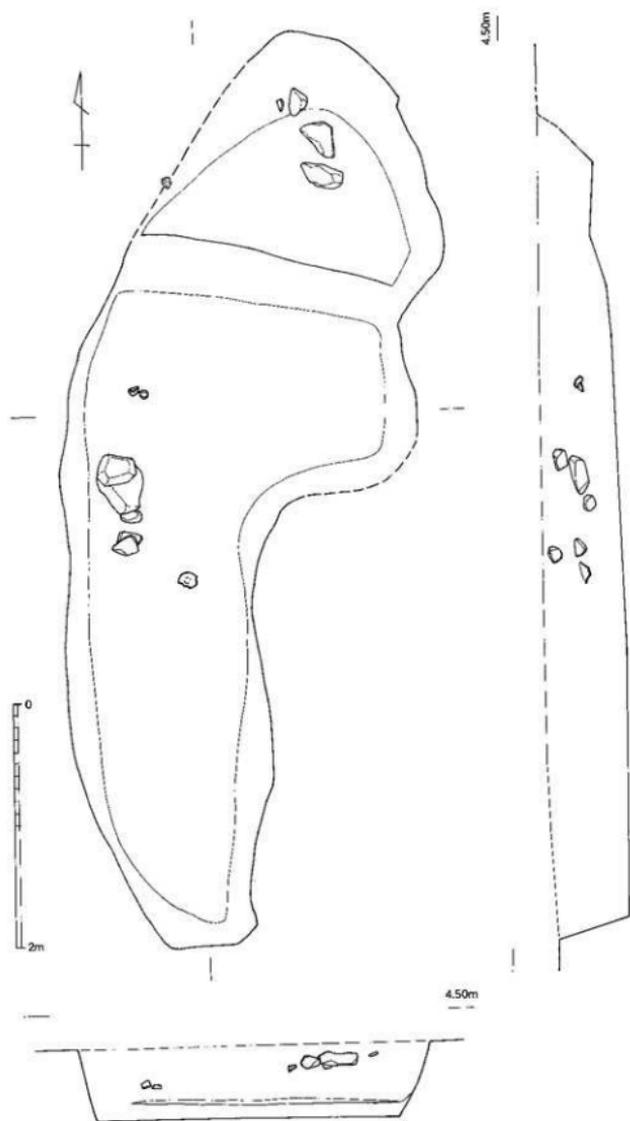
1740は中国陶磁の茶入と推定される陶器小片で、層部付近の小片である。外面に茶褐色の鉄釉を施し、内面は露胎となる。1741は中国陶磁の白磁碗で、口縁内面端部が露胎となる口割げの製品である。13世紀後半から14世紀代の所産である。

白色系の土師質土器皿

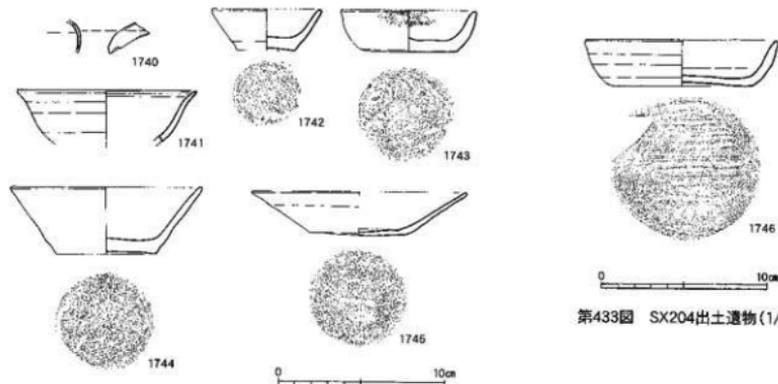
1742・1743は胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器小皿、1744は同じく坏である。いずれも外底部に糸切り痕が認められる。1745は器壁が薄く、胎土が白色を呈する土師質土器皿で、周防地域からの搬入品であろう。大内Ⅲ式に比定され、15世紀後葉の所産である。



第430図 SK118出土遺物(1/3)



第431図 SK177実測図(1/40)



第433図 SX204出土遺物(1/3)

第432図 SK177出土遺物(1/3)

SX204

土取り遺構

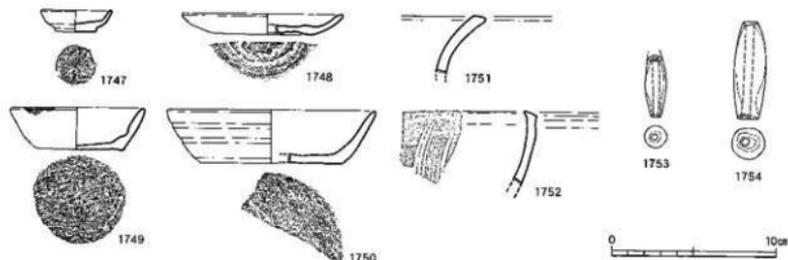
K9～L9区(寺城内)に位置する不整形な掘り込み遺構である。遺構の平面形態は略楕円形を呈し、その規模は東西2.1m、南北0.6m以上、深さ1.25mを測る。遺構の平面図は第423図を参照されたい。遺構の底面が平坦でないことや深さが深いこと、周辺に土取り遺構と推定される掘り込みが集中している傾向がうかがえることから、当該遺構も土取り遺構である可能性が高いと考える。井戸SE188や土坑SK180に切られている。埋土中から在地系の土師質土器環が出土しており、当該遺物の年代観から、遺構の構築年代は14世紀代と思われる。

出土遺物は第433図に示した。1746は土師質土器環である。胎土は赤褐色を呈し、底部には糸切痕とともに板状圧痕が認められる。その形態から、14世紀代の製品であろう。

SX199

広範囲に
広がる
整地層

K7～M9区(寺城内)の広範囲に広がる整地層と思われる堆積層である。調査の終盤段階で、地山である茶褐色粘質土と僅かに異なる土壌の広がり認め、精査したところ、整地層の範囲の南端のラインがK9～M9区で検出され、それより以北がすべて地山と同質の粘質土に僅かに砂質土を含む人為的な土壌(整地層)であることが判明した。整地層の範囲は東西約14m、南北約15m深さ約20cmである。当該土壌の中には土器の小片や炭化物なども含まれており、中世の遺構のほとんどは



第434図 SX199出土遺物(1/3)

その上面から掘り込まれていることを確認した。遺構の掘り下げをすべて終了した後、当該整地層を除去するために遺構面からの掘り下げを行った。人為的な堆積層は10～20cm前後であったが、図示が可能な大きさの遺物が数点出土した。また、前述した柱穴列2はSX199の除去が終了した後に検出した遺構であるが、SX199の上面から掘り込まれているのか、それにバックされていたのかという最終的な判断は難しい状況であった。

整地層から出土した遺物には14～15世紀代のものが混在しており、整地が行われた時期を確定するほどの量は認められなかった。

出土遺物は第434図に示した。

1747・1748は土師質土器の小皿で、1747は15世紀末から16世紀初頭、1748は14～15世紀代に比定される。1749・1750は土師質土器の坏で、1749は15世紀代、1750は14～15世紀代に比定される。1751は須恵器の甕の口縁部で、混入品であろう。1752は瓦質土器の播鉢で、口縁端部に面を作出している。内面に播目が認められる。1753・1754は管状土甕である。

SX187

J9区（寺域外）に位置する遺構である。第2南北街路をすべて撤去した後、地山である明茶褐色粘質土の直上で検出された。土師質土器坏を3個体を細かく破砕し、それぞれを1個体ごとに近接した地点に埋めたものである。本来、土器を埋置するための掘り込みが存在したと推定されるが、第2南北街路構築の際に削平されたと推定される。遺構の性格は地鎮などの祭祀的なものである可能性が高いと考えるが、その詳細を明らかにすることはできなかった（写真図版187）。出土した土器片の一部は接合したが、図示するまでの大きさには至っていない。土師質土器坏は胎土が赤褐色を呈する在地系のものである。遺構の年代は14～15世紀代であるが、これ以上の詳しい年代を確定することはできない。

地鎮などの
祭祀？

5 古代(奈良・平安時代)の遺構

古代(奈良・平安時代)の遺構として明確なものは、土坑SK218の1基のみである。中世以前に遡る遺構は、本調査区では当該土坑以外に検出されていなかった。

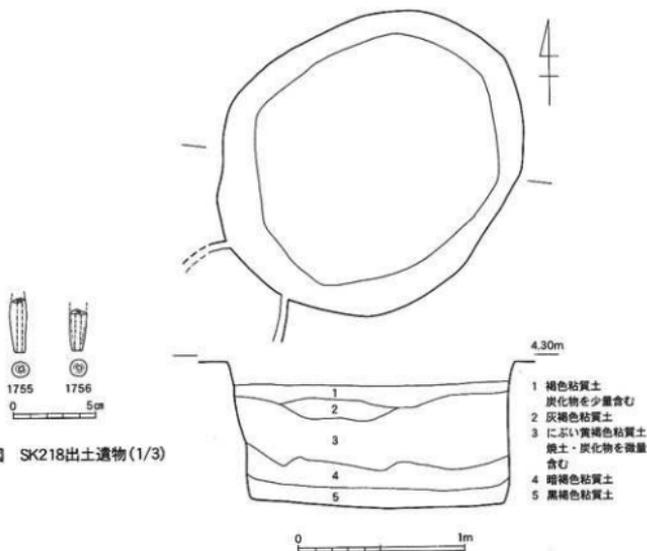
発掘調査も終盤になり、中世以前の遺構・遺物の確認のため、調査区の東壁に沿って幅2mのトレンチを設定し、最終確認の掘り下げを行った。その結果、L10区にて8～9世紀代と思われる土器片のまとまりを検出し、この遺物の集中部をSX274とした。さらに、SX274を基点に周辺の掘り下げをおこなったところ、明確な遺構は検出されなかったが、若干の土器片の出土や柱穴状の凹みを検出した。柱穴状の凹みから出土した遺物はSX283、周辺から出土した土器片はSX300として、位置とレベルを押さえて取り上げを行った。

L・M9区～
L・M10区に
集中

古代(奈良・平安時代)の遺構・遺物は調査区の南東側であるL・M9区～L・M10区に集中する傾向があるものの、まとまった状況は確認できなかった。



第435図 古代(奈良・平安時代)の遺構



第437図 SK218出土遺物(1/3)

第436図 SK218実測図(1/30)

SK218 (第437図)

土坑

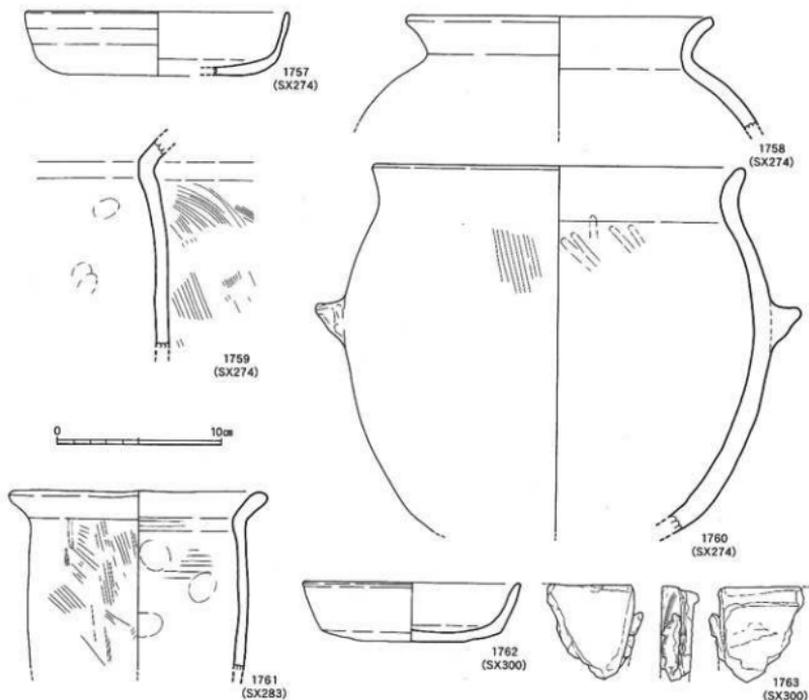
L9～M10区で検出された土坑である。平面形態は略円形を呈し、その規模は東西1.8m、南北1.9m、深さ83cmである。埋土は少量の炭や焼土粒を含む複数の層で構成されており、古代(奈良・平安時代)を主体とする土器小片が一定量出土した。土器の中には図化可能な資料は認められなかったが、土器片とともに管状土鍾2点が出土している。廃棄土坑と推定されるもので、本調査区における奈良・平安時代の唯一の明確な遺構である。

出土遺物は第437図に示した。1755・1756は管状土鍾である。いずれも上端部を欠損している。

SX274

調査終盤に掘り下げをおこなった最終確認のトレンチで検出した遺物の集中部である。遺物の集中部はL9区で検出され、東西約30cm、南北約40cmの範囲に遺物の分布が認められた。遺物はすべて破片で、坏や甕などが認められた。

出土遺物は第438図に示した。1757は土師器坏で、内外面にナデ調整が行われている。1758は頭部がしまる形態の土師器甕で、これも内外面にナデ調整が行われている。1759は長胴形の土師器甕に復元されるもので、外面に刷毛目調整、内面に指圧痕が認められる。1760は胴部に丸みをもち、胴部外面中位に一對の把手を有する土師器甕である。底部を欠損しているため明かではないが、甕である可能性も考えられる。



第438図 SX274・SX283・SX300出土遺物(1/3)

SX283

L9区で検出された柱状の凹みである。東西約40cm、南北約15cm、深さ5cmで、ふたつの柱穴が重なったような平面形態を呈している。当初検出した際は柱穴である可能性を考え、掘り下げを行ったが、人為的な遺構ではなく、地表面に生じていた浅い凹みと判断した。土器片が出土したため、遺構番号を付して、取り上げを行っている。

出土遺物は第438図に示した。1761は土師器の甕である。胴部内外面に刷毛目調整、内面に指圧痕が認められる。

SX300

調査終盤に掘り下げをおこなった最終確認のトレンチで、遺物の集中部SX274が検出されたため、当該集中部を基点に周辺部を掘り下げた。掘り下げの範囲はK9～M10区を中心としたが、遺物が少量出土した。出土遺物の大半は小片で、遺物が集中する地点も認められなかった。この際に出土した遺物をSX300とし、位置とレベルを押さえて取り上げを行った。

出土遺物は第438図に示した。1762は土師器の坏で、内外面にナデ調整を行っている。1763は石製品で、側面を切断し、加工した痕跡が認められる。小片のため、その用途を明確にできていない。

第3節 小結

1 遺構の変遷

第439図は、第80次調査区の北に位置する第11・76次調査区、南に位置する第12・48・72次調査区の図面をつないだものである。この図面に沿って、第80次調査で検出された遺構群の性格を時期ごとに検討することによって、まとめとした。なお、第439図は第80次調査区周辺全体の状況と変遷を1枚の図面で表現するため、600分の1の縮尺で提示しているが、遺構の細部を表現するための図面を別途200分の1で提示した(第441～443図)。あわせて、参照されたい。

まず、「寺院」段階(14世紀前葉～16世紀前・中葉)の遺構群で最も注目されるものが、L字状に屈曲する堀(80次SD200)である。内部からは備前焼細鉢・在地系の土師質土器燗台や瓦質土器壺・周防からの搬入品と推定される大内Ⅲ式の白色系土師器皿などが共伴しており、遺構の年代は15世紀中葉から後葉に比定できる(402～406頁)。この堀はその位置関係からこの時期の称名寺の寺域を区画する遺構と判断される。ただし、称名寺の創建年代は暦応4年(1341)であるので、この堀は称名寺創建時の区画遺構ではない。14世紀代に遡る遺構は土坑や井戸などが検出されているが、創建時の寺域を区画する遺構については不明な点が多い。このような状況の中で、第2南北街路下で検出された柱穴列1や称名寺寺域の下層で検出された柱穴列2の性格が問題となるが、両者については詳細な構築年代を確定する材料が得られていない。柱穴列2に関連する遺構としては、第95次調査で柱穴列2と主軸を同じくする掘立柱建物が複数検出されている。掘立柱建物の中には礎盤石(柱穴内礎石)をもつものもあり、一部の柱穴からの出土遺物から、14世紀代に遡る可能性の高い遺構群である。今後、周辺地点の発掘調査が期待される。

寺域を区画する堀

柱穴列の性格

16世紀前葉～中世の溝

80次SD095は、16世紀前葉様から中葉に比定される溝である。第80次調査区では溝の南端部が確認されている。この溝は第11次調査区でも延長部が検出されており、さらにその北側の第88次調査区に伸びてゆく。出土遺物は薄手の京都系土師器皿を主体とするものの、第11次調査区では器壁の厚い京都系土師器皿も少量出土しており、最終的な埋没年代は16世紀後葉まで降る可能性もある(11次SD075)。溝の規模は小さいものの、その長さは60m以上および、当該時期の寺域またはは寺域内の区画遺構であった可能性が考えられる。

「大規模施設」段階の堀

次に、「大規模施設」段階の遺構群(16世紀後葉～1586年)である。この段階では旧寺域を拡張する形で新たな堀の掘削(80次SD101)がなされている。称名寺は永禄年間(1558～1570)に、大友宗麟の命によって沖の浜に移転するとされているので、旧寺域の拡張および堀の掘削は、称名寺移転後の出来事となる。この堀に囲まれた空間を「大規模施設」と仮称しているが、この施設の性格については、第2分冊に収録している「総括」(第9章)を参照されたい。

堀の下層からは漳州窯系青花が多数出土しており、その掘削年代は1570年代を遡らない。土層観察の結果、堀は水堀であったが、周囲からの生活廃棄物や土の流入により急速にその機能を失い、天正14年(1586)の島津侵攻時には底面から半分以上の深さまで埋没していたことが判明している。さらに、堀の上層には、島津侵攻時の焼土層が良好な状態で堆積している地点も認められた。第11次調査区では、この堀の東約3.5mの地点で溝(11次SD048)が検出されており、堀と溝の間に築地または低平な土塁状の高まりが構築されていたことが想定されている。この11次SD048は南側の第80次調査区では未検出であるが、北側の第88次調査区では延長部が確認されている(88次SD071)。

築地または土塁状の高まり

堀の西側には、豊後府内のメインストリートである第2南北街路が位置する。堀は掘削当初の段階では第2南北街路の東側溝を兼ねていたが、堀の埋没によってその機能を失い、島津侵攻の直前には新たに街路側溝SD090が構築されている。さらに街路の西側には、幅が狭く深さが深い溝SD201があり、この遺構は街路側溝であるとともに、街路のさらに西側に展開する町屋である「唐

唐人町を 区画する溝	人町」の前面を区画する溝であることが想定される。
木戸遺構	第2南北街路は構築当初の段階では路面にバラス敷きがなされ、礎石または柱穴内礎石を有する一対の柱穴および石列、小石や砂利敷きの広がりなどの施設を有する「木戸（釘貫）遺構」も構築されている。第48次・第12次調査の図面をつなげてみると、第2南北街路と名ヶ小路の交差点付近は鍵の手状（クランク）をなしていたことが明瞭に確認できる。交差点付近がいつ頃からクランクをなしていたかは、第12次調査区の遺構面が地山面まで完掘されていないため、現状では不明である。また土層断面の観察から、第2南北街路については十数回以上に及ぶ改修やメンテナンスがなされていることが確認されており、その中で唐人町側の街路側溝から堀に向かって傾斜する竹管を使用した「暗渠遺構」が形成されていた時期もあった。
クランク	なお、大規模施設段階の堀からは大量の遺物が出土しており、特に堀が機能していた時点の堆積層である下層からは木製品や動物遺存体なども存在する。遺物の中には、金箔土師器皿（第11次）や鍍金唐枕（第80次）・ガラス器（第88次）などの特殊な製品もあるが、大半は日常生活に伴って生じる残飯や廃棄物（ゴミ）である。出土遺物の中には、唐人町の領域である第14次調査で出土した遺物と遺構間接合するものが存在することなどから、遺物（当時としてはゴミ）の大半を廃棄したのは、第2南北街路を挟んで居住していた唐人町の住民であろう。
暗渠遺構	最後に、「町屋」段階（1587～1602年頃）の遺構群について概観する。天正14年（1586）の島津侵攻後、堀に囲まれた「大規模施設」は廃絶したと推定され、堀跡の窪地を埋め戻した上面に新たに礎石建物数棟が構築されている。礎石建物の背面には廃棄土坑や一定間隔で並ぶ井戸が認められ、これらの遺構群が典型的な「町屋」を構成する特徴的なものであることが分かる。つまり、第80次調査区付近は、島津侵攻後「大規模施設」から「町屋」へと空間利用が変化したことになる。中近世の町屋構造は、街路を挟んで向かい合う両側の地域の居住者がひとつの町を形成する「両側町」が一般的であることから、これらの町屋の遺構群は第2南北街路の東に展開する「唐人町」の領域に含まれることが想定される。つまり、前段階までは称名寺や大規模施設の存在によって「片側町」であった唐人町が、当該段階には「両側町」として新たに成立していたことになるのである。
ゴミを廃棄 したのは、 唐人町の 住人	「唐人町」は『天正一八年参宮帳』にその町名が認められ、島津侵攻時にはその大半が火災によって壊滅したと思われるが、その後数年を経て、町の住民は伊勢参宮を行うまでに復興を遂げていたことを示唆している。このように両側町となって復興を遂げた唐人町であったが、17世紀前葉以降の出土遺物はほとんど認められず、遺跡としてはこの段階で終焉を迎えている。これについては、唐人町の住人が府内藩主竹中重利による慶長七年（1602）の城下町移転政策によって、近世府内城下町に移住したためと考えられる。
「片側町」 から「両側 町」へ	この段階の第2南北街路や名ヶ小路についても、大規模な改修やメンテナンスが行われている。第2南北街路と名ヶ小路との交差点付近がクランクをなすことは前段階と変化がないが、島津侵攻時に形成された焼土層を路面上にかさ上げして、新たな路面を形成している。この段階では第80次調査区では木戸遺構は確認されていないが、第12次調査区では2本の柱穴による木戸の構築が確認されているようである。
近世城下町 への移転 政策	また、交差点付近には凝灰岩製の石材を使用した石組み側溝が新たに構築され、図示したような平面配置をなす側溝に造り替えられている。もっともこの凝灰岩製の石組み側溝についても、短期間でメンテナンスが必要になったようで、石組みの大半を安山岩製の石材に交換する改修がなされている。第72次調査の所見によると、この段階の名ヶ小路の北側には側溝は構築されず、石列（72次SX014）のみとなっているようだ。この安山岩を用いた石組み側溝もすぐに廃絶し、名ヶ小路の最終段階には、石組み側溝を覆い被せる形で瓦片敷きの街路が形成されている。
石組み側溝	
瓦片敷きの 街路	



「町屋」段層 (1537年～1602年頃)

「大規模施設」段層 (16世紀後半～1586年)

「寺院」段層 (14世紀前半～16世紀前・中葉)

第439図 第80次調査区周辺の遺構とその変遷 (1/600)

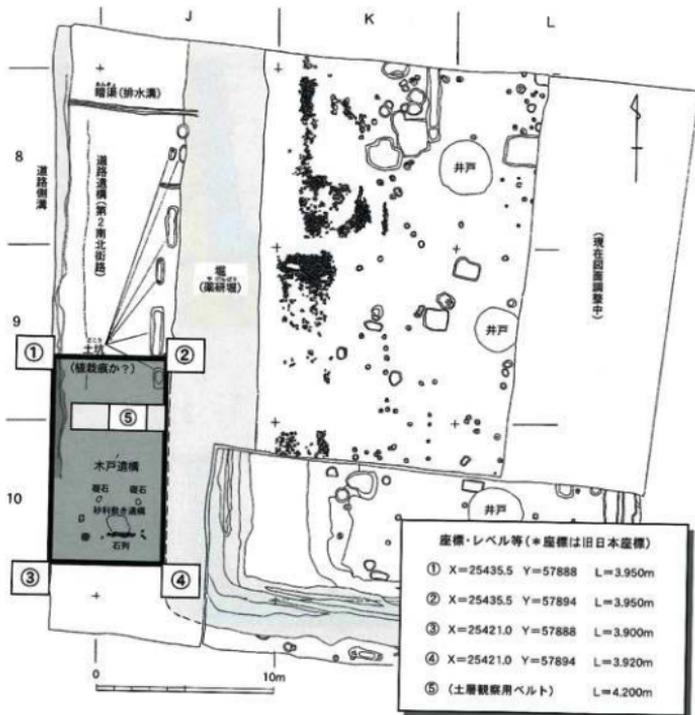
2 木戸（釘貫）遺構の埋め戻し保存について

前節でも報告したように、中世大友府内町跡第80次調査では礎石あるいは柱穴内礎石を有する一対の柱穴および石列、小石や砂利敷きの広がりなどの施設を有する「木戸（釘貫）遺構」が検出された（319頁）。中世大友府内町跡では、当該遺構の他にも第2南北街路で2箇所、第4南北街路で1箇所、木戸または木戸の可能性が高い遺構が検出されているが、いずれも柱穴または柱穴列を主要施設とするもので、礎石（あるいは柱穴内礎石）を有するものではない。

木戸遺構については、戦国時代の豊後府内の状況を描いたとされる「府内古図」にも表現されており、当時の都市構造を解明する上で重要な遺構と考えられるもののひとつである。また、第80次調査で確認された木戸遺構は、これまでに調査された木戸遺構の中でも特殊な構造を有するものとして注目される。このことに鑑みて、当該遺構は検出面以下の掘り下げや遺構の撤去を行わず、埋め戻しによる現状保存を行うことになった。

埋め戻しによる保存

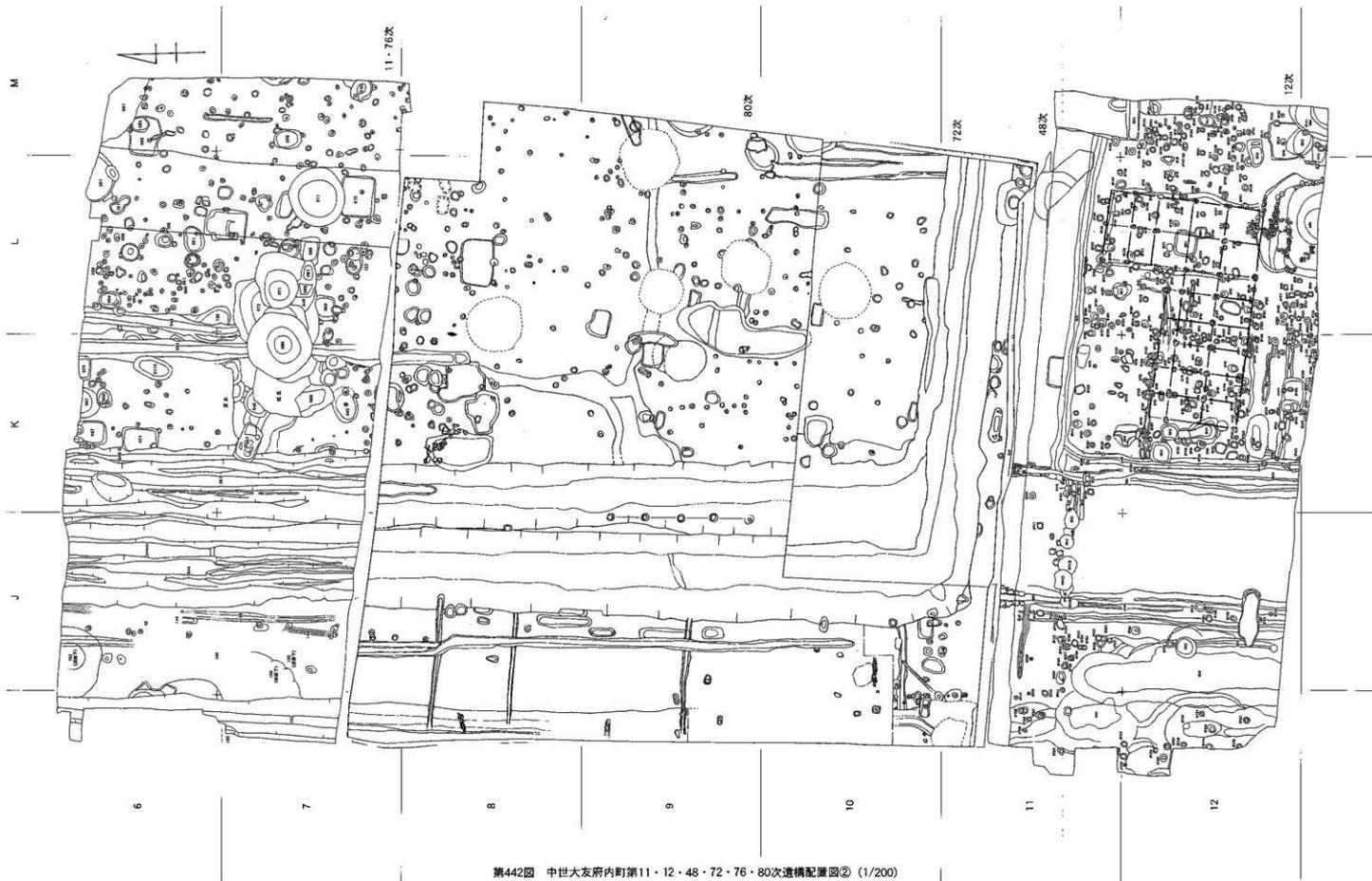
第440図は、大分県教育委員会が国土交通省に対して提出した遺構保存の要望に関する書類に添付した図面の一部改変である。幸いなことに、木戸遺構は国道建設工事による掘削深度より下に位置していたため、埋め戻しによる保存が可能となった。図面には遺構の位置とレベルが明示されているため、ここに掲載しておきたい。



第440図 木戸（釘貫）遺構の座標とレベル



第441図 中世大友府内町跡第11・12・48・72・76・80次遺構配置図① (1/200)



第442図 中世大友府内町跡第11・12・48・72・76・80次遺構配置図② (1/200)



第443図 中世大友府内町跡第11・12・48・72・76・80次遺構配置図③ (1/200)